

ふて矢張り法身といふものを留めて居るから己見と云ふ物を存する、故に法身邊に墮在してサツパリ動きが取れない、法身の處へ落ち込んで了つて居るから本當の悟といふ處に行かない、之を已到住著と言つても宜い、勿論已に到つて住著して居るけれども其處まで到れば餘程修行は進んだ人だ、併し已に到つて住著して居る之を水に譬ふれば止水であつて本當の活動したる活きた水とは言はれない、學問しても學問に留まり學問に落ち込んでは何にもならぬ、悟でも其通りで悟といふ處に唯々執著して了つては本當の悟ちや無い、法身／＼と言つて法身に墮在して了つては何の動きもありませぬ、是皆病の一つだ、其次は直饒透得放過即不可、是は放過の病をいふのであります、法身の邊を透得したけれ共自分の心を許してモウ是で宜いといふやうに放過しては不可ぬ、己はモウ悟つた勝手自在だといふのは本當の悟りちや無いから、放過即不可と申しました、宗門の言葉に、佛に到るも尙不退と言ふ、佛に到つても退いては不可ぬといふのは修行は一生の問題だ、學問は一生の問題だ、卒業なんといふ事は唯々學校を卒業したといふ丈けであつて學問の卒業ちや無い、卒業後の修行が大事だから放過遣りつ放しといふ事は何事でも

いけません、子細點檢將來有甚麼氣息亦是病、是は誠に微細な病である、子細に點檢し來れば何の氣息が有らんや何の氣息も無いといふ、是亦病で、是は放過の病だ、全體前のは未到走作と云ひ、一切處不明、面前有物是一透得、一切法空、隱隱地似有箇物相似、是光不透脫、といふ事に當るのであります、今度は何の氣息か有らんと、いふ迄に一つ透脫した即ち已到住著したけれ共矢張り依る處が無いから、透脫無依の病氣に罹つて居る、今言ふ通り折角悟つたが透脫無依でありますから早く言つて見ると未だ繩に縛られて自由に出來ぬ、此方の方は大分好くなつたけれ共未だ是は金の鎖に縛られて居る、繩で縛られたのより宜いかも知れませぬ、けれ共動くことの出來ない處は金の鎖でも繩でも同じ事だ、唯々違つて居るのは丁度、未到走作といふ事は繩で縛られて居る方であるが、繩で縛られた方は好い鹽梅に解けたけれ共、今度は金の鎖で縛られたといふの違である、兎に角矢張り縛られて自由になる事が出來ないのは同じ事だ、どれ程財産家になつてもさうだらうと思ふ、唯々溜めた切りで何の慈善もせず公共事業もしない即ち法身邊に墮在して居り、又モウ己は學者である勝手次第な事をやるのに何の羈束かあらんといふやうな類は、透

脱無依の病氣に罹つて居るのです、本則の方は唯々病氣ばかりを説いてあります
が頌の方には病氣の癒つた人の働きのあります。

〔頌〕頌云。森羅萬象許崢嶸、透脱無方礙眼睛、掃彼門庭誰
有力、隱人胷次自成情、船橫野渡涵秋碧、棹入蘆花照雪明、
串錦老漁懷就市、飄飄一葉浪頭行。

【讀方】森羅萬象崢嶸に許す、透脱無方なるも眼睛を礙ふ、彼の門庭を拂つて誰か力
有る、人の胷次に隠れて自から情を成す、船は野渡の秋を涵して碧なるに横へ、棹
は蘆花の雪を照して明なるに入る、串錦の老漁市に就かんことを懐ひ飄飄とし
て一葉浪頭に行く。

【講話】頌云。森羅萬象許崢嶸。以下の四句は前の能取光と所取光の方を言ふ、先づ森
羅萬象とは天の日月より地の山河大地、人畜に至るまで森羅で萬象あります、許崢
嶸といふのは山の高い處は高いに任せる外ないと言ふ、之を本則に當て、見ると
一切處不明、面前有物是一といふ處である、透脱無方礙眼睛といふのは、透得一切法

空隱隱地似有箇物相似といふ處でせう、透脱して見ると實に無方だ、東も西も有つ
たものぢや無いなんといふ事を言ふ、本來無東西、何處有南北、で、成程結構だ、結
構だけ共今度は無方といふ事に眼睛を礙えられて無方病に落ち無方に縛られ
て居ると言つて随分どうも偉い事を言つた、ナニ方角なんといふものは有るもの
では無いかも知れないけれ共が、無方なるものに眼睛を礙えられて了ふ、掃彼門庭
誰有力、是は森羅萬象許崢嶸といふ句に應ずると思ふ、門庭は庭の事で我庭に山が
突兀としてあるがそれを誰か掃ふ力があるか、どんな力士が來ても山を取除ける
譯にはいかぬ、山は山に任して置く外なく、海は海に任して置く外仕方が無い、誰に
も取除けるといふ事は出來る話で無い、隱人胷次自成情、是は人は落付いたやうな
事を言つて居るが、朝から晩まで人の胸次―胸の内は亂れて色々な妄想が起るな
人には見へないものだ、それを人の胸次に隠れて自から情を成して居るといふの
です、せぬでも宜いやうな思遣りを爲し自分で分別を重ねてさうして人の胸次に
隠れて自から情を成す、是れを本則の「隱隱地似有箇物相似」といふのであります、そ
れから本則の「法身亦有兩般病」といふ方に應じて景色を持つて來て言つたのが面

白い船横野渡。涵秋碧野渡といふのは野の渡場だ。秋の水が澄むで青々とした處に船を横へて居ると言ふ。唯々景色ばかりの事に止つて居ります。此水の景色は自から止つて居る色が有る。是は法身邊に墮在するといふ事でありませぬ。法身は宜い事だけ共それに墮在して了つては、唯々景色に氣を取られて了つて自分の家に歸る事もせず所謂船横野渡涵秋碧である。そんな處に居つては不可ぬ。それから棹入。蘆花照雪。明。是は何を言ふかといふと本則の直饒透得放過。即不可。子細點檢有甚麼氣息。亦是病。といふ處を指して言ふ。前の句に船と言ふたから此句に棹と言つたものだ。そうして蘆花の眞白い花へ雪が降つて、蘆も白いし雪も白く誠にどうも白い景色の好い處である。けれ共是は宗門から言ふと之を明白裏といひ、又一色邊とも言うて駄目です。明白裏とは蘆の花が白し雪も白し誠に白く一面の銀世界の處に船に棹して其處に行つた。それは誠に景色は好いけれども景色の好い處は一色邊で白く一方だ。唯々潔白といふ事を圖られたのは是も病氣です。是れは明白裏といふ病氣だ。明白裏即ち潔癖で此の病氣の人が随分あります。だから宗門ちや此明白裏に止つて居つては不可ぬといふ。趙州は老僧は明白裏にも居らすと云た。明白裏

まで行つた人、一色邊まで行つた人は餘程好い悟りだけ共其處に居つたばかりでは何の役にも立たぬ。所謂百尺竿頭に上つた丈けでその百尺竿頭から歩みを進めて自由自在に働かんければならぬ。其歩みを進めた以上觀音が三十三身を現じた。即ち觀音は明白裏にも一色邊にも居らない。下の方に降つて魚賣になつたり色の姿を現はして居る。唯々自分が悟つたきりちや不可ぬ。己の通り人をもどうか此處へ引寄せてやりたといふ働きの無ければならぬ。前に船の事を言つたから今度は申。錦老漁。懷就市。飄飄一葉浪頭行。と言つた。能くも斯う云ふ自由な事が言はれたものだ。是が高い處に居らない事を言ふので、モウ充分魚は釣つた。それを釣つた丈けで置いては何にも國益にも人の爲にもならぬ。それだから魚を釣つた所の串錦の老漁が誠に新鮮の魚を串にさして、どうか之を賣りたいといふて市町の賑かな處へ出た。是は觀音が三十三身に身を現する處である。飄飄として一葉の舟は風に任せて陸の方に來て市町に魚を賣つてさうして人の爲になつて行く。所謂その機に應じて法を説いてどうか自分の境界に人を進めてやりたいといふ働きの示した。是は學問の上でも財産の上でも是が必要でせう。自分さへ宜ければ宜いとい

ふ譯ぢや無い、今日は是丈けに致します。

第十二則 地藏種田

【垂示】示衆云。才子筆耕、辯士舌耕、我納僧家慵看露地白牛、不顧無根瑞草、如何度日。

【讀方】衆に示して云く、才子は筆耕し、辯士は舌耕す、我が納僧家、露地の白牛を看るに慵し、無根の瑞草を顧みず、如何が日を度らん。

【講話】才子筆耕、辯士舌耕、今日は隨分斯う云ふ才子は澤山居る、或は新聞に、或は雜誌に、自由自在に論説を書いたりして筆で以て食つて行く人が隨分多い、是れは先づ才子だ、又辯士は宗門の中にも澤山出來ました以前は饒舌る人は少なかつたけれども、黙つて居つても徳の有る人が多かつたが、此頃では饒舌る事は誠に上手でも、饒舌る程それ丈け徳の無い人が多いやうに思はれる、彼方へ行つたり此方へ行つたり或はし演説をし法話をし饒舌つて衣食する人が隨分ある、けれ共さう云ふ事は眞實佛法の上に大した役に立つた話で無い、心に安心をして徳を修め人を

感化するといふ人にならんければ本當の佛教者ではありませんまい、けれ共ナカナカ黙つて居つて徳で人を感化して行くなんといふ人は今日は誠に少い、我納僧家、専門の僧侶を納僧家といふ、此専門の僧は誠に淡泊にして華麗に飾らないのが本當だ、衲は衲衣なんと言つて百綴りの法衣を著、枯淡な生活に甘じて、さうして今の無限の理を自分の物にして行くといふのが我納僧家である、慵看露地白牛、露地の白牛といふ事は法華の中に大乘一乘の白牛車といふ事が有る、法華で、一乘の法門を説くに白牛一白いと言うたら清淨潔白の事だ、清淨潔白と言うたらチョツとも垢が無いといふのだ、さうして此處へ牛といふ事を出したのは前の方に耕といふ事があるからだ、此處で牛と言ふたから此下の句には無根瑞草と云ふ、草と云ふ字は前の牛と云ふ字より出て矢張り耕すと云ふ字の縁を假りて來て言つて居るのである、白牛車といふ事を説明しますると、三身といふ事がある、法身と報身と應身の三つを三身といふので、法身といふのは形は無いけれ共此宇宙に遍滿して居るものだ、形が無いから宇宙に全體遍滿して居る、故に形が無いやうで必ず實在して居るものだ、それを人格的の上へ持つて行くと法身となる、それから因縁に依つ

て人間の身體を受け立派に修行して智徳圓滿の相すがたになつた阿彌陀様の相は正しく報身である、人間同様の相を現はしてさうして粗に入り細に入つて人を濟度しに行くといふのが應身だ、さうすると法身、報身、應身三つに分けたもの、是皆三身に即一のものだ、何故なれば法身といふものは無相にして平等なものだ、それが因縁に觸れて人間の形になつて修行をして智徳圓滿の相、立派な佛の相となつたのが所謂報身となり、其の報身の相が立派なばかりではズーツと下等社會に力を及ぼす事は出来ないからそれで報身の立派な相を隠して、さうして粗弊垢穢なる著物を著けて鹿野園に降つて四諦の法門を説くといふのが所謂應身である、即ち分てば三つになるけれ共、全體は一つのものだ、一つの物が働きの上に於て違ふて來たのである、起信論を見るに體、相、用といふ事が言つてある、是れが丁度三身即一に當ると思ふ、體といふ事は無差別の本體で、是が因縁に觸れば相の差別の形と現はれ、それから用といふ働きが出て來たのである、體、相、用の三つはどうしても離れたものでは無い、此コツブといふ物は即ち體だ、體と言へば必ず相といふものが有る、相が有れば水を入れるといふ用はチャンと具はつたものだ、之を月に喩へて見れば、

法身といふのは先づ月の清涼にして光のある如きものだ、清涼と光といふのは形は無いからそれを捉へる事もどうする事も出来ぬ、さうして見ると光や清涼といふものは法身だ、それから十五夜の月の圓く立派に現はれたのが報身だ、缺目の無い立派な姿形の現はれたのが報身、それから天に於ては月は唯一つだけ共、千江水あれば千江の月で、色々草葉の露にも盪の中にも海の中にも色々な姿を現はして映る、是が應身だ、更に花に喩へたならば花に香といふものがある、馨るといふ事は有るけれ共、香には形相は無いそれが所謂法身だ、香といふものは捉へて見る事は出来ないがその花が赤いとか黄いとか或は立派な色澤がある、是れが所謂報身である、花には色々な花がある、野菊のやうな小さな花も有れば芍薬のやうな大きな花も有る、色々姿が違ふのは謂ふる應身である、何にでも法、報、應の三身は有る、私が斯うして居りますが所謂法身を離れて私は有りはしない、法身が唯々因縁に依つて、父母の力を借りて茲に現はれた、だから法身といふものは宇宙の精神とでも申しますか、宇宙の精神といふものは誰でも具はつたものである、それから報身といふのは其人の修行、其人の勉強に依つて立派な相にもなるでせうが、其人が修行

をせず悪い事をして居つたら立派な相は現はれるものでは無い、其人の修行に依り修養に依つて立派な身體になるのだから報ひ來るので、報の字は報ひて來るといふ事であり、其人の修養の力に依つて何時生れても立派な人になるといふのが所謂報身だ、それから又應身といふのは其機に應ずる道理にして、百姓に逢つたら百姓相應に國家の爲になるやうに話をして行く、車夫に對しては車夫に相應な話をして行き、學者に逢ふたら學者相應な話をして行つて、向ふの機に應じてそれに相應な話をして行くのが所謂應身です、其形を現はして行くと言つても宜い、だから法、報、應の三身といふ事は何にでも具足したもので、人類のみにあらず器物の上にも皆有る、是の處で露地の白牛といふのは報身で立派な相に現はれた佛だ、けれ共それを見るに、慵しといふのは、露地白牛は立派な報身で大乘一乘の法門だから見ても宜さうなものぢやが、その所謂佛の處でも執著して居たら、佛の一字も心田の汚れである、立派だ、と言つてそれに執著して居るのは不可い、そこで愛すると云事と執著するといふ事は大變違ふ、佛は尊崇しなければならぬが、佛に縛られる事は要らない、今日でもさうでせう、途中に於て知音とか目上の人に逢

つたならば、挨拶を丁寧にし尊敬をしなければならぬ、けれ共別に諂ふといふ事は要らない、だから挨拶、といふ事と諂ふといふ事は大變違ふ、佛にしても敬ふといふ事と執著するといふ事は大變な違になつて來る、此露地の白牛が好い物だ、好い物だと捉まへて居る間は本當の處へ未だ到らない、矢張り一つの病氣に罹つて居る、だから眞實衲僧家の人は露地の白牛を見るに慵しと斯う行かんければいかぬ、古人の言葉に、佛の一字も心田の汚れと言つて居る、それはさうでせう、ズーツと迷と悟を離れた絶對の本分の處へ行つたら佛といふ名前も矢張り汚れである、誠に立派に晒し上げた物へ指痕をつけたと同じやうなものだ、その絶對本然の處へ行つたら佛といふのも早や汚れた、さう云ふ人から見たら慵、看露地白牛で無くちやならぬ、不願無根瑞草といふのは根の無い草といふのだが、全體根の無い草といふ物は有るもので無い、所が私が考へるに草は皆根が無いと思ふ、御經の中に「無根樹」といふ事を言つて居る、七賢女經といふ御經の中に七人の娘が悟つたといふ事がある、すると帝釋天がそれをえらく贊嘆した、貴女方は誠に好い悟を開いた、貴女方の求めるものは何でも私は進げるから要求して呉れと言つた時に、七賢女がどう

か無根樹を欲しいと斯う言つた。又山の奥へ行つて谷でオーイと言つて呼ばるゝ向でも返事をするが、呼んでも響がない。谷を貫きたいと斯う云ふ注文です。そこで帝釋天は因つて了うた。私は何でも有るけれ共呼んでも響がないといふ。谷は私の處に有りはしない。根の無い樹も私の處に一株も有はしない。マア仕方が無いから釋尊の處へ私と一緒に行きませうと言つた話がある。私は全體根の有る木も皆無根樹だと思ふ。なせだといふと佛教の上では皆因縁で出來た物は無性と説く。一切のものは暫くの間唯分子が集合して形が出來たのだからそれを分析して了ふと矢張り無性の物だ。だから立派な松が生へて居るけれ共誠に無根樹と言つて宜からう。私が此處で饒舌つて居るけれ共、燒けば灰となり埋めば土となる。何にも秋野といふ塊物が有る譯では無い。誠に無性の物が唯饒舌つて居る。有性で無性だ。全體無根樹といふのも私はそれで宜いと思ひます。處がこゝでは無根の瑞草——目出度い草といふ。瑞草と言つたらマア報身の内徳だ。報身の内に在つて外の方に現はれない。智慧と徳相、その智慧徳相を無根の瑞草といふて宜い。けれ共不願無根瑞草といふと、是れも捨て、絶對に迷だの悟などいふものを離れて了つた處からいふ

と、内證の智徳なんと言ふのも全體モウ早や疵だ。矢張りさう言ふのも無根の瑞草だ。その瑞草をも願みずといふ處まで修行が行くと宜い。所が多くの人は無根の瑞草に捉はれて了ふ。又露地の白牛は清淨で宜いといふ處に執著して了ふ。さう云ふものを刎ね除けて了つて誠に、絶學無爲、閑道人、不除妄想、不求眞、といふやうになると宜い。學んで、學び盡して了つて何にも求める所が無いのが是が無爲だ。その無爲の閑道人——閑道人と言つても閑な食潰しの事を言ふのぢや無い。モウ實に求め根性が無くなつて了つたから除く可き妄想といふのも無い。眞實の法を合點して見ると此境界になる。平生モウ無爲にしてチャンと道に合して知らず識らず帝の則に契ふとか、又は七十にして心の欲する所に従つて矩を踰えずといふやうになるのです。何でも道を忘れてはならないと言つて居る内は駄目です。知らず識らずチャンと道に合體するやうに其人の境界が露地の白牛を看るに備く、無根の瑞草を願みずといふ人になると宜いです。些とばかり悟つて居ると悟を持つて歩いて、唯悟つた眞似ばかりして握拳を出して見たり喝！ッなんと言て見たりしても鳥も逃げはしない。だから古人は全體眞實の處まで手を引いて下さるのだ。さて斯

ういふ境界に達した人の日暮しは怎んな風であるか、今この本則の地藏がその人である。

【本則】舉。地藏問脩山主。甚處來。脩云。南方來。藏云。南方近日佛法如何。脩云。商量浩浩地。藏云。爭如我這裏種田搏飯喫。脩云。爭奈三界何。藏云。備喚甚麼作三界。

【讀方】舉す。地藏脩山主に問ふ。甚れの處より來る。脩云く。南方より來る。藏云く。南方

近日佛法如何ん。脩云く。商量浩浩地。藏云く。爭か如かん我が這裏田を種へ飯を搏

めて喫せんには。脩云く。三界を爭奈何せん。藏云く。爾甚麼を喚んでか三界と作す。

【講話】全體地藏といふのは羅漢院の桂琛禪師といふ人だ。此人を何故地藏と言ふかは、是は支那漳州の知事が此桂琛和尚にえらい歸依してさうして地藏院といふ寺を建つて桂琛和尚を請待した、それから桂琛和尚の事を地藏とも言ふのだ。舉。地藏問。脩山主。甚處來。或る時脩山主、法眼、悟空、進山主の四人で山川を跋涉し方々の知識を尋ねて修行した、すると雪に阻てられて歩く事が出来ないで、地藏の處へ來て滯

在した、そうして爐の中に矢鱈に木でもくべて皆寒い、と言つてあたつて居つたと見える處で四人の坊さんがナニ此處の和尚は凡暗だと思つて地藏を馬鹿にして居つた、するといふと地藏が初めに脩山主に向つて言ふに、お前さんは能く寒いのにこゝへ來てくれた、お前さん方に問ふ事が有るが許して呉れるかどうか、それは何でも問うが宜いと脩山主が言つた、地藏が言ふのに、山河大地與上座、是同是別上座といふのは四人の事だ、お前方と山河大地と同じものか別かい？斯う言ふと、脩山主がそれは別だと斯う言つた、すると地藏が指二本立つた、別といふと二つだ！、それちや二つになつて居る！、脩山主が忽ちに同じだ、と言ふ、又地藏が指を二本立つた、別といふ奴が言換へて同じだ、と言ふ、即ち別といふ奴と同じといふ奴とあるから矢張り指を二本出した、之を能く見たのが法眼です、法眼が脩山主に向つてどうだ此處の和尚は別だと言つても指を二本立つ、同じだと言つても二本立つ、斯う言ふと、脩山主がナニ此處の和尚は耄けて居るか大方氣狂だらう、すると法眼がさうで無い私は地藏和尚に見處が有る、お前さん方は餘處へ行つて修行するが宜い、私は此處へ留つて修行すると言ふと、斯んな氣狂みたやうな和尚の

處に居つても仕方が無いと申して、三人は他處へ行つて了つたが法眼一人は其處に留つて居つた、其頃南方は禪宗が盛んであつたので三人は南方へ行つたと見える、行つたけれ共何處を尋ねて見ても夫程の人が無かつたので又歸つて來た、それから此問答になる、舉地藏問脩山主甚處來、脩山主が再び歸つて來たから、お前は何處から今日來た、此處が大變響きがある、是は迂つかり聞かれた言葉ぢや無い、甚處來、と言はれたら全體脚下に氣を附けねばならぬ、今日人が歩いて居つても脚下を御留守にして居る人は幾ら有るか知れぬ、自分が平生其處に居つたら迂つかりしちや歩きはすまいと思ふ、だから此言葉には餘程響きか有ると思ふ、すると脩山主が正直に、イヤ私は南方から參りました、南方の禪を尋ねやうと思つて南方へ行きました、是は江西湖南とやうて支那へ御出でになつた方は御承知でせうが湖南の方は石頭和尚の居る方で大變佛法の盛んな方だ、そこで私は湖南の方から來たと斯うやつた、全體南方から來ましたといふ中には、大變自分が鼻を高くして居る鹽梅が見える、どうも、今日でも、私が地方に居る時は若い雲水などが來る、此僧は東京から來た事を知つて居るけれ共お前今日何處から來たといふと、私は大學を卒業

したなんてそんな事迄言はなくても宜いのに馬鹿に鼻息の強いのも有る、此方ぢや全體脚下を見て居るのにそんな事を知らずイヤ、私は今日卒業して今歸りです、なんとやつたやうな筆法で、南方から來たといふのは餘程自分が鼻を高くした鹽梅が有る、そこで地藏がモウ一遍言つて見やうと思つて南方近日佛法如何南の方は佛教が盛んだといふ事を聞いては居つたけれ共、近日の佛法は如何であるか、と問ふと、脩山主はスツカリ調子附いて了つて、それは盛んにも何にも實に商量浩浩地であります、商量といふのは譬へば商人が安いとか高いとか負けるとか負けられないとかいふのが所謂商量だ、浩浩地といふのは廣いとか盛んなとかいふ事で、その盛んな事は彼方へ行つても演説、此方へ行つても法話と、それはマア説心説性と言ふか或は談玄談妙と言ふのか、實に盛んだとも何とも言ひ様の無い位でありますと言つた、けれ共唯、説いて見た處が心を悟り性を悟らねば不可ぬ、玄を諦らめ妙を悟らねば駄目だ、唯、説談といふて話ばかりやつて居つては何でも無いのです、所で脩山主は自分の脚下も何も忘れてそれは盛んだとも何とも商量浩浩地だと言ふ、垂示の所謂才子筆耕、辯士舌耕といふ處に能く當る、地藏の方ではモウ是は大

概修行は分つた奴だ、何だか能く饒舌べるけれ共脚下はまるで御留守だ、鼻先ばかり強くて佛法を知らないといふ事を地蔵和尚がチャンと見て取つたらうと思ふ、そこで地蔵の言ふ事に争如我這裏種田搏飯喫さうかな南方はそんなに佛法が盛んかいな、併し私の方には及ぶまい、山僧はね、毎日田を作つて米を採つて飯を搏める、搏食といふて印度ではムスビにして食べるといふ事である、毎日丹精して米を作つて搏食して居ると言つた、是は何だといふと實に佛法臭い處、悟り臭い處も何にも無く、何も知り切つて悟りを開いて、モウ働きを仕盡して、絶學無爲閑道人、不除妄想、不求眞、といふやうになつて居る、悟り臭い處も佛法臭い處も坊主臭い處も無ければ實に智惠徳相を離れて了つて誠に平生の上の話だ、此處が垂示の備看露地、白牛、不願無根、瑞草、といふ處だ、是が未だ脩山主の耳に這入らないから心配し出した脩云、争奈三界何、それはお前さんそんな田を作つて飯を食つて居つたばかりでは詰らぬ話ぢや無いか、それぢや三界を透脱するにはどうするのだ、三界といふ事は御承知の通り、欲界、色界、無色界、是皆佛法で言ふ生死の世界、皆苦の世界だ、どうしてお前さんはそんな事をして居て苦しい三界を透脱する事は出来ぬぢや無いかと斯う言つた、是は脩山主は無暗と三界が苦になつて仕方が無いと見える、全體三界は向に斗り在ると思はぬが宜い、此身體の中にも在る、欲、といふても商賣する人が當前に利益を儲けるといふ事は欲では無い、貪欲といふて、道を外づれて人を蹴落しても自分さへ宜ければ宜いといふのは不可ぬ、是が三界の中の一つだ、又色界の色、といふのは自分の姿形のこと、唯々執著して迷つて居る人は幾らも有る、又死にたく無い死にたく無いといふて身體に迷つて居る人が有るが、死にたく無いと思つても是は生有れば死ありで極り切つた話である、それよりは何時死んでも宜いといふ覺悟した方が宜からうと思ふ、若し死にたく無ければ生れて來ない方が宜い、斯く此身體に迷ふのが色界だ、無色界といふのは何でも空な物だ、姿形は無いものだ、といふやうな處に執著して居るのが無色界の妄執である、それは離れたならば三界はソツクリ出三界だ、此の如く三界の中に出三界が有る、其人に依つては三界の中に居つて三界を出て了つて居る、それは自分が欲の爲にも色の爲にも苦しんで居らぬ、さういふ人は執著を離れた人だから、三界の中に居つて三界を透脱して居る、即ち生死の中に居つて生死を離れて居る、地蔵和尚は三

第十二則 地藏種田

界の中に居つて三界を出で、生死の中に居つて生死を離れて了つて居る、又空無相だといふやうな無相病にも罹つて居らない。解脱上人は、執著あるを穢土と云ひ執著なきを淨土といふと言はれた、至つて簡単な言葉だけれ共佛法を合點した人の言ふ事は一言で既に盡きて了つて居る、何も淨土、穢土といふものが隣り合せどころちや無い、一枚の紙の裏と表みたやうなもので淨土を引繰り返せば穢土、穢土を引繰り返せば淨土で全體一つのものだ、それが執著の有無で穢土とも淨土ともなるのだ、此執著の迷を一つ離れて了ふと穢土も淨土だ、心清ければ國土清しで、娑婆世界がそつくり淨土だ、是は維摩經の中に在る話だが、螺髻梵天には此世界が奇麗に見えた、舍利弗が見たら山も有れば河も有り誠に穢い世界に見えた、同じ一の世界でも其人の見方に依つて奇麗な世界とも穢い世界とも見える、だから全體地藏和尚には三界などいふものは有りはしない、だから彌喚甚麼作三界と言ふた、何か三界といふものが何處かに在るかい、私の處には三界なんといふものは有りはしない、何を指して三界なんと言つて居るのだと言ふた鹽梅だ。

〔頌〕 頌云。宗說般般盡強爲、流傳耳口便支離、種田搏飯家
常事、不是飽參人不知、參飽明知無所求、子房終不貴封侯、
忘機歸去同魚鳥、濯足滄浪煙水秋。

【讀方】宗說般般盡強爲、耳口に流傳すれば便ち支離、田を種え飯を搏む家常の事、是れ飽參の人にあらんば知らず、參じて飽いて明かに知る所求無きことを、子房終に封侯を貴ばず、機を忘じ歸り去つて魚鳥に同じうす、足を濯ふ滄浪煙水の秋。

【講話】頌云。宗說般般盡強爲、是は宗通說通といふ事があるが、宗に通ずると云ふのは自分の悟りで謂はゞ自利の方である、說通と云ふのは利他の方になる、宗通で法の本源に達して成程と悟る、悟つたならば今度は人の爲めに之を説かんければ不可ぬ、言葉を換へていはゞ宗と云は實智で、説といふは權智だ、實智といふのは自分が悟つて自分に持つて居る智慧である、權智といふのは色々人の爲に説く方便もある、人の機に應じて説くから權の智だ、扱此宗通說通といふものは入用なものではあるけれ共、全體ブーッと法の根原、絶對の處に行つて見るとさう云ふ事は無

理遣りに強ひて爲して居るのだ、佛が四十九年說法したのもアレは全體強ひて爲して居る、本當に悟つた人ばかり世界に居つたならばモウ宗通も説通も要らない筈だ、けれ共まだ迷つて居る人が居るから佛が悟つた其悟りの智慧から今度は權智を以て自由自在に説いたのである、つまり悉く皆強ひて爲して居るものである、**流傳耳口便支離**、**流傳耳口**といふのは、今日の學問が皆耳口です、是は左傳に、汝が口より出でて汝が耳に入る、とある、成程私が今話をして居る處は私の口から出て矢張り耳に這入つて居る、唯口で説いて汝の耳に入る迄である、又斯う云ふ事も言つてある、小人の學は耳より入りて口より出づ、是れを耳口三寸の學と言ふ、耳から聞いて口から饒舌るといふ唯三寸か四寸丈の學問で未だ腸を需すもので無い、小人の學は成程さうかも知れない、夫故に耳口に流傳して支離といふやうに佛法が皆滅茶苦茶になつて了ふ、本當の本體が無くなつて枝ばかりになつて了ふ、佛法も禪宗もさうだ、元とは一つのものだけでも、支那へ來て五派に分れた、元と一乘の法門であつたものが二乗だの三乗だのに分れ、此調子で行くと終ひには本當の生粹の物が無くなつて了ふかも知れぬ、だから支離して唯型ばかりになつて本當の

處は無くなつて來る、商量浩浩地などいふて口でばかり饒舌つてもそれは耳口に流傳する丈けのものである、それから次には地藏の境界を申すので、**種田搏飯家**常事、田を作つて飯を搏めて食つて居るといふのが平常の仕事だといふのは、佛法臭い處、悟り臭い處を離れて了つたと云ふのだ、**不是飽參人不知**、それはモウ飽參人といふて方々參禪して悟り抜いて了つて大安心を得た人で無ければ解るもので無い、だから**參飽明知無所求**、此參し飽くといふ事は難い事だ、途中で皆悟つたやうな氣になつて了ふが、此參し飽くやうになると此上求める處も何にも無いやうになつて了ふ、佛にならうの悟りを得やうのと言つて居るうちは未だ參し飽きはしない、參し飽いた人は佛にならうの望もなく、又佛の處に留つても居らない、何も求むる所が無い、**子房終不貴封侯**、子房は漢の張良のことだ、張良といふ人は漢の高祖に事へて大功を成した人だ、籌を帷幄の中に運らし勝を千里の外に決するは子房の功なり、と言はれた、皇帝はその大功を賞する爲に齊の三萬戸に封すと言はれた、すると張良はイヤ私の微力を盡した事は臣下として當前の話で、私は大名に取立て、貰はぬでも私が初から居ました留といふ處丈けに封せられ、ば宜いと言つ

た事が有る張良は未だ留といふ處は欲しかつたと見える、此處は佛法の上からいふと、菩提だの涅槃だの悟だなんてそんな事は私は厭だそんな事は聞きたうも無いといふ鹽梅があるが、地藏の境界は其通りだ、尙終りの二句は「越格超宗」でも言ふか、地藏の境界實に宗も超え格も越えて居る、忘機歸去同魚鳥、世の中の機關なんといふものは皆忘れ、悟り臭い、佛法臭い處が皆無くなつて了つて野心も何もない魚鳥に同じだといふ事である、ナカノ、其魚鳥に同うするといふ人は無い、野心のある人は寢ても眠れまいと思ふ、世の中に不平を持つてさうして魚鳥に同うして居るといふ人が有るかも知れぬが、よし在つたにしてもそれは唯口ばかりであらふ、精神から全體魚鳥に同うする處まで行かんければ本當で無い、濯足滄浪煙水秋、秋になると海の水が澄んで見える、是で足を濯ふといふ事は彼の離騷經の漁父歌に「滄浪之水清兮可以濯我纓、滄浪之水濁兮可以濯我足」といふ事がある、その様にモウ悟りだの佛法だのといふやうな臭い處は濯つて了つた即ち「見聞一々隨地去、日用都如井覩驢」といふ境界であらうと思ふ、眼で以て見、耳で以て聞く、見る上も聞く上も唯々唯々他に随ひ去つてチヨツとも執著をしない、又迷ふといふ事も無い、了

度日常の働きは總て井の驢を見るが如しである、驢が井戸を見るごときに影が映る、驢は水鏡をしやうと思つた譯では無い、けれ共まだ何だか見やうと思つたやうな氣持が有るから、井の驢を見るが如しと言つても宜い、そうして井の驢を見たと言たら是は分別の無い事を言ふ、井戸の方から驢を見たと言うたらモウさう云ふ分別は無い、是が二つになります、井の驢を見るが如しといふ事と驢の井を見るが如しといふ事とありますが、驢には心が有るから自分が水鏡でも取らうと求めたやうに見える、それを引繰り返しても井の驢を見るが如しと言うたので大變面白い、さう云ふ分別を離れた處をいふので分別が悪いといふのちや無い。

第十三則 臨濟瞎驢

【垂示】示衆云。一向爲人不知有己、直須盡法、不管無民、須是拗折木枕、惡手脚、臨行之際、合作麼生。

【讀方】衆に示して云く、一向に人の爲にして己れあることを知らず、直に須らく法を盡して民無きことを管せざるべし、須らく是れ木枕を拗折する、惡手脚なるべ

し、行に臨むの際、合に作麼生。

【講話】一。向爲人不知有己といふことは自分の身體を忘れて了つて、さうして唯人の爲にばかりして居ると云ふことである。兒を憐んで醜きを忘すといふことがあるが、お祖母さんが子供を育てるところを見て居ると、親切の餘りに、少し硬い物があれば自分で嚼み碎いて子供の口に含まして遣る。此方から見ると居ると實に醜い、けれどもアレは唯子供が可愛くてつまり慈悲の餘りに自分の身體の醜きを忘れて行るのである。全體人を世話をする――宗門で言ひますると、衲僧家たる者は人を指導する上にも其心がなければならぬ。唯々人の爲に自分の身を忘れて了つて行くところの慈悲心が無ければ本當に世話の出来るものではない、さうかと云つて又慈悲ばかりで行つてもいかぬ、そこで直須盡法、不管無民法を盡すと云ふことは規則として云つて法の通りに行つて私を容れないことである、更に一面から云ふと自分の技倆一杯に行つて行くことで、之も必要である、君主が法の通りに厳しく行ると民は無いやうになつて了ふ、私の處にも雲水が澤山居りますが、餘り嚴重に行ると病氣だとか何んとか言つて段々と雲水が歸つて行く、けれども本當の人

物を拵えるには、そんなことに頓著せず、即ち私を容れずにやらなければ逆も人物は出来るものでない。此の直須盡法、不管無民法といふのは智慧の方から言つたので、智慧と云ふと冷かな方だ、前の己を忘れて人の爲にすと云ふのは慈悲の方で何んとなく温かいところがある。人を接待して行くのには矢張り慈悲の溢れたところに嚴しいところが無ければならぬ、さればとて無暗に嚴しい方ばかりでも行くものでないから、慈悲と智慧との両方が備はらなければならぬのである、それ故に須是拗折木枕、惡手脚、木枕とは宗門でいふ拄杖のことだ、六尺許りの杖のやうな物だ、拗折するとは折ると云ふことである、惡手脚と云ふことは、惡竦な手段又は手荒いやり方をするのをいふたのだ、之は何を承けて來たかと云ふと、前の句の受けて來た、些ども私を容れない即ち木枕を折つて了ふ程の嚴しき振舞ひをする、と云ふのである、臨行之際、合作麼生、此合作麼生と云ふことは、是の如きの人の臨終際はどふでありませうといふ事で、臨行之際とは臨終期のことである、誠に智慧と云ひ慈悲と云ひ、兩方具へたる恐しい惡竦な手段のある人が臨終際になつたら怎んなものだらう。

【本則】舉臨濟將示滅囑三聖、吾遷化後不得滅却吾正法眼藏。聖云、爭敢滅却和尚正法眼藏。濟云、忽有人問汝作麼生對聖、便喝。濟云、誰知吾正法眼藏向這瞎驢邊滅却。

【讀方】舉臨濟將示滅囑三聖に囑す、吾遷化の後吾正法眼藏を滅却することを得ざれ、聖云く争が敢て和尚の正法眼藏を滅却せん、濟云く忽ち人有り汝に問は、作麼生か對へん、聖便ち喝す、濟云く唯か知らん吾正法眼藏這の瞎驢邊に向つて滅却することを。

【講話】舉臨濟將示滅囑三聖之は御承知の通り臨濟大師で、今日の臨濟宗の祖師である前にも御話したが、此人が黄檗大師の所に三年も隨身して居つたが一向法を聽きに行つた事がない、それから學友がお前は何うして聽きに行かないかと云ふと、何んと言つて聽いて宜いか解らないと斯う云ふた、其處で陳尊宿と云ふ人が勸めて聽きに行かせたが其時に、如何是佛法的々大意と問ふた、すると黄檗が二十棒を喫はしたが何うも解らなかつた、それで又行つて問ふた處がまた二十棒を喫は

した、それでも悟ることが出来なくて三度行つて六十棒を喫はされた、そこで大愚の所へ行つた、するとお前は何處から來たか、私は黄檗から來ました、黄檗が何んと言つて教へた、私は斯う、三度問ふたが三度とも二十棒を喫はされました、私に過がありませうかといつて、有過無過を問ふた、すると大愚和尚が、ハ、一汝の爲に黄檗は徹惻だ、能く親切に敲いて呉れた、貴様乃公の所に來て過があるの無いのとは何んだと云ふて叱られた、其一言の下に臨濟が悟つたこのことである、之れが即ち黄檗の法を嗣いだ臨濟和尚、この臨濟は生涯の間木枕を拗折する惡手脚を以て學人を接得したのだ、ところで今は此臨濟が滅を示さんとする、所謂遷化する時にお弟子の三聖に附囑即ち遺言をした、吾遷化後不得滅却吾正法眼藏、どうか乃公の亡くなつた後に、乃公の正法眼藏を滅却するやうなことをしてはならないといふのです、此正法眼藏と云ふことは此御話したと思ひますが、是は佛法の一番根本原理とでも言ふか、各宗の一番の基だらうと思ひます、何故と云ふに、釋尊が第一のお弟子の迦葉尊者に法を授ける時に、吾有正法眼藏涅槃妙心、と言はれた、だから正法眼藏と云ふのは直に釋尊の本懐と言つても宜い、其心を迦葉が嗣ぎ、迦葉は阿

難に嗣ぎ、段々嗣ぎ來て二十八代目が菩提達磨大師で、此正法眼藏と云ふものは皆相續して來た、私共は今日師匠から法を附囑する時に、此正法眼藏は盡未來際まで地に墮さずに行くものである、つまり我が宗門は此正法眼藏を嗣いで居る、して見ると、之が佛法の根源と言つても宜い、第一文字の上から言ふても、正法と云ふのは正しい法で、即ち法は手本である、此正法と云ふことは古今變ることはない法で、天は高い地は低い、柳は緑花は紅と云ふのが即ち正法で、而して眼藏の眼は物を照破して明るくして行く、藏はそれを含藏して行く、所謂藏の内に一切の寶物を容れるやうにして置くことである、さうすると正法眼藏と云ふ中に各宗悉く含藏して居ると云ふても宜い、だから臨濟大師も黃檗和尚から正法眼藏を相續して來た、其大師が今亡くなること云ふ時に、後々のことを思ふて、どうか私の正法眼藏を後々滅却すやうなことをして貰つては困ると、斯う云つた、是れは餘程響がある、すると三聖が争敢滅却和尚正法眼藏と言ふた、私共は決して滅却するやうなことは致しませぬ、のみならず夫を相續して盛んにして行く積りでありますと斯う言つた、ところがまだ三聖の力が充分に解つて居らなかつたものと見えて臨濟が再び問ふた、忽

有。人。問。汝。作。麼。生。對。お前は乃公の正法眼藏を滅却するやうなことはせぬと云ふから私も心配はないが、マア私の亡き後のことはさて置いて、即今忽ち人有つて汝に向つて問ふたならば何んと言つて對へる積りだと言ふと、聖便喝。三聖其時に一喝した、此一喝にはどの位の響があるか知れない、長い間臨濟の下で修養して居つたから、仲々臨濟大師にも譲らない一喝だ、なにしても支那四百餘州を動かす一喝に相違ない、臨濟大師も能く聽き取つたに相違ない、三聖が一喝を下すと云ふと、濟云。誰。知。吾。正。法。眼。藏。向。這。瞎。驢。邊。滅。却。此。瞎。驢。と云ふのは盲馬である、此盲馬の邊に吾が正法眼藏は滅却して了つたわい、即ち盲目坊主の所で乃公の正法眼藏は遂に滅却して仕了つたのだと云つて頭から抑へ付けたのだ、けれども心の中では大に喜んで、んだと云ふところがある、之はつまり世間の言葉の上にもある通り、親が息子の事を他人に向つて云ふのに私の忤なんかは何の役にも立ちませぬと云ふけれども、其裏には親は大變喜んで居るやうな心持ちと、同しで、言葉の上には誠に抑付けたけれども心では誠に喜んだと云ふ響が此中にある、又こればかりではなく、此言葉の中には後のことを餘程誠めた意味もあるだらうと思ふ、丁度徳川家康公の臨終際

に、二代將軍に向つて、乃公の亡き後は天下は何うなる」と問はれると、二代將軍が「天下は大に亂れん」と言つた、此言葉と最も能く似て居ると思ふ、天下は大に亂れんと云ふ言葉を聽いて、家康公が莞爾として安らかに眠られたと云ふ話がある、此天下は大に亂れんと云ふ言葉の裏には、乃父の亡き後も天下は大丈夫だと云ふやうなことでは、家康公は安心することが出来なかつたでありませうが、天下は大に亂れん、私共油断をしないと云ふことである、丁度それと同じことで、吾が正法眼藏が盲目坊主に到つて滅却して了ふと云ふ言葉は誠に貶した言葉だけれども、心の上では大に喜ばれたところがあつた、臨濟の言葉も大變宜いと思ひますが、此處で大に響のあると云ふことは三聖の一喝の中に最も能く現れて居る。

〔頌〕頌云。信衣半夜付盧能、攪攪黃梅七百僧、臨濟一枝正法眼、瞎驢滅却得人憎、心心相印、祖祖傳燈、夷平海嶽、變化鵬鵬、只箇名言難比擬、大都手段解翻騰。

〔讀方〕信衣半夜、盧能に付す、攪攪たり、黃梅七百の僧、臨濟一枝の正法眼、瞎驢滅却し

て人の憎みを得たり。心心相印し、祖祖傳燈を傳ふ。海嶽を夷平し、鵬鵬を變化す。只箇の名言比擬し難し。大都そ手段翻騰を解す。

【講話】頌云。信衣半夜付盧能。茲には丁度五祖の弘忍、六祖の慧能この二人の故事が含んで居るから、チヨット言葉がむつかしい、此信衣と云ふのは御袈裟のことで、法を付囑する時に乃公の法を繼いだと云ふ印に御袈裟を弟子に遣る、これを信衣と云ふ、今日私どもの宗旨でも夫があります、此六祖大師が五祖大師の所に行つて八ヶ月の間米搗をして居つたところが或日の晩のこと、弘忍が慧能の米を搗いて居る所へ行つて、臼の縁を三つ敲いた、それは何う云ふ事かと云ふと、今夜三更に來いと云ふことであるとか、今夜々中に來い、さうすれば法を嗣ぐと云ふ知らせだ、とか云ふ説もありませうけれども、さうではありますまい、此三つ敲いたと云ふことは米を搗くところの只様子である、それが夜法を嗣いだと云ふことになつて居りますから、半夜盧能に付すと申したのであります、盧能は盧氏で慧能の事を云ふのである、そこで今弘忍大師が御袈裟を慧能大師に付囑したところが外の雲水達が朝起て見ると法衣が見えない、それでは昨夜盧能が法を嗣だに違ひない、と云ふので外

の僧侶が非常に騒ぎ出した、それで此處に攪攪黃梅七百僧と斯う申したのである、お釋迦様以來相續して來た、其袈裟は既に六祖に賜つた、即ち三聖に法を付囑したのである、臨濟一。枝。正。法。眼。で此臨濟禪師が、正法眼藏と云ふ法門を滅却すと言はれたのでありますが、此法門は支那へ來ましてから、瀉仰宗、法眼宗、雲門宗、臨濟宗、曹洞宗、斯う五つに別れて了つた、元々正法と云ふものは根源に行つて見ると一つのもので、それが臨濟禪師の正法眼である、正法眼藏が瞎驢邊に向て滅却すると云ふのは如何にも言葉は荒いが、心と心で正法眼藏を弟子に相續せられた、すると多くの僧侶はアイツが法を嗣いだかと云ふて憎んだ、そこを瞎驢滅却得入憎と云たのだ、此臨濟大師の許には隨身の弟子も澤山ありましたが、三聖が嗣だのを見ると自然嫉妬の爲に憎む奴が出て來た、そこで正法眼藏をして瞎驢邊に滅却して愈々本當に相續したと云ふ事を二句で述べた、心。心。相。印。祖。祖。傳。燈。弟。子。の。心。と。師。匠。の。心。と。相。印。す。る。即。ち。印。可。を。與。へ。る。と。云。ふ。こ。と。で、よく以心傳心と云ふことを云ふが全く此のことである、又祖祖燈を傳ふと云ふのは、是は臨濟も祖師、三聖も祖師、一祖師と祖師とが心燈を傳承したと云ふのである、是の燈と云ふことは釋尊より迦葉が法

燈を續ぎ、迦葉の法燈は阿難が、阿難の法燈は商那和修が續ぎ、段々と祖師方が燈を繼いで來た様に、この臨濟大師より三聖へ祖燈を繼いだので所謂心の上の燈火であります、それから後の方は皆三聖の一喝の響を形容したものだ、夷。平。海。嶽。變。化。鷓。鴒。と云ふ、此夷平と云ふのは、高い所を低い所にし、低い所を高い所にして平等にしたことである、即ち三聖の一喝の響きた天地を震動した、今日でも禪宗の人が葬式などでカーツなどと云ふけれども、是は三聖の眞似をしたやうな一喝かも知れない、三聖のは實に一生涯の修行力が一喝となつて現れたから、天地も隨分震動する力がある、鷓鴒と云ふ鷓は、『莊子』逍遙游篇に出て居る大魚である、其魚が鷓と云ふ鳥に變化して、これが搏つこと九萬里と云ふやうな大きな鳥になつた、と云ふのも是は三聖の一喝の自由自在なところの有る様子を云ふたのである、只。箇。名。言。難。比。擬。是は三聖の一喝は、實にどうも名づけることも出來ぬ、言ふことも出來ぬ、只一向比擬し難いと云ふて三聖を褒めた言葉である、大。都。手。段。解。翻。騰。翻。は。翻。る、騰。は。上。る、其。翻。り。上。る。と云ふのは何んであるか、此瞎驢邊に向つて滅却せんと云ふ、其滅却したるところに臨濟宗の今日盛んなる處がある、文字の上では滅却だけれども、此滅

却のところに正法眼藏の法門は光明を放つて居る、臨濟宗の相續して行くのは實に之が基である、さうして見ると翻騰を解すと云つても宜い。

第十四則 廓侍過茶

【垂示】示衆云。探竿在手、影草隨身、有時鐵裏綿團、有時錦包、特石、以剛決柔則故是、逢強即弱事如何。

【讀方】衆に示して云はく、探竿手に在り、影草身に隨ふ、有時は鐵に綿團を裹み、有時は錦に特石を包む、剛を以て柔を決することは、則ち故らに是強に逢うて弱なる事如何。

【講話】探竿。在手と云ふのは、これは古人の謂ゆる水を探るには杖を以つてし、人を探るには語を以つてし、金を試むるには石を以つてすと云ふことがある、なんでも人の世話をして行くものは、探竿を手を持つて居ることが必要である、探竿で以つて人の肝膽までも能く探り、五臟六腑までも探り得る事が出来る、人はその一言一行に依つて五臟六腑が分るだもの、そこらを歩かして見ても大概其人の根性が解

る、それで此方に探竿が無ければいけない、向を見る手鏡があつて、夫を以て照して見ると向の根性が大概分る、影草隨身とは、擊劍の名人などは能く杖一本の内に自分の身體を隠すことが出来るといふが、これは自分の蹤跡を露はさないといふことである、随分さういふ人がある、其處に居る人の蹤跡がチツトも分らぬ、一脚下がチツトも分らない、並な顔付をして居るが、其人の脚下に在る草一本に自分の影を隠して了つて、其行跡を人に見せない、よく盗人などの話を聞いてもさうで、盗人の名人になるとチツトした所に身を隠すといふ、或は松の樹がチツト脇にあつても之に身を隠して了ふ事が出来るといふことである、此句は大變に良いと思ふ、有時鐵裏綿團といふのは、硬い鐵に軟い綿を包むは、智恵といふ堅いものゝ内に慈悲といふものを含んで居ると同様で、恐ろしく人を吐り付ける所に誠に綿團を包んだ慈悲の心がなければなるまい、有時錦包特石之も随分あることで、錦といふものは立派なものであるけれども、其錦に毒藥を包む、此特といふ字は毒藥の毒などと同じだ、表は大變立派な錦だけれども、中の方には恐ろしい毒石を包んで居るといふ事が随分あらうと思ふ、人を褒めるに大變に言葉を飾つて褒めるのは錦のや

うなもので、其褒めた中に毒を包んで居る、それで其褒めるのが褒めるのにならぬ
 ことがある、褒められて宜い氣になつて居つたならば酷い目に遭ふ、之が今日の社
 會の上にもよくあるやうで、徳山といふ人の振舞ひが皆さうだ、それから以剛決柔
 則故是逢強即弱事如何、強力なんといふものは随分力が強いもので、それが柔弱な
 者を解決して行くといふことは樂な話で當り前へのことだ、大人が子供を征服し
 て行くといふやうなことも誠に易い事であるけれども、強に逢つて即ち柔なるこ
 とがなか／＼、強い者に逢つた時此方が常に下手になつて行くことが難い、強
 い者に當るに昔の江戸ツ子の氣性で行くのはサツパリ面白くない、一方が強く
 出て居るだけに此方は力はあつてもツザと柔く出て行く、下手に組んで行くこと
 ふのが即ち強に逢て柔なることである、さうして行けば喧嘩にもなんにもならな
 い、けれども、兩剛相搏てば必ず一傷ありと云つて、ドツチも石と石とが當ると取が
 出来る、柔かき綿と綿と當てもつまらない、今日の働きの上でもさうだ、向ふが強く
 出たら此方から柔く出る、向が弱く柔弱なものであつたならば此方が強く出て向
 ふを引き立て、行かねばならぬ、此徳山と云ふ人は大變強い人だけれども、向ふが

強く出たものですから徳山は弱く出た、さう云ふ作略は仲々出来ない。

【本則】舉廓侍者問徳山、從上諸聖向什麼處去也。山云、作麼
 作麼。廓云、勅點飛龍馬跛鼈出頭來。山便休去。來日、山浴出、
 廓過茶與山、山撫廓背一下。廓云、這老漢方始瞥地。山又休
 去。

【讀方】舉廓侍者徳山に問ふ、從上の諸聖什麼の處に向つて去るや。山云く、作麼作

麼。廓云く、飛龍馬を勅點すれば跛鼈出頭來、山便ち休し去る。來日、山浴より出づ、廓

茶を過して山に與ふ。山廓が背を撫すること一下。廓云はく、這の老漢方に始めて

瞥地。山又休し去る。

【講話】舉廓侍者問徳山、之は守廓上座と云ふて臨濟下の人で随分荒つほい人だ、其
 侍者が徳山の側に付いて居る、此徳山と云ふ人は、金剛經に大變通じた人で、彼の南
 方に禪宗が盛んだと云ふけれども、乃公の金剛經を持つて行けば譯はない、と云ふ
 ことで南方に向つたことがある、或時に茶店に休んで五文餅を賣つて居る婆さん

と問答があつたと云ふことは前に申しましたが、其結果遂に婆さんにやり込められて金剛經を焼いて了つた、それから龍潭の所に行く、徳山は、どうも荒つぽい人だから、久しく龍潭と響く到り来れば龍も無く潭もなしと言つた、随分人を馬鹿にしたやうな言葉だ、ところが龍潭が言ふには、お前は親しく龍潭に到つたかどうか、と言はれて頭を下げた、そこで夜分になつて歸らうとする、外面暗し、外が眞暗だから手燭を貸して遣らう、と言はれて徳山が手燭を手に取らんとすると龍潭がフツと吹消して了つた、紙燭吹滅と云ふ公案になつて居る、其時に徳山が悟つた、だから此徳山と云ふ人は無暗に人を打つので徳山の棒と云つて禪宗では仲々有名な人であり、さう云ふ人だから此侍者に對しては、全體徳山は敵がなくちやならぬ、ところが侍者が問ふのに、從上諸聖向什麼處去也、これは仲々好い問ひだ、昔の佛祖方はお釋迦様始め何處に向つて去つたのでせうといふのです、是は大變響のある言葉で、七賢女經を見ると面白い話がある、七人の娘が墓場へ行つて人の屍に遭つた、する、一人の娘が、屍、這裡に在り人、何れの處にか去る、一人間の屍は此處に在るが其人は何れに去つたでせうと、斯う云ふてそこで七人の娘が皆悟つたと云

ふことがある、丁度それと同じことだ、唐の有名な宰相の裴相公、裴休と云ふ人があつた、此の人は禪門に這入つて仲々修行をした人である、其人が大安寺と云ふ寺へ行つた、ところが達磨の像でも掛けてあつたと見えて、裴相が住職に向つて、是は何の圖であります、と斯う言つた、ところが住職が、是は高僧の眞儀だ、といふと、裴相公が、眞儀見つべし高僧何れにかある、眞儀の圖は此處にあるけれども全體眞の高僧は何處に居ると、斯うマアやつたと見える、處が住職は何んだかむつかしくて解らなかつたと見える、すると裴休は何か話の出来るやうな坊さんは此處に居ないか、といふと、背の高い坊さんが来て、今大勢の雲水と一緒になつて拭き掃除して居りますが、是は貴方の相手になりさうな坊さんだ、といふと、それに會ひたいものだ、といふたが、これが黄檗でありました、即ち黄檗大師が雲水になつて大安寺に在つて、外の雲水と一緒に掃除をして居つたのである、そこで黄檗が出て行くと、裴休は矢張り、前の通りに、眞儀見つべし高僧何れにか在る、と問ふたさうすると、黄檗が裴相公と大きな聲で言つた、すると裴相公は、ハイと返辭をした、眞儀見つべし高僧何れにか在る、と言つた、そこで裴相公が悟つたのである、だから丁度それと同じ事

で、今の廓侍者のこの間もウツカリ答へる事の出来ない間だ、先づ廓侍者が徳山の脚下を伺つて居る様子がある、ところが老練な徳山、作麼作麼——なんだなんだ、トボケタやうな風だ、お前の言ふことは何んだ耳へ手を當て、聞へないやうな風で言つた、全體本當の徳山の性質としてはこゝで棒を行する筈だが、そこが徳山です、強に逢ては則ち弱だ、西有禪師が九十歳の時、横濱の西有寺で授戒を行つた、其時に私が引證師で日置さんが教授師であつたが、登壇の夜でありました、須彌壇へ登壇は些と早いと思ひながら陸つた、すると西有禪師が九十の年で、平生はボケたことを言ふやうな風だけれども、なんだまだ早い黒人の癖に、と云はれたことがある、私共は西有禪師から、黒人の癖に、と云はれた時には實に冷汗を出した、それから授戒が済むと上堂といふことを行る問答をする、さうして西有禪師が答へられる、そこで或る一人の坊さんが、如何ナカ是佛ハと言つた、さうすると耳が遠いから侍者に、何んと問ふたのだ、と聞ひた、如何なるか是れ佛ハと問ひました、と言ふと、「ソウカ」と言つて、乾屎橛と答へた、丁度此邊が徳山の様子に似て居る、ボケた様でありながらボケては居ない、徳山も丁度そんな風だらうと思ふ、こゝで徳山が廓侍者の問ひを聞き外し

たやうな風で、作麼々々、と云ふ、すると廓侍者は何處までも強い、廓ハ云ハ勅ハ點ハ飛ハ龍ハ馬ハ跛ハ鼈ハ出ハ頭ハ來ハ飛ハ龍ハ馬ハといふのは千里の名馬のことだ、今名馬を求めやうと思つて來たが、此跛馬に逢つたと云つて——隨分向ふを馬鹿にした話だ、肥料ハ酌ハみ馬ハと云ふた様な鹽梅だ、跛鼈といふのは跛はチンバのこと、不具の馬の事を云ふ、却々豪い權幕である、山ハ便ハ休ハ去ハ、即ち徳山が頭を引込ましてへエと云つたやうな風で、所謂強に逢ては則ち弱です、垂示の上に云ふ、探竿手に在り影草身に隨ふ、といふ氣味合がある、自分の蹤跡を露はさずに、向の五臟六腑をチャンと探つて居るところの鹽梅がある、其日はそれで濟んだ、來日山浴出、すると或る日、徳山が入浴がすんで座敷に坐つて茶でも飲みたいと思つて居たのでせう、ところがこゝは却々侍者だけあつて氣が利いて居る、廓過茶與山、山撫廓背、一下、そこへ茶を入れて徳山の所へ持つて行つた、すると徳山が廓の背中を撫で却々氣の利いた和尚だなど褒めた、するといふと此侍者和尚何處までも強い、廓云、這老漢方始瞥地、乃公の氣の利いたことは今日始めて知つたのか、といふやうな鹽梅だ、瞥地と云ふのはチラツと見ることである、すると山又休去、之は休し去つて温順しくして居るやうだが、仲々油斷がならぬ、垂示の

「錦に毒石を包む」といふところだらう、此徳山の性質としては打著かなければならぬのに、休し去つたといふのは、向が強く出たからズツと弱く出たのだ、即ち向の五臟六腑を見抜いて了ふといふところで、何事にでも此懸引は必要だらうと思ふ。

「頌」頌云。觀面來時作者知、可中石火電光遲、輸機謀主有深意、欺敵兵家無遠思、發必中、更謾誰、腦後見腮、今人難觸犯、眉底著眼、今渠得便宜。

【讀方】觀面に來る時作者知る。可の中石火電光遲し。機を輸く謀主に深意有り、敵を欺く兵家に遠思無し。發すれば必ず中る、更に誰をか謾せん。腦後に腮を見る、人觸犯し難し。眉底に眼を著く、渠れ便宜を得たり。

【講話】頌云。觀面來時作者知。觀面とはグズム、しないことだ。作者といふのは作家のこと。スパイ人のことだ。是は先方の顔付をチャント見て取つて、さうしてコイツは是位な價値の奴だといふことを看るので、徳山の眼力で見たらはつきり辨るでせう、今作者は徳山を指したのだ。觀面來は廓侍者の方である。可中石火電光遲

是は徳山の働きの敏捷いことをいつたので、徳山は先方が強く出て來たから當方が弱く行くといふのは如何にも敏捷い。輸機謀主有深意、つまり機を巻いて頭を下げて居るけれども、却々深意あり、油斷のならないところがある。ボケたやうな風で居てチャント知り切つて居る。欺敵兵家無遠思、是は侍者和尙の方をいふので、所謂油斷大敵といふか、敵を欺いて居る、小敵と思つて侮つて居れば必ず敗れるに相違ない。遠大の謀が無い、唯目の前に強いばかりである、其強いのは何んであるか、飛龍馬を勅點すれば跛鼈出頭し來るといふやうに、言葉ばかりで向を吞込んで居つても深い謀はないらしい。發必中、更謾誰、發すれば必ず中るとは、徳山をいふのであつて、徳山はなか／＼弓の名人だから百發百中だ、一本引けば必ず一本中る、百本引けば必ず百本の中する、何故だといふと、徳山が休し去つたり、侍者和尙の背中を撫でたりする様子といふものが、實にチャント一々に向を見抜いて了つて居るところがある、更に誰をか謾せん、侍者和尙は徳山を謾する積りでも、徳山はまだ／＼謾せられない、馬鹿見たやうな風で何處を捕へて宜いか分らぬ、して見ると侍者和尙位の謾を受けない。腦後見腮、今人難觸犯、腦後に腮を見るときは、腮が出たことをいふので、

腦後に腮のあるものとは一緒に旅をしては不可ないといふ支那の俗説から来た、何時巾着を盗むか分らぬ、是は全體悪く言ふたやうで、實は褒めて言ふのちや、却々あの和尚、腦後に腮があつて觸犯し難い、それから眉底著眼、渠得便宜、之は侍者和尚の方をいふたので、侍者和尚なかく、やり手だ、眉底に眼を著けて居るといふのは極り切つたことだけれども、此處は人を褒めるに、仲々アノ人は一隻眼を具して居る、といふと同じ意味である、即ち侍者和尚も一隻眼を有つて居る、徳山が湯から出て来たところで茶を持つて来たところなどは、随分眉底に眼を著けて居る趣がある、渠便宜を得たり、徳山見たやうな和尚のところへ、兎に角楯をついたところ、丈けは侍者和尚便宜を得た、仲々徳山のところへ寄付ける人は無いがそこへ行つて殊勝にも従上の諸聖何の處に去るやとか、又飛龍馬を勅點すれば跋鼈出頭し來る、とかいふて徳山のところへ行つて相手になつて行るところは一見識ある、斯う表に侍者も褒められては居るが、矢張り徳山に脚下は見られて了つたのだ、何でも修行は菱角がされぬといかぬ、この本則で見ても侍者和尚一見識はあるが、何となく成金氣分がある、そこへ行くと徳山はその境界が熟して居る、修養もこゝまで

來なくてはならぬのである。

第十五則 仰山插鋏

【垂示】示衆云、未語先知謂之默論、不明自顯謂之暗機、三門前合掌兩廊下行道有箇意度、中庭上作舞後門下搖頭、又作麼生。

【讀方】衆に示して云く、未だ語らざるに先づ知る、之を默論と謂ふ、明さやれども自ら顯はる、之を暗機と謂ふ、三門前に合掌すれば兩廊下に行道す、箇の意度あり、中庭上に舞を作せば後門下に頭を搖かす、又作麼生。

【講話】此間餘所へ行きました所が、坐禪の坐相の話をして呉れよと云ふことでありました、中には坐相のことを知らずに居る方があるやうです、又坐禪を妙な風に考へて、何んだか世の中を嫌に思ふやうな、又世の中を懸け離れたやうなことが坐禪のやうに思つて居る人がある、山僧は坐禪と云ふものは實に道德の根原だと思ふ、坐禪には半跏趺坐と結跏趺坐と云ふがある、半跏趺坐と云ふのは左の足を以て

右の脛を壓す(形式を示す)新う云ふ風になるのが半跏趺坐と云ふ坐り方で、此法を降魔座と云ふて文殊を表したものであります。文殊は智劍を持つて煩惱の魔軍―私共の精神の上には朝から晩まで煩惱の魔軍が始終附添ふて居る、之を退治して行くが半跏趺坐である、若し此足が痛くなつたらば此方の足と取替ても宜い、何方にしても半跏趺坐である、ところが右の足を以て左の脛を壓す方は、之を吉祥座と云ふ、是は普賢を表したもので、普賢は行願の人で徳相の方になる、即ち徳は柔かにして慈悲柔和なものだから吉祥のものだ、普賢と云ふ人は心に行の願を立て、何處までも實行主義の人であつたが、其行ふところに常に徳相が現れて居つた、徳と云ふものは行はなければ具はるものでない、人間と云ふものは智慧、徳相がなければ不可ぬ、何方も半跏趺坐と云ふのはさうです、ところが今度は斯う云ふ風に兩方から合せたのが結跏趺坐で、是は智慧と徳相とが相待つて現はれた處の萬徳圓滿の姿です、(形式を示す)斯う云ふ風に坐禪をする、手は法界定印を結んで息を氣海丹田に入れ―臍の下の箇所)にジツと力を入れてやらなければならぬ、是れが謂ゆる萬徳圓滿の相で佛の姿である、釋尊は文殊と普賢とを一緒にして了つたので結跏

趺坐―是れが所謂佛である、是は坐相の上の講釋をしたのである、智慧と徳相とが圓滿した姿即ちこの坐相には十善と云ふものが具はつて居るが、この十善は實に道德の根源である、先づ身に三つ、殺、盜、婬、口に四つ、惡口、兩舌、綺語、妄語、意に三つ、貪、瞋、痴、此の身三口四意三、併せて十になる、此十は十惡で十惡をヒツクリかへせば十善になる、何故に坐禪に十善が具はつて居るかといふと、手は兩方共膝に置いて法界定印を結んで居り、足は結跏趺坐して居る、斯くの如くすれば自ら身體が清淨です、手と足と體が清淨になれば人を殺すとか、盜むとか、邪婬をすることもない、それ故に坐禪の姿は身に三つの殺、盜、婬と云ふことを離れて居る、又口は竹篋口をして居つては惡口は言へない、兩舌と云つて一枚の舌を二枚を使ふ人があるがそれも離れて居る、綺語、即ち飾り言葉を使つて人前ばかり結構なことを申すとか、妄語と云ふて詐りを言ふことも出来まい、此の四惡を離れて居る、又意の上にも貪、瞋、痴の三毒を離れて居る、諸多の苦みは貪慾が一番源である、法華の中には、貪慾爲本と云つてある、慾も通常の慾は悪くないが貪慾がいかない、つまり過ぐる慾―御飯を喰過ぐる、酒を飲過ぐるの類は貪慾である、貪慾と云ふものは心を掻き亂すもので、

貪慾が強くなつて行く。何事も思ふやうに行かぬから今度は怒り出す。之が瞋恚である。怒ると云ふことは全體我儘である。けれども法と云ふものは言はゞ虚空のやうなもので、虚空を相手取つて訴訟をする。云ふことは誠に詰らない。それで唯一切皆虚空のやうなものだと斯う合點したら怒ることもなく、慾を起さうと思ふこともあるまい。固より怒ると云ふ物の道理が分らなくなつて了ふ。そこで愚痴となる。愚痴の強い人は分らぬから怒る。是はドツチから云つても宜い。恐ろしく怒る人は貪慾を起す。貪、瞋、痴に上下の差別はありません。唯禪の上には其十惡を離れて十善になつて居る。是で身體も心も清淨になつて所謂三業、清淨、一即ち佛です。身に三つ、口に四つ、意に三つ、是れ等のものが清淨になれば所謂三業清淨の姿になるのである。道元禪師が若し人一時なりとも三業に佛印を標し、三昧に端坐するときには遍法界悉く悟となる。と言はれた。所謂三業清淨の人ならば、宇宙の大精神と我と一つになつて居るといふことで、それが私の所謂坐禪は道德の根源だと云ふ所以である。それで一時間坐禪すれば一時間だけの道德が具はり佛の姿が具はるやうなものだから、毎日三十分でも一時間でも朝なり晩なりに行れば大變宜いと思ふ。餘

計な話とは思ふけれども坐禪に就て妙な考への人があるやうだから序に御話したのである。

未。語。先。知。謂。之。默。論。默。つて居つて話をしない中にチャンと心と心と消息が通じて居る。成る程默論である。靈山會上に於ける釋尊拈華の話が一番能く分るだらうと思ふ。靈鷲山に於て御釋迦様が說法をしたときに、丁度八萬の大衆と云つて御弟子が八萬人も居つた。釋尊は其處で、金婆羅華といふ花を拈じた。云ふ、すると八萬の大衆は譬の如く啞の如く、なんだか分らぬでケロツトとして居つた。ところが迦葉だけは其花を拈じたのを看取つてニコツと笑つたと見える。ドツチも物を言はない。釋尊は唯金婆羅華を拈じただけ迦葉はニコノツと笑つただけである。さうして見ると未だ語らざるに先づ知るので、即ち默論でありませう。其時に釋尊は「我に正法眼藏涅槃妙心あり摩訶迦葉に附屬する」と言はれて、迦葉に法を授けた。未だ語らざるに迦葉と釋尊とが心と心と通じ合つて居る。所謂默識神通とでも云ふか。是は何も迦葉と世尊ばかりではありません。随分今日でも知音と知音、心と心とを知合つた人の間にはあるだらうと思ふ。又其次がむづかしい。不。明。自。顯。謂。之。暗。

機。暗機と云ふことは、アノ人は機宜投合の人だと云ふことをよく言ふ、是は達磨大師の話を持つて來たら能く分るだらうと思ふ、達磨大師が四人の御弟子に向つて、「汝等自分の悟つたところを言つて見よ」と言つたことがある、そこで一番始まりに道副と云ふ人が言つた「文字を執せず文字を離れずして道用を爲す是でなけなれば佛法と云ふものが分りやしない、文字を離れて了つてはいかぬ、さうかと云つて文字にクツ附いて了つてもいかぬ、文字を離れず文字に執せずして道の働きを爲して行く」と斯う云ふと、達磨大師は、汝吾が皮を得たり」と云つて許した。さうすると今度は次の尼總持と云ふ人が、慶喜の阿闍佛國を見るが如し、一見して更に再見せず」と斯う云ふた、慶喜とは阿難のことを云ふ、阿難が佛の力を借りて立派に阿闍佛國と云ふ淨土を見たこと云ふがある、立派な淨土だと思つて一見したけれども再び見ることに出来なかつたこと云ふことがある、私の悟りは阿難が阿闍佛國を見るが如く、一見して更に再見せず」と斯う言つたのである、私は大變宜いと思ふ、何故と云ふに、今日の天氣は私ども一見して居るが二度見たいと思つても後に至つて見ることが出来ない、明日の天氣は明日の天氣じや、今一時間斯うして見て居るけれ

ども一時間過ぎたら過ぎたつきりで、再見は出来ません、之に對して達磨は、「汝吾が肉を得たり」と言つた、それから次の道育と云ふ人が、私の悟は「四大本空五蘊有に非ず而も我見處一法の得べき無し」と言つた、成る程佛教から云ふと、私どもの身體は地水火風の四大で出来て、之が一番の原則になつて居る、其四大と云ふものは本來空なものだ、又五蘊は色、受、想、行、識で、之も全體有るではない、實に一法の得べきなし、法と云ふものは素より不可得の物である、唯暫くの間分子が集合して物質になつて居るやうなものだ、此分子をバラ／＼にしたら一法の得べきなく、皆不可得のものだと、斯う言つたところが、達磨が此人に向て、「汝吾が骨を得たり」と言つた、最後に神光と云ふ人が出て來た、此人は達磨の本當の法を嗣だ人で、法を求めめるために雪の中で臂を斷つて達磨の前へ投げたこと云ふ人だ、随分修行には骨を折つた人だ、其人が最後に出て來た、どう云ふことをしたかと云ふと、黙つて達磨の前に三拜した、そして自分の本の場所へ行つて立つた、立つと達磨が、「汝吾が髓を得たり」と言つた、これが皮、肉、骨、髓と云ふ語の源だ、此神光と云ふ人が何んにも言はないで、拜をして元の場所へ行つて立つて居る、之が達磨の髓を得たと云ふことで、それが實は入

用だから此處へ其話を持つて來た、不明自顯謂之暗機、暗機とは機宜投合すること
で、達磨と神光とは誠に心と心とが能く投合して居る、ドチラも知り抜いた人だ、昔
の人が三白紙を送つてそれで悟つたと云ふこともあるが、今年私の所へ白い年頭
狀が來た、表の宛名だけチャンと書いてある外には何も書いてないけれども、私の
昔の三白紙のことを思出して、それでも消息は通しましたが、是は大方書くことを
忘れたのだらうと思ふ。達磨と神光は「明さるれども自ら顯る」で、汝吾が髓を得たり
と言ふた、故に之を暗機と云ふ、機と云ふことは全體機きである、一機未發と云ふこ
とを云ひますが、暗機はまだ物質の上に顯れて居らない心と心との働きた、知音と
知音であれば千里を隔つても心と心との消息が通ずる、三門前合掌兩廊下行道、こ
れは永平寺邊りに行くと能く解る、三門は増上寺の前にもある、永平寺では三門か
ら兩方に廊下が附いて居て廊下傳ひに方々に行かれるやうになつて居る、それで
三門前に合掌すれば兩廊下に道を行ふ、之も能く手拍子の合ふことを云ふので、矢
張り心と心の知れ合つた人のことを云ふ、有箇意度と云ふことは、今の心と心の上
に、一人は三門の所で合掌して居ると、一人は兩廊下の所でチャンと行道して居る、

私どもの宗門で鳴らし物一つでチャンと合ふ、手磬なら手磬がチンと聞える、或
は太鼓が一つドーンと鳴れば何うなる、三つ鳴れば何うなる、と云ふことは、心と心
で知つて居らねば調子の合ふものでない、太鼓を幾ら打て見てもコツチでは何の
太鼓だやら解らぬやうでは調子は合はぬ、中庭上作舞後門下搖頭といふと同じ意
味で中庭で舞をする、と云ふ、ズット裏の方の後門下で頭を揺して、チャンと踊の調
子に合つて行く、所謂拍子の能く合ふことを云ふ、之も知音と知音のことを云ふの
だ、斯う云ふ垂示を出して來てそれから本則でドツチも心と心の知り合つた人の
話が出て來る。

【本則】舉瀉山問仰山甚處來。仰云、田中來。山云、田中多少人。
仰插下鍬子、叉手而立。山云、南山大有人、刈茆。仰拈鍬子便
行。

【讀方】舉す瀉山、仰山に問ふ、甚麼の處より來る。仰云く、田中より來る。山云く、田中多
少の人ぞ。仰鍬子を插下して、叉手して立つ。山云く、南山大いに人有つて、茆を刈る。

仰ごうしん鍬くわ子を拈ひんじて便すたはち行ゆく。

【講話】瀉山は師匠で仰山は弟子だ後世この人達の家風を瀉仰宗と稱へて禪門五家の一つとなつた位であるから瀉山も仰山も却々の人物だから師匠の心は弟子が知つて居り、弟子の心は師匠も知つて居る。此親にして此の子あり、此の子にして此の親ありと云ふやうな譯である。だから瀉仰宗と云ふ宗旨は體用と云ふことを多く説く體用と云ふものは離れたものでない、こゝに水差と云ふ體があれば水を容れると云ふ用がチャンと附いて居る、一遍も離れたことが無い、此の離れたことのないと云ふことが此處で入用です、即ち三門前に合掌すれば兩廊下に行道す、中庭上に舞を爲せば後門下に頭を搖かすと云ふのが體と用のやうなもので、體は用を離れぬ用は體を離れぬ、此處に卓子があれば本を載せコップも載せて置くこと云ふ様な必要が起きて来る、是れ體と用とは怎うしても離るべからざるものである故、先きに體用のことを明かに話して置くこと云ふと古則が能く分る。全體瀉山と云ふのは山の名で人の名は靈祐と云ふた、仰山は慧寂と云ふ人だ、此瀉山の靈祐と仰山の慧寂即ち師匠と弟子との問答だ、どちらも心と心を知り合つた人の問答だ、

先づ師匠の瀉山が御弟子の仰山に向つて問ふた、甚處來、何處から來た、一なに、師匠はチャンと知りきつて居るけれども斯う問ふて見た、既に知り切つて居ることを知らぬ顔付をして問ふのだからウツカリ答は出來ない、すると仰山が間に髪を容れず、仰云、田中來、田の中から參りましたと斯う云ふた、昔支那では多く坊さんの居るところは田を耕し麥を作り或は苜を刈ると云ふやうなことがある、之を叢林では作務と云ふ處が大勢の坊さんが出て何か田地の開墾でも行つて居ると、其處から仰山が來たと見える、古人は苜を刈る時にも、田地を耕す時にも佛法と別になつて居らぬ、平生何をすることも始終心を弛めずに、チャンとそれが佛法になつて其精神に隙間が無い、だから私は田中から參りましたと眞直に答へた、けれども何うも是では分らぬから、瀉山はモウ一度、山云、田中多少人と問ふた、今日は田にはどの位人が出て居るのか、すると仰山は、今田中から歸つて來たばかりでまだ鍬を持つて居たと見えて、仰、插下鍬子、又手而立、其鍬を插みて手を胸の所に又手したといふ、一人とも二人とも言はないで、凡そ此位なものだと示したのだ、實に、天上天下唯我獨尊と云ふか、前に釋迦無く後に彌勒無しと云ふか、他の背後に立たぬと云ふ様子

だ、人の足を借りて歩み、人の舌を借りて喰ひ、人の目を借りて物を見ると云ふやうなことは仕ない、實に獨立した立派な境界だ、イキナリ又手してズーッと立つた、之は體―唯無差別の上の體だ、此體だけでは佛法にならない、成る程此見識―他の背後に立たぬと云ふ見識も無ければならぬが、所謂體と云ふことは無差別と云ふことだから、佛法と云ふものは唯向上一邊ではないか。そこで瀉山が更に、南山大有人。刈。弗。といふた、之は南山と云ふ山に人が居つて、さうして皆弗を刈つて居ると云ふのは、ズツと下の方のこと即ち用の方を云ふた、お前が又手して立つたのは體ばかりで下の方に下りて働きをすることがサツパリ無いぢやないかと斯う云ふたと同じことだ、大唐の天子が弗を刈ると云ふことがありますが、それは下萬民に至るまで天子様の御情けが籠つて居ると云ふことを云ふので、天子様は下萬民のことを能く知つて居らねばならぬ、唯宮中の奥に玉簾深く垂れて玉顏を現はさないと云ふても、唯國の下々の事までも思つて居らなければならぬ、だから是等の働きは體ばかりでなく用が無ければならぬ、そこで佛教では上、菩提を求め、下、衆生を濟ふと云ふ働きがある、菩提を求めると云ふ方は體で、衆生を濟ふと云ふのは用の方

だ、體の方は早く云へば智慧であり、用の方は徳である。智慧と云ふものは無差別なもので、用と云ふことは差別だ。差別は徳相の方で、觀世音は三十三身を現して一切の者を濟ふと云ふ、即ち向上向下と相待ちていかなければ佛法にならない。だから此處のところは大變に好い響です、即ち向上に止まつて居ないで、向下の用の働きもする、そこで仰。拈。鎌。子。便。行。仰山はそんなら是から參りませうと云つて、鎌を肩へ擔いでズツと行つたと云ふのが是が用の働きた、さうすると仰山は體中の用であり用中の體ありと云ふ消息が茲に通じて居る、體中用あり用中體ありで、體用を離れず用體に即せず、ドチラも佛法の話―體用不二の話をして居るのである、此間大分立派な人が斯う云ふことを言ふた、禪宗と云ふものは無差別なものだ、空理一邊の無差別なことを言ふと申しましたが、實際體用不二で行かねば禪宗でない、體ばかりでは決して本當の禪宗ではないのである。

〔頌〕頌云。老覺情多念子孫、而今慚愧起家門、是須記取南山語、鏤骨銘肌共報恩。

【讀方】老覺情多うして子孫を念ふ。而今慚愧して家門を起す。是れ須らく南山の語を記取すべし。骨に鏝め肌に銘じて共に恩を報せよ。

【講話】頌云。老覺情多念子孫。佛法でも世法でも後事を念ふと云ふ事は皆同じだ。瀉山もモウ年齒を喰つて來たので後々の事を思ふ、後の事はどうでもよいと云ふ人はない。常に子孫のことを念頭に忘れぬ、是は皆世間一般の人情です。後の相續のことを念ふと云ふのは、老婆親切であつて若い時はそんなことは構はぬけれども、段段年を喰ふに隨つて情が多くなつて來る。而今慚愧起家門。慚愧と云ふのは大に愧ぢたと云ふことで、即ち仰山が體ばかりでは佛法にならない、體は佛法の半面だけであるといふ事を悟つて、そこで終いに鉄子を拈して行くと云ふのが慚愧したところである。此仰山は慚愧して家門を起し、立派に瀉山の後を相續して行つたのである。だから瀉仰宗といはれるやうになつたのだ。即ち此親あつて此子あり、此子あつて親の家門を相續して立派に跡目を嗣いで行つたのだ。是須記取南山語。茲のところが佛法で一番入用なところだ。記取は南山の語を記憶して忘れぬと云ふのである。南山の語は本則の方に、南山に大に人あつて弗を刈ると云ふた、即ち慈悲と云ふ

方で下化衆生の方、即ち下へ降りての働きの無ければならぬと斯う言つた、之が誠に貴い言葉で、其南山の語を能く記憶して忘れてはならぬぞよ、實智の體は素より大切であるけれども、人を濟度して行くと云ふ權智の用も無ければならぬといふのである。鏝骨銘肌共報恩。之は南山に人あつて弗を刈ると云ふた言葉を忘れてはならない、さうして恩を報すると云ふことが大切である。茲は體中用あり用中體あつて、體用の上に引掛からずして、さうして活潑無碍の機用きを現はして行くのが所謂佛祖への報恩だ。今日の人は其恩を報せんければならぬ、唯佛法の半面だけ知つたのではない、智慧ばかりでは佛法の半面だ、體ばかりでも佛法の半面だ。此體用不二の上に機用きをして行くのが、それが所謂恩を報するのであつて、之より外に報恩はないと云ふたのである。

第十六則 麻谷振錫

【垂示】示衆云、指鹿爲馬、握土成金、舌上起風雷、眉間藏血、及坐觀成敗、立驗死生、且道、是何三昧。

【讀方】衆に示して云く、鹿を指して馬と爲し、土を握つて金と成す、舌上に風雷を起し、眉間に血刃を藏す、坐ながらに成敗を觀立どころに死生を驗む、且らく道へ是れ何の三昧ぞ。

【講話】指馬爲鹿、之は御承知の秦の二世胡亥の時の或る宰相が鹿に乗つて行く、王が云ふのに御前はとうして鹿に乗つて來た、イヤこれは鹿ぢやありませんか、馬であります、イヤ御前は誤つて居る、鹿だ馬ぢやないかと云ふた、それなら群臣に問ふて御覽なさい、群臣に問ふたところが、半は馬と云ひ半は鹿だと言ふた、といふ故事がある、今こゝでは法に定相が無いことをいふたのだ、成る程さうです、其人の用ひ方によつて法と云ふものは色々になつて來る、同じ水でも船を浮べる水ともなり、又船を覆す水ともなる、悪いものにもなれば良いものにもなる、それで水と云ふものは定相がない、火も其通りで、良いものにもなれば悪いものにもなる、で火にも定相は無い、すべて用ひ方によつては誠に結構なものもあり、又非常に悪いものもある、凡そ法と云ふものは其人によつて鹿とも云はれ、又馬とも云はれる、群臣が半は馬と云ひ半は鹿と云つたと同じことで、其人の見方によつて法と云ふものは變

るのである、舍利弗は此世界を汚なく見、螺髻梵天は世界を奇麗だと見たことが維摩經の中にある、握土成金、印度に釋摩男と云ふ大福長者があつた、其人が土を握るとそれが皆金になつたといふ話があるが、マサカ金になつたのもあるまいが、上御一人が御用ひになればつまらない石でも寶になるから、長者の人が握つたならば土も金に成るのも道理かも知れませんが、なんでもない竹の筒でも親鸞上人や弘法大師が使ふたとか云ふと、それが大變値打が出て來る、坐禪の上より云ふてもさうで、何でもない石でも是は道元禪師が坐禪した坐禪石だと云へば、大變立派なものになる、それが所謂土を握て金と成すのである、舌上起風雷、タツタ一言の言葉で天下の輿論となり、東へ行つても風雷を起し、西へ行つても風雷を起し、遂に世界の輿論になつたと言ふ事がある、是が即ち舌上に風雷を起すといふのである、眉間藏血、及と云ふのは、眉毛で睨殺して了ふ事で、人に酷く睨まれるとヨツチの身體が縮んで了ふやうな事がある、又諸國諸大名は弓矢で殺す、彼等二人は目で殺すと云ふ歌があるが、随分目で活すこともあり、又殺すこともある、其通り眉毛は殺人刀にもなり、活人劍にもなる、そこを血刃を藏すといふたのだ、坐觀成敗、是もさうで、大

智慧があつて大道徳があつて世界を一邊に看破すると云ふやうな人ならば、坐ながらにして世界中の動亂は結局斯う云ふことになるといふことが分らんければならぬ、それでなければ本當の大人物とは云はれましますまい、だから大人物になつたら坐ながらにして成敗を見る。又立驗、死生全體此死生と云ふを、皆悪いことに思つて居る、死生は超脱せんければならぬ、けれども生死が悪いことはない、其人によつては生死が涅槃となり涅槃が生死となつて居る、御承知の通り涅槃と云ふものは翻譯すると不生不滅―生することもなければ滅することもない、ところが生死と云ふことは之は苦しみの方だ、苦しみだけれども佛や菩薩方の生死は皆涅槃になつて居る、迷つた人は此不生不滅の涅槃を生死にして了つて居る、生死は一つだけれども、其人によつては誠に涅槃の樂みが生死の苦しみに成り、生死の苦しみが涅槃の樂みに成つて居る、即ち其人によつて立ろに生死が分るゝのである、或人は活きるだけ生きてしまへば、死ぬるより外に分別御座なく候と云ふ手紙を書いて死んだと云ふ、さう云ふ人は立ろに生死を驗みて居る人である、道元禪師は、生死は佛の御命なりといはれた、なんでも生死なんと云ふことを苦にすることは要らない生

死が佛だと云つてある、誠にさう見たら死ぬるも活きるも愉快なものだ、且道は何三昧、何んごそんな人があるだらうか、全體是れは怎ういふ人の境界であらうか。

【本則】舉。麻谷持錫到章敬。遶禪牀三匝。振錫一下。卓然而立。敬云、是是。谷、又到南泉、遶禪牀三匝、振錫一下、卓然而立。泉云、不是。不是。谷云、章敬道是。和尚爲什麼道不是。泉云、章敬即是。是汝不是。此是風力所轉終成敗壞。

【讀方】舉す。麻谷錫を持して章敬に到り禪牀を遶ること三匝、錫を振ふこと一下、卓然として立つ。敬云、是是。谷、又南泉に到り、禪牀を遶ること三匝、錫を振ふこと一下、卓然として立つ。泉云、不是。不是。谷云、章敬は是と道ふ、和尚什麼としてか、不是と道ふ。泉云、章敬は即ち是、是れ汝は不是。此れは是れ風力の所轉終に敗壞を成す。

【講話】是からが本則だ、舉麻谷持錫到章敬、麻谷と云ふのはマヨクと讀むので、麻谷寶徹と云ふ、この和尚は馬祖下の尊宿でなか／＼有名な人だ、此人が錫杖を携へて

章敬和尚の所に行つた而して遶禪牀三匝振錫一下卓然而立丁度章敬和尚は禪堂に坐禪をして居つたと見える其處へ行つて錫杖を突いてクル／＼三匝したさうしてガチャ／＼と錫を振つてウンと立つたと見へる全體三匝すると云ふことは印度の方では向を敬ふことになる此錫杖には鐙が六つ附いたのもあり十二附いたのもある六つのは六度を表したもので十二附いたのは十二因縁を表したものである其錫杖を持つてズツと突つ立つた所謂前に釋迦なく後に彌勒なしと云ふか天上天下唯我獨尊と云ふか丸で人を併呑してしまつたやうな様子があるするど章敬の言ふことが面白い敬云是々ヨシ／＼立派なものだ斯う云ふて許した是は放過す方から云ふと誰が來ても是々と云ふに違ひない禪宗では把住放行といふ事を云ふ是々と云ふのは放行の方で放過す方であるところが此麻谷が今度南泉和尚の所へ行つて同じく遶禪牀三匝振錫一下卓然而立禪牀を三匝し遶つて錫を振ふこと一下卓然として突つ立つて居るところが泉云不是々々イケナイ／＼是は把住の方で放過さない方である放過さない方から云ふと佛が來ても遶磨が來てもゆるす氣遣ひはない是で法に定相の無い事が分る一人の人は是々と云ひ

一人の人は不是々々と云ふけれどもドツチも法を知つて居る人だから不是々々と云ふ中には是々と云ふことも含んで居る是々と云ふ中にも不是々々と云ふことをチャンと含んで居るドツチも知つて居る人との話だすると今度麻谷が理窟を言ひ出した谷云章敬道是和尙爲什麼道不是章敬は是と云ひ和尚は何んとしてか不是と云ふかとすると泉云章敬即是々汝不是それは成る程章敬は是々かも知れないが汝は不是だ此是風力所轉終成敗壞何んだそんな錫杖を持つて人の前に突つ立つたりなんかしてそれを振るのは唯御飯を澤山喰べたり茶を飲んで其茶や飯の力で乃公の前に來て真中に突つ立つので終に敗壞を成すそんなことは敗れて了ふと斯う云ふた是は遺經の中に動不動の法は皆是れ敗壞不安の相なりとある茲で一つ私が思ふに是は麻谷ばかりが風力所轉で敗壞を成すのちやありますまい章敬も亦さう云ふ南泉和尚も風力所轉によつて敗壞を成すので終に敗壞を成さない者はありますまい「碧巖」の方で見ると麻谷を悪く見てあるが今此處では麻谷は三人共に丁度鼎の足のやうにドツチの力も優劣がない同じ力のある人のやうに見える何故ならば麻谷が錫を持つて卓然として立つたのは章

敬を試みる爲にヤツた章敬は是々云つて麻谷を窶に落さうと思つたが麻谷は落ちない、南泉は不是々々云つて、不是の窶に落さうと思つたが麻谷は仲々不是の窶に落ちない、落ちたやうな風を見せて章敬は是云ふ和尚は何としてか不是云ふと云つて講釋を始めたのはチョット弱味があるやうだ、併し是も自分がズツと下手に組んで來て向を點檢する所がある。

〔頌〕頌云。是與不是、好看捲襪、似抑似揚、難兄難弟、縱也彼既臨時、奪也我何特地、金錫一振、太孤標、繩牀三遠、閑遊戲、叢林擾擾、是非生、想像鬻骸前見鬼。

〔讀方〕是と不是と、好し捲襪を看るに抑するに似たり揚するに似たれども、兄たり難く弟たり難し、縱也彼れ既に時に臨む、奪也我れ何ぞ特地ならん、金錫一たび振うて、太だ孤標、繩牀三たび遠つて閑りに遊戯す、叢林擾擾として是非生ず、想ひ像る鬻骸前に鬼を見ることを。

【講話】天童禪師從容錄の著者は此三人共優劣が無い方に見たが、碧巖では麻谷を悪く見て居る是與不是好看捲襪是云ふのは章敬で、不是云ふのは南泉だ、捲云ふのは窶で、捲は木を曲げたもので、襪云ふのは紐を丸くしたので、座敷の出口の所へ子供などがよく紐を曲げて置いて知らず顔に人を喚んで出て來たら足を縛つて遣らうと云ふ様な事をするがアレが所謂捲襪だ、ところが章敬和尚は是々と云ふて捲襪の窶を拵へ、南泉和尚は不是々々と云ふて窶を拵へて、之に落して遣らうと思つた似抑似揚、難兄難弟、不是々々と云ふて抑へ付けたやうにし、又是々と云ふて揚げたやうに見える、ところが抑へたのでも揚げたのでもない、だから其二つは兄とも弟ともしがたい、所謂南泉と章敬は殆ど優劣輕重がない、縱也彼既臨時、奪也我何特地、縱と云ふのは放す方で、時に臨むと云ふのは是は章敬の方だ、是々と云ふて放す方から云ふと、アレは時に臨んで放したのである、それから奪の方は南泉が不是々々と云ふた方で、何ぞ特地ならんといふのは、特別に不是々々と云つた譯でない、唯其時の場合によつて不是々々と云つただけだ、特地と云ふことは態と云ふことだ、だから今度南泉へ行つたらば、南泉の方が是々と云ふかも知れない、又

章敬の方に行つたらば、章敬が不是不是と云ふかも知れない、それから次に麻谷の方を云ふ。金錫一振太孤標、麻谷が章敬の所に行つて錫を振ふて突つ立つたところ、又南泉の所へ行つて錫を振つたところは甚だ孤標だ、孤標は錫杖の事で、其錫杖を一度振つて突つ立つたところは、實に棒杭を立つたが如く、誰も寄付く者が無い、肩を竝べる者が無い、實に天天下唯我獨尊の境界だ。繩牀三邊、閑遊戲、繩牀と云ふのは坐禪をするところの牀のことだ、坐禪をする人は一人前の座牀が三尺になつて居る、永平寺などで見ると解りませんが、今度總持寺の方でも衆寮と云ふものが出来たやうだが、衆寮は看讀する處である、章敬和尚と南泉和尚の坐禪して居る所へ行つた麻谷が、三度廻つたところの様子の綽たりとしたところ、又卓然として立つたところの様子は實に動中靜といふか、何となく閑日月がある、さうして章敬の腹も探り南泉の腹も探るところの鹽梅がある、叢林擾擾是非、後の人がこの公案を批評をして、イヤ是は是々云つた方が宜いとか、不是々々云つたのは全體悪いなど色々言ふから、そんな盲目坊主が大勢寄つて議論ばかりするから、そこを叢林擾々として是非生ずと申したので、三人以上寄つた所を叢林と云ふ、擾々と云ふの

は擾亂することである。想像、獨體前見鬼、是は死人の前に行くとなんだか動いたやうな氣がしたり、又夜道を歩いてても自分で怖い／＼と思つて居ると、向ふに怖い物が見へ、化物が居るのぢやないかと思はしむるのは、自分の妄想からそんな物を拵へるのである。或る寺男が夜遊びに行つた歸りに、足元にギユツと云つたから蛙を踏み殺したな氣の毒なことをしたと思つて寝ると、其晩蛙の化物が出た、そこで翌朝氣の毒な蛙を葬つて遣らうと思つて其處へ行つて見ると、茄子であつたと云ふことである、つまり妄想で以て夢を見たので、茄子を踏潰して蛙と思つたのは、所謂「獨體前に鬼を見る」のである。全體法を合點した人から見れば、是もよし／＼、不是もよし／＼、皆中つて居る、要は文字にはない、是不是を透得したところに徹底して見なければならぬ、さうした上から見ると、章敬の是といふた心持も、南泉の不是々々と道ふた宗旨も自づと解つて來るのである。

第十七則 法眼毫釐

【垂示】示衆云。一雙孤雁搏地高飛、一對鴛鴦池邊獨立、箭鋒

相拄則且致、鋸解秤錘時如何。

【讀方】衆に示して云く。一雙の孤雁地を搏つて高く飛び、一對の鴛鴦地邊に獨立す、
箭鋒相拄ふことは且らく致く、鋸解秤錘の時如何。

【講話】一雙孤雁、一雙と云ふのは、御承知の通り雌雄にして二羽のことである、こ
ろが孤雁とある、二つか知らんと思つたら一つだと云ふ、其次に搏地高飛、地と云ふ
のは大地だから低い處を云ふ、低いのか知らんと思ふと高く飛んで居ると云ふか
ら、低くもならないし高いにもならない、是は何を云ふかといふと、成る程、法と云ふ
ものは一と定むる譯にもいかぬ、二と定むる譯にもいかぬ譬へば水と氷のやうな
ものだ、寒氣に逢へば水が氷となる、氷となれば刃の如く鋭い姿形になつて來る、暖
氣に逢へば氷が水になる、氷と水は一としたものであらうか、二としたものであら
うか、氷と水とは一緒ではないから一とする譯には行くまい、それなら別な物かと
云ふと、其性質から云ふと矢張り別の物でもない、水の外に氷がある譯じやないし、
又氷の外に水がある譯じやない、だから氷と水は一にして一とせられぬ、また二に

して二ともせられぬ、誠に一に非ずして二、二に非ずして一と云つても宜い、つまり
同中異あり異中同ありと言つたわけだ、今低ひ地を搏つて高く飛ぶと云ふから、是
も高いか知らんと思つたら低い、低いと思つたら高く飛んで居ると云ふのだから、
低いが高いでもなし、高いが高いでもない、此前一寸御話を致しました衆生と佛と
云ふものはドレ程違つたものでせう、一と口に云ふたら衆生とは迷つた人を指し、
悟つた方の人を指して先づ佛と云ふけれども衆生と佛とは元と何も別なものぢ
やあるまい、彼の趙州の無字の公案などで見ると佛性の事が能く解る、佛性も本性、
宇宙の大精神と云ふが、さう云ふことから見たら衆生と佛は何も二つある譯ぢや
ない、二つある譯ぢやないけれども、迷へば衆生と云ふ名が付き、悟れば佛と云ふ名
が付くので、佛教の方から申すところしても同一の者じや、假令動物であらうが植
物であらうが、皆天地同根萬物一體のものである、一體とは何だといふと佛性を云
ふのだ、其佛性が縁に觸れては衆生ともなり佛ともなるので、本來皆一つのものだ、
丁度先程の御話の通り、水は寒い氣候に觸れると氷となり、暖い氣候に觸れば水
となる、其本は矢張り一つだ、雨霞雪や氷と隔つれど解くれば同じ谷川の水、其水の

本體を現して居るところから云ふと、雨となつても霞となつても一つのものだけ
れども、縁に觸れて形相が變れば皆働きが變つて來る。だから異と云ふのは差別の
方で、差別の中にも矢張り無差別があつて、無差別の中に矢張り差別がある。佛教で
は差別無差別を分けることは出來ない、無差別のなりが差別、差別のなりで無差別
だからチー。だから茲はその一とも二ともせられないことを云ふて居るのだ。其次
の句も同じことだ。一。對。鴛。池。邊。獨。立。一。對。と云ふのは鴛鴦一と番ひのこと、御承知
の通り鴛鴦と云ふものは誠に仲が好い、雌なり雄なりドツチか過つて死ぬと、後
のもの餌を食えずに死ぬと云ふことである。又離れないものだ。と云ふことも聞い
て居る、さうすると一對の鴛鴦ならば是は二つである、さうかと思ふと一つが池邊
に降りて立つて居ると云ふ、さうすると又二つともせられぬ、一つともせられぬ、そ
こで文字でも言葉でも説明の出來ないことが一つある、迷ひと云ふて形付ける譯
にもいかないし、悟と云ふて形付ける譯にもいかない、どうもさう云ふことは、水を
飲んで冷煖自知で、自分で味つて見なければ合點らぬ、文字で書き現はす譯にも、説
明する譯にもゆかない、是と同じことが茲にモウ一つある、何んとも形付けて了ふ

ことが出來ない物がある、即ち箭。鋒。相。柱。則。且。致。是。は。鏃。と。鏃。と。相。柱。ふ。こと。で、それは
昔弓の名人で、紀昌といふ師匠と飛衛と云ふ弟子があつた、ところが弟子の方も仲
仲弓の上達した人であるから、今師匠を殺して了へば天下は乃公一人だが、師匠の
居る内は乃公が一人と云ふ譯にいかぬ、どうか謀を以て師匠を殺して了はふと思
ふて居た、或る時丁度野原で師匠と出つ喰はした、そこで師匠を射て了うとした時
に、師匠の方でも箭を放なしたところが、途中で鏃と鏃がカチンと合つたと云ふこ
とがある、是は名人と名人との出逢つたことを云ふので、師匠と弟子と心が一つと
なつて居たのである、之れを佛教の上から云ふと作家相見の様子だ、作家と云ふの
は家を興したと云ふので、餘程働きのある人の事を指して作家と云ふ、其作家と作
家と相見をした、其敏捷い人と敏捷い人が出ツ喰はしたから水の漏れる隙間もな
い、是れを作家相見と云ふ。古人は又、相逢無主又無賓、ツクというた、誠に知音と知音と作
家と作家と相逢ふて見ると、主も無ければ賓もない、賓主が一つになつてどれが賓
やらどれが主だやら辨わからない、逢ふて見たらば唯一人だ、此に至れば一人と云ふこ
とも要らない、既に賓主一人になつたらばモウ眞實一人と云ふことも要らない、と

ころが今此處では箭鋒相拄ふことは即ち且く置きまして、鋸解秤鍾時如何と云ふ、此鋸解と云ふことは鋸で引割ること、秤鍾とは衡を持つて輕重を見るときいふことだ、さうすると云ふと、誠に根元に入つて見ると一つのもの、一つのものを此處で分けて見なければ解らぬ、即ち衡を以て輕重を立て、見なければなるまい、誠に一つのところへ持つて行つて、鋸で引割つて之を二つに分析して見なければならぬ。

【本則】舉。法眼問脩山主、毫釐有差天地懸隔、汝作麼生會脩云、毫釐有差天地懸隔、眼云、恁麼又爭得脩云、某甲只如此、和尚又如何、眼云、毫釐有差天地懸隔、脩便禮拜。

【讀方】舉す。法眼脩山主に問ふ、毫釐も差あれば天地懸かに隔たる、汝作麼生か會す。脩云く、毫釐も差あれば天地懸かに隔たる。眼云く、恁麼ならば又争でか得ん。脩云く、某甲只此くの如し、和尚又如何ん。眼云く、毫釐も差あれば天地懸かに隔たる。脩便ち禮拜す。

【講話】法眼は文益といふ人で、法眼宗の祖師である。此人は徳山から四代目だ、徳山の弟子が雪峯でも有名な人である、雪峯や徳山を知らない人はない。次が地藏桂琛、是も有名な人だ、其お弟子が法眼の文益である。又脩山主と云ふ人、是は南泉の法を繼で居る、南泉は馬祖下の人で、其南泉のお弟子が趙州で此前の公案に出ました、猫を提げて言ひ得ば則ち斬らずと云つて猫を提げた和尚だ、其脩山主も、南泉のお弟子でも是も仲々偉い人で、此公案は偉い人と偉い人の立合だ、毫釐有差天地懸隔、汝作麼生會三祖大師の信心銘と云ふがある、三祖とは達磨大師から三代目で、信心銘と云ふものを書いた、今でも行はれて私共始終讀んで居る、其中に、毫釐も差有れば天地懸に隔たると云ふことが言つてある、成る程さうですねえ、毫厘とは鵜の毛一本程と云ふことで誠に僅なもの、其僅な違ひがあれば天地懸に隔たる、東海道を行かうと思つたら西の方へ足を向けてドン／＼行くと云ふのであるが、それを東に足を向けて行けば行く程天地懸に隔るで、實際タッタ一念と足だけでも向ひ方が違ふと千里萬里の違ひになつて来る、タッタ一念でも其通りで、佛と殆ど違はない身體を有つて居りながら、若し一念過つたことを行るとモウ佛と云ふもでな

い、大變に悟りと云ふものは隔つて来る、で此一念が大事だ、所謂一念が大切である、一分八間と云ふことがある、彼の弓を射る時に言ひますが、手許で一分違つて居ると思ふと向へ矢が行けば八間も違ふ、音樂の調子でも其通り、僅の違ひで調子が合はない、一寸した違ひで音樂の音色を能く奏する事は出来ない、だから毫厘も差あれば天地懸に隔るものである、モウ一つ言ふて見ると、先程話した衆生と佛と云ふものは天地程懸かに隔たるものであるが、其衆生となるのも一念の迷ひ、佛となるのも一念の悟りだ、誠に毫厘の差で是だけの迷ひと悟りとこの違ひが現れて来る、ホンの一念の上で悪人と善人とが分れて来る、之を法華に於ては長者の息子に譬へてある、随分立派な長者の息子だけれども、一念が迷つた爲に家を振り捨て、他國に跽跽して乞食になつた者がある、そこで自分が是は悪いと云ふことを悟つて自分の身を顧みると、乃公は長者の息子である、此儘いけば長者の後取りが出来ぬ、と云ふ始まりは何んだか、と云ふとタッタ一念だ、一念で乞食にもなれば長者の家督相續も出来る、一念が迷ふと迷ひに迷ひを重ねて、何時まで經つても乞食をして居らなければならぬ、私共は元とは何だと云ふと、矢張り長者の息子である、佛性の上

から言ふとお互は長者の息子だ、それが一念の迷ひからして矢張り他國を跽跽する人となる事が無いとも言はれますまい、で斯う云ふ事を法眼が脩山主に試験問題のやうにして出した、すると脩山主も道に人物である、毫厘有差、天地懸隔と同じ言葉を以て答へた、言葉は同じことだけれども、法眼と脩山主とは意味に於て大變違つて居る、よく世間で云ふドウダ先生―庭の掃き掃除などするとうだ先生―人に使はれて居る先生も博士の先生も先生の字は同じで、又言葉も同じ言葉である、けれども實質は大變違つて天地懸かに隔たつて居る、けれども其言葉と文字の義理合は同じものだ、法眼と脩山主も其通りで、其言ふ言葉も同じく文字も同じだけれども、法眼の境界と脩山主の境界即ち法を得た人の言葉と、法を得ない人の言葉とは大變に違ふ、脩山主は餘程好いところまで行つては居るけれども、羅殺一纏、卵にまだ薄皮を被つて居る、本當に脩山主のは活きた法門が自分のものになつて居らぬが、法眼は活きた佛法を合點して居る、脩山主はまだ精神に風呂敷を被つて居る、それだから法眼が見抜いたのである、眼。云。慙。麼。又。争。得。お前の言ふやうなことならば佛法は今日まで相續の出来るものぢやない、お前の言葉と三祖大師の「信心銘」

を書いた心持と違つて居ると斯う云つた。是は法眼がモウ、チャンと脩山主の腹の中を淨玻璃の鏡で照して見た上には又上があるもので、殊に又法眼は大修行底の人であるから能く見える、それで見たから言ふので、そんなことでは三祖大師の心を得たとは言はれない、佛法と云ふものはそんな事では相續が出来るものではない、道に脩山主黙つては居らぬ、脩云、某甲只如此和尚又如何、とズツト下手に下つて頭を下げて聴く氣になつて来た、そこに佛性がある、我慢が折れて来て聴く氣になつて来たところに佛法が具はる、之は大變良、私は是までの修行だ、和尚又如何、どうか言ふて下さいといふ様子だ、さうすると法眼が毫釐有差、天地懸隔、と復た同じ事を言はれた、先きに言つた言葉と同じだが是れで薄紙一枚除れて来て、脩山主は禮拜をして、ア、有難い、是で私は安心の地に至りましたと禮拜をせられた、先きの言葉を持つて来て餘計のことは言はないところが法眼です、さうして脩山主が未だ薄紙を被つて居て本當のところまで悟つて居ないから、其薄紙を此言葉で剝て了つた、法眼の接得はよく斯う云ふやり方をせられた。

玄則と云ふ人が法眼の所に三年も隨身して居つたが、一向法眼和尚の所へ佛法

を聴きに行かない、そこで法眼が言ふのに、お前は俺の所に何年居る、斯う言つた、法眼がボケたやうな話だ、此玄則は監院と云ふて其時は住職の代りをする重役を勤めて居つたのだ、其人が三年も居るのに法眼が知らぬことはありますまい、それを知らぬやうな顔付きで、お前は乃公の所に何年許り居つた、と言ふと、玄則が、貴僧の所に居ることが既に三年であります、私は監院の役をして居るから知らぬことはいかあるまい、と斯う言つた、さうか三年居るか、どうして乃公に佛法を聴きに來ないかと法眼が言つた、すると玄則が、イヤ私は貴僧の所へ質問に來ないのは貴僧を馬鹿にしたと云ふ譯ではない、私は以前青峯和尚に隨身した、其の時悟つたから貴僧に聴くことがありません、青峯の所でどう云ふことを悟つて来た、青峯の所で如何、是學人之自己と問ひました、と云つた、是れは大變良、言葉である、どうも自己といふことは知らなければいけない、ソクラテスも、汝自身を知れと言つたが、此自身を知ると云ふのが一番必要でせう、道元禪師も正法眼藏現成公案といふに斯う言はれて居る、佛道を習ふと云ふは自己を習ふなり、自己を習ふと云ふは自己を忘するなりとある、自己を忘する、と云ふは自己の心身をして脱落せしむるなり、自己を知

らんとするならば自己を忘れなければならぬ、けれども始まりは如何なるか、是れ學人の自己を聞くがよい、それで玄則監院が青峯に「如何なるか、是れ學人の自己」と問ふた、すると青峯が「丙丁童子來求火」と言ふた、この語で悟つたといふた、すると法眼が其言葉を聞いて「ア、どうも青峯は良いことを言ふた、誠に感心なものだが、貴様が聞いたつて分りはしない」と言つた、すると今度玄則が「イヤ分つて居ります」と言つて見よ、……すると玄則が「丙丁」と云ふのは「ヒノエ、ヒノト」と云ふことだ、ヒノエ、ヒノトの年の童子が來つて火を求めると云ふことだ、所謂自己を以て自己を求めると云ふことであります」と説明をした、すると法眼が「未だ汝は解せず、貴様は未だ悟らない、悟らないことを分つたと言ふて説明をすれば尙分らない、尙分らぬことを分つたと云ふ、そんな者は今日佛法を相續する者ぢやない」と言ふて玄則を叱り付けた、すると玄則は自分ばかり悟つた氣になつて居るのを酷く叱り付けられたものだから、ナニ此和尚、年が寄つてボケて居るからアんなことを言ふて、乃公の言ふことが分らぬ、乃公がアレ程説明しても分らぬ、こんな和尚の所に居つたつて仕方がない、と云つてムツとして外へ出て向ふへ少しく行つて中路にて自分が考へた、

法眼と云ふ和尚は天下に名高い和尚だ、成る程法眼に言はれて見ると是はどうも乃公が未だ悟らないらしい、モウ一度法眼の所へ參つて聽かうと思ふて返つて來た、禿禿は是れが大變私に宜いと思ふ、一遍聽かうと思つた此時には最早我慢が除れて了つて居る、それから威儀を具へて和尚の前へ來て、私は貴僧に「モウ一遍御聽き申したい」と云ふと、法眼が「何んでも宜いから聽きなさい」と云ふ、其時に玄則が青峯の所で問ふた様に、如何是學人之自己」と云つた、法眼が今度は何んと言ふたか、丙丁童子來求火と言つた、此時に玄則が始めて眞に大悟徹底したと云ふことである、前には自分ばかり悟つた氣になつて居る、矢張り薄紙一枚被つて居る、薄い風呂敷を被つて居る、法眼は前に青峯の言ふた言葉と同じ言葉だけれども妙なものです、自分が我慢を無くして聽かうと云ふ氣になつて居るから、如何なるか、是れ學人の自己と問ふた時に、丙丁童子來求火と言はれて、自己の精神がカラツと明になつた、同じ言葉だけれども大に違ふ、今此法眼と脩山主との問答も、毫釐も差有れば天地懸に隔ると云ひ、復た後にも同じく毫釐も差あれば天地懸に隔ると言ふたが、自分の我慢を無くして始めて自分の佛法になつたと云ふ公案の意味が誠によく似て居る

と思ふ。

〔頌〕頌云。秤頭蠅坐便欵傾、萬世權衡照不平、斤兩錙銖見端的、終歸輸我定盤星。

【讀方】秤頭蠅坐すれば便ち欵傾す、萬世の權衡不平を照す、斤兩錙銖端的を見るも、終に歸して我が定盤星に輸く。

【講話】頌云。秤頭蠅坐便欵傾、秤と云ふは衡のことで、頭と云ふのは竿のことで、そこで蠅坐と云ふのは蠅が一寸止まつたことである、チヨイと蠅が止まつても傾くのが秤である、是れは誠に法眼の毫釐も差有れば天地懸に隔る、と言ふた言葉と、又脩山主の毫釐も差有れば天地懸に隔る、と言ふた言葉とは同じことだけれども、之を佛法といふ秤に掛けて見ると、チヤンと輕重が分るといふのである。萬世權衡照不平、秤と云ふものは昔でも今日でも萬世の權衡だ、權衡の權と云ふのは錘りで衡と云ふのは竿と云ふことである、昔でも今日でも秤は不平を照す、間違ひなくモウちやんと重い物は重い、軽い物は軽いと何時でも同じく不平を照す、斤兩錙銖見端的。

十六兩を斤と云ふ、それで斤兩と云ふのは重ひ方を云ひ、錙銖と云ふのは軽い方を云ふ、さうすると斤兩錙銖と云ふと重いものと軽いものと云ふことになる、此重いもの軽いものを端的に見る、秤に掛けて見ると重い物は重いもの、軽いものは軽いもので、チヤンと判然した、俗に目分量と云ふことがある、目分量と云ふことは能く當るもので、大概輕重が分る、況や秤に掛けて見ると重輕が能く分るに相違ない、終歸輸我定盤星、終にと云ふことはオンヅマリと云ふことで、我と云ふのは天童和尚で、乃公の定盤星に負けるだらう、世間の秤でも私の定盤星には負けるであらう、我の定盤星と云ふのは、乃公は少しも違はない秤を有つて居る、世間の秤と違ふものがあるといふのだ、世間の秤は輕重を計るけれども、掛ける人によつて隨分秤の目を盗んだりして當にならないところがある、乃公の秤はそんなものじやないといふのだ、此秤は金剛經の中に、我法平等無有高下と云ふこの秤だ、我が法は平等にして高い低い無い、此法と云ふ秤に掛けることは違はない、人間の秤と云ふものは違ふが、平等の法程違ひの無いものはない、天際日上下、檻前山深水寒、太陽が山の端へ上れば月は山の西に下る、千山春來れば花爛熳、萬園秋去れば枯葉凋落さ、法に

は一點の私は無い、この定盤星に及ぶものは一つもないさす。

第十八則 趙州狗子

【垂示】示衆云、水上葫蘆按著便轉、日中寶石色無定形、不可以無心得、不可以有心知、沒量大人語脈裏轉却、還有免得底麼。

【讀方】衆に示して云く、水上の葫蘆按著すれば便ち轉ず、日中の寶石色に定れる形無し、無心を以ても得べからず、有心を以ても知るべからず、沒量の大人語脈裏に轉却せらる、還つて免れ得る底有りや。

【講話】この則は謂ゆる趙州無字の公案で却々むつかしい、臨濟宗ではこの無字の公案は容易に通れぬ、三年も五年も掛つて此の公案を通つたと云ふことも聞いて居るけれどもそんなに六つかしいことを言はなくとも、今は一と通り分つたら夫で宜からうと思ふ、先づ垂示に水上葫蘆按著便轉、葫蘆と云ふのは瓢箪のことだ、あの瓢を水へ浮して置いて、さうして抑へるとビヨコンと向の方へ出る、又コツチを

抑へると又向の方へ出る、一向抑へることが出来ない、此趙州の言葉は水上の葫蘆みたやうなものだ、或時には有と言ひ、或時には無と言ふ、定まつて居て定らない、コツチを抑へると何時の間にか轉じて了ふ、日中寶石色無定形、水晶の玉を日中に出して示せば、水晶の玉の色が色々になつて定まつた色が無い、白くなつたり、青くなつたり、黄色くなつたり、赤くなつたり、チラ／＼してチツとも定まつた色が無い、法と云ふものは皆そんなものだ、俗には瓢箪と云ふ、法は實に瓢箪のやうなものだ、それでは法は何んにも抑ゆる所が無いかと云ふと無いことはない、チャント軌微がある、軌微があつて居てサツバリ軌微がない、是が佛法の急所だ、佛法の急所を掴むことは、彼の鰻を掴むると同じで、急所も何も知らない人が掴むると決して掴まらない、ところが急所を知つて居る人が掴むと一度でチャンと鰻が動くことが出来ないやうになつて了ふが、佛法の急所は急所を知つて居る人から云ふと、有なら有、無なら無と云ふのでチャンと極りがある、急所を知らないと云ふと、有と言ふても無と言ふても掴まへ所が無い、丁度日中の寶石みたやうなもので定まつた形が無い、不可以無心得、不可以有心知、無心と云ふのは、外道二乗の坐禪だ、我が宗門の

坐禪はさうではないが、印度外道の禪は無心定に入ると云ふことがありますが、或は観法なんど云ふ、是は無心になつて目を瞑つて法を觀する、我宗門の坐禪は有心でもなければ無心でもない、どうかすると坐禪は無心になることだと思つて居る、枯木死灰の禪と云ふて、宗門では大變嫌ふ、今此無心定だの觀法だのと云ふやうなそれなどでも得らるゝ譯でもない、有心を以ても知る可らずと云ふのは智慧才覺だ、智慧才覺でも得ることの出来ないものが茲に一つある、さうして見ると無心の觀法でも智慧才覺の有心でも得ることの出来ないものがある、沒量大人語脈裏轉却。是はモウ樹を以て量ることの出来ない大量の人で、所謂大人物だ、此大人物でも語脈裏に轉却せらるゝことがある、是はよくあることで、大人物なんど云つて居るけれども、そこへ行つて何か褒めて御覽なさい、褒めると直に自分の身體を忘れる程ビヨコ／＼と浮出す人がある、それで餘程偉い人でも褒められたので其語脈裏に轉却せらるゝといふのです、貴方方の事を人が悪く言つて居ますと云ふと、直に語脈裏に轉却せられて、ナニ悪く言つて居るうと云つて直に口を尖らす、是は言葉に附いて廻るのです、餘程偉い英雄豪傑なんど云つて居るけれども、妻子眷屬の語脈裏

に轉せらるゝ、阿諂追從の語にも轉却せらるゝ、世界を動かすやうな英雄でも一婦人の爲に轉せられることが幾らもある、妻を濟度の出来ない人が幾らもある、だから餘程沒量の大人でも語脈裏に轉却せらるゝのだ、此趙州と云ふ人は佛性と云ふことを知り抜いた人だから、或時には有と云ひ或時には無と言ふ、だから趙州みたやうな人の言葉になつて來ると餘程偉い人でも語脈裏に皆轉却せらるゝ、還有免得底麼、何んと人が言つても此語脈裏に轉却せられない、言葉に附いて廻らないやうな人があるだらうか、何うか。

【本則】舉。僧問趙州、狗子還有佛性也無。州云、有。僧云、既有爲甚麼却撞入這箇皮袋。州云、爲佗知而故犯。又有僧問、狗子還有佛性也無。州云、無。僧云、一切衆生皆有佛性、狗子爲什麼却無。州云、爲伊有業識在。

【讀方】舉す僧趙州に問ふ、狗子に還つて佛性有りや也た無しや。州云く、有。僧云く、既に、有甚麼と爲てか却つて這箇の皮袋に撞入するや。州云く、他の知つて故らに犯

すが爲なり。又僧有り問ふ、狗子に還つて佛性有りや也。た無しや。州云く、無僧云く、一切衆生皆佛性有り。と。狗子什麼としてか却つて無なる。州云く、伊に業識の有る在るが爲なり。

【講話】此本則でも、二人の坊さんが矢張り趙州の語脈裏に轉却せられて居る、併し二人の坊さんばかりでもない、世界中には随分さう云ふ者があるに相違ない、全體佛性と云ふと、何か私共の身體の中に佛となる種でもあるかのやうに思つて居るのが通常だ、ところが御經には、衆生即佛性、佛性即衆生、依時異淨不淨とある、何も佛性と云ふものが私共の精神の中に潛み隠れて居るものではない、此吾々の頭から足の爪先まで佛性が現れて居る、其佛性は時の異なるによつて淨と不淨がある、即ち心が大聖人になれば佛性が清淨である、又悪いことをして監獄へ這入つて赤い著物でも著て居れば淨は不淨になつたのである、赤い著物を著て居つても佛の性質は持つて居る、それで中の方に潛んで居ると云ふ譯じやない、だから人の心は分らぬなどと云ふけれども、ナニ顔付を見ても篤實な人と、亂暴な人とは大概分るものである、即ち人の佛性が其上に現れて居る、それから又因縁によつて生ずるもの

は皆佛性と云つてある、此水差でも因縁で出來て居る、此卓子でも矢張り因縁で出來て居る、それだから佛性と云ふものは淨と不淨とあると云て居るけれども、全體は佛性は淨不淨を離れたもので、其佛性は一切を離れて居るから、或時には長くも現れて來る、或時には短くも現れて來る、又或る時には善にもなり惡にもなる、佛性は善惡を離れたものだから、其人の使ひ方によつて惡にも善にもなつて來る、同じ水だけれども神様へ上げたり佛様へ上げたりするものは清淨な水になる、けれども、若し不淨な物へ入れたら其水は誠に穢ない水になる、なるけれども水の性質の潤ふと云ふことは少しも違つて居ない、今佛性を合點させるのが此則の本領だ。

舉僧問趙州、狗子還有佛性也。無。或る坊さんがアノ狗にも佛性がありますかと趙州に問ふた。此坊さんは狗には佛性と云ふものは無い、佛性があるならば横になつてワン／＼言つて歩く氣遣はない、是は佛性が無い物だと腹の中に極めて居つたのである、是は道元禪師の「眼藏」の中によく書いてあるから、見るがよい、何故なれば佛性ありや又無しやと云ふので、有りと言つても無いと言つても宜い、斯う云ふ言葉で以て來て趙州を試みる鹽梅がある、さう云ふ風に見ると此坊さんの意が能く

分る、ところが州云有、趙州が佛性ありと答へた、何故さう云ふたか云ふと、趙州の考へでは、此坊さんは狗に佛性が無いものだ云ふ量見を定めて來たから、それで趙州が有と云ふた、此有と云ふことは有ると云ふのぢやない、此處では、有の佛性を言つて居る、つまり此趙州の言葉は日中の寶石です、水上の葫蘆です、有と言つても有ると云ふことぢやない、有も亦有に非ずだ、此公案は大變修行するには結構である、直須句外會宗、向言中莫取則、斯う云ふ説がある、此有無と云ふのは世間で云ふ有ると云ふ有でもない無いと云ふ無でもない、モウ言句の外に宗を會すべしで、言葉の中に向つて規則を取るなど云ふことであります、禪を學ぶに此言葉が入用だと思ふ、今趙州が有と云ふ、何も有るの無いのと云ふことぢやない、趙州の句外に向つて宗を會すべしである、有だの無だのと云ふ言中に向つて則を取つてはいかない、茲では有の佛性を言ふたので、天地世界宇宙皆悉く有の世界である、ところが此坊さんは今の言葉に附いて來た、僧云、既有爲甚麼却撞入這箇皮袋、貴僧は既に有と仰しやる、ハチおかしな話じや、貴僧は既に佛性ありと言はれたが、何んとしてかアノ皮袋の内に這入り込んで横になつて四ツ足でワン／＼云つて歩いて居りますか、

と斯う云ふたのは此の坊さんは言中に向て則を取り、句外に宗を會せないのである、此の有と云ふ佛性を直に手を拍つて合點しなくちやならんが、斯んな皮袋に這入つて四ツ足でワン／＼云つて居るのはどう云ふ譯だ、と豪い理窟を言つて來た、すると趙州向ふでそんな理窟を言ふから已むを得ず、州云、爲佗知而故犯、佛性を知つて殊更に犯して、四ツ足でワンワン云つて居るからだ、此、故らに犯すと云ふ、全體、世界は皆故らに犯して居る、暑い時には暑うござると言ひ、寒い時には誠に寒うなりましたと云ふ、そんなことは誰でも知つて居ることである、けれど知つて故らに犯して居るではないか、毎日の仕事でもさうです、何も朝起きて顔を洗つて茶を飲んで掃除をして又寝て起きて毎日同じ事だ、是れを知つて故らに犯して居る、天地皆知つて故らに犯して、狗になつてワン／＼云つて歩いて居る、アノ歩いて居るのが夫が佛性の現れたのだ、其外に別に佛性がありはしない、古人の言葉に斯う云ふことがある、欲知庵中不死人、豈離只今此皮袋、是が面白い、庵中に不死の人がある、それを知らんと欲せば豈只今の此の皮袋―身體を離れて庵中に不死の人がある譯ではない、庵中と云ふのは吾々の身體と言つても宜い、吾か身體が庵だ、其庵中に不

死の人がある、此お腹の中に佛性がある云ふ譯ではない、此身體を離れて別に庵中に不死の人がある譯でない、此身體がソツクリ庵中不死の人の現れた。又有僧問、狗子還有佛性也無、今度は他の一人の僧が矢張り同じことを問ふた、すると州云無、趙州が今度は無と云つた、是は無いと云ふことぢやない、無の佛性です、宇宙悉く無の佛性を云つて居るのである、けれども坊さんは直に此言葉に就て理窟を言ひ出した、僧云、一切衆生皆有佛性、狗子爲什麼却無、涅槃經には、一切衆生悉有佛性とある、此坊さんは狗でも皆佛性があると云ふことを承知して來たので、今趙州が無と云つたから理窟を言ひ出した、狗子は何としてか佛性が無い譯はないと云ふ問であります、是も先の坊さんと同じく言中に向つて則を取つた、趙州も向が理窟を言ふから此方も理窟さうに話をした、州云、爲伊有業識、在それは外でない、狗に業識と云ふものがあつて今は四ツ足でワンワン言つて居ると答へた、佛教から云ふと業識と云ふのは前世の業身、即ち悪業の仕業があるからア、して狗になつたのである、全體業識と佛性とはどれ程違ふでせう、それは先程淨不淨と云ひました通り、業識と云ふ時には佛性が不淨になつて居る、それから佛性と云ふ時には清淨になつて

居る、業識と云ふても佛性と云ふても一つなもので、水と氷みたやうなものだ、佛性が業識として現れて來た時には佛性無く、清淨な時には業識が無いのである、丁度水が凍らない時には水ばかりになつて氷は無い、また凍る時には氷ばかりになつて了つて水が無いと同じだ、今此處では、業識と云ふたら佛性が業識に取られて了ひ、佛性と云ふたら業識は佛性の方に取られて了ふのである、業識と佛性と二つある譯じやない、即ち一つのものが業識となり佛性となつて居るのである、唯此一本の手だけけれども、握て人を敲くところの拳にもなり、開いて人を擦るところの掌にもなる、また人に物を與る手にもなり、人の物を奪る手にもなる、だから此時には業識と云ふものが矢張り佛性になつて居るのである。

【頌】頌云、狗子佛性有、狗子佛性無、直鉤元求負命魚、逐氣尋香雲水客、嘈嘈雜雜作分疎、平展演、大舖舒、莫怪儂家不、慎初、指點瑕疵還奪璧、秦王不識菡相如。

【讀方】狗子佛性有、狗子佛性無、直鉤元命に負く魚を求む、氣を逐ひ香を尋ね、雲水の

客。嘈。嘈。雜。雜。として分疎を作す。平に展演し。大に鋪舒す。怪しむこと莫れ。儂が家初めを慎しまざることを。瑕疵を指點して還つて壁を奪ふ。秦王は識らず。蘭相如。

【講話】頌云。狗子佛性有。狗子佛性無。全體佛性の有無と云ふことは文字から云ふと有るか無いか云ふ事になつて了ふが、佛性は有佛性である、佛性は無佛性である、狗子佛性有である、狗子佛性無である。直鉤元求。負命魚。直鉤は眞直な鉤―釣り針だ、といふのは趙州の鉤は有にも曲つて居らず無にも曲つて居らぬ、太公望が眞直な鉤で魚を釣つたと云ふが、趙州も直鉤で魚を釣るのだ、負命魚、と云ふのは、是は有と云ふ餌も食らない無と云ふ餌も食らない、全體さう云ふ魚は實に活金鱗だ、多くは有と云ふ餌に取付き無と云ふ餌にも取付くが、趙州は有無いづれの餌にも取付かない魚を求めるのである、何んでも名利の餌が一番取付き易い、ところが趙州は、そんな餌には取付かない活きた魚を求めやうとして居るのである。ところが、此二人の坊さんを始めとして多くの雲水は、逐氣。尋香。雲水。客。と云ふやうに皆餌の香ばしい所へ尋ねて行く雲水許りだ、彼の魚を釣る人は餌へ糠を塗つて置くと、其糠が香ばしくつて魚が寄つて来る、或は飯粒に糠を入れて香ばしくすると魚が寄つて

来ると云ふことを聞いたが、氣を逐ひ香を尋ねる連中が其處へ群がるものである。嘈々。雜々。作分疎。文字や言葉に附いて廻る其雲水達が、皆名利の香を尋ね氣を逐ふてやつて来ることが恰も嘈々雜々、急に雨が降つて来るやうにバラバラ云ふて騒々しい有様だ、此分疎と云ふことは、有と云ふのが佛性の有るものだ、無と云ふ方は佛性の無いものだ、と云つて、有無の紛争ばかりして居るが、そんなことは趙州の有無には用事がない、趙州の店には品物が澤山あるので、平展演。大鋪舒。澤山な品物が平かに並べてある、三越か白木屋にでも行つたやうな工合に、何の品でも店一杯に擴げてあるのである、即ち、知つて故らに犯すと云ふ品物もあれば、彼に業識の有る在るが爲なりと云ふ品物もある、其他、有と云ふ品物もあり、又、無と云ふ品物も並べてある、何でも趙州の店には品物の切れると云ふことはない、莫怪。儂家。不愼。初、誰も趙州が或る時は有と言ひ或る時は無と言ふた、其初めを愼まないと云ふことを云ふなどいふことである。指點。瑕疵。還奪。壁。是は故事を引いて來たので、彼の蘭相如は趙の國の人で、始め夫程の人でもなかつた、けれども段々勉強して偉い人に成つた、さうして遂に趙王に薦められて大臣にまで成つた人である、それが大切な趙の

國の壁を秦王が十五城と換へると云ふことから其使を命せられて秦の國へ行つたのである、さうして其壁を秦王に出すと云ふと、秦の王が夫を受取つて十五城と換へるやうな景色も何もありはしない、もしも此壁を無駄に奪られて了ふては、主君趙王に對する使命を果すことが出来ない、どうかして之を取返さうと思つて、其處に瑕がありましたと云ふと、秦王が何處にあると言つて出したから其壁をヒツたくつて終に趙の國へ歸つたと云ふ故事である、指點瑕疵と云ふのは其瑕があると言ふて秦王を欺瞞したところである、秦王はそれとも知らず本當に瑕があるか知らんと思つてグズグズして居る内に藺相如がヒツたくつて了ふたと云ふ事である、今此處は何を云ふかと云ふと、趙州の方は藺相如に譬へて此の二人の坊さんは所謂秦王である、拙い秦王だけれども、二人の坊さんは立派な壁を趙州より受けながら壁なることを知らぬ、そこであるから他の知つて故らに犯すが爲なりと云ひ、彼に業識あるが爲なりと云ふて、其處に瑕があるそれは瑕であるぞと言ふて此坊さんの壁をば、趙州が自分に奪つて了つた、丁度アノ秦王の所へ使に行つた藺相如のやうな味がある。

第十九則 雲門須彌

【垂示】示衆云我愛韶陽新定機、一生爲人拔釘楔爲甚有時也開門掇出膠盆、當路鑿成陷窞、試揀辨看。

【讀方】衆に示して云く、我は愛す韶陽新定の機、一生人の爲に釘楔を抜く甚としてか有る時は也、た門を開いて膠盆を掇出し、路に當つて陷窞を鑿成す、試みに揀辨して看よ。

【講話】風邪を引いて、十五六日休み、二三日前から漸く起きて居る位で、お醫者さんからも、今日は休んだら宜からうと云ふ忠告もありましたが、さう急にお断りしても、幹事さんがお困りであらう、兎も角もお断りを兼ねて行つて來やうと思つて、今日は出ました、何だかまだ足がフラ／＼して居るやうな譯であるから、今日は唯だ一則だけを短かくお話して參ることに致さう。

我愛韶陽新定機、一生爲人拔釘楔、と云ふ此二句は、碧巖の頌にある、雪竈和尚の言葉だ、誠に善い言葉であるから、萬松老人も雪竈の語を此處に借りて來て、本則に、僧

問、雲門とある此の雲門和尚の事を述べるのである。我愛と云ふのは雪竇和尚の言ふ事であるが、韶陽と云ふのは、縣の名前である。而して雲門和尚は韶陽縣に居つた人であるから、其の雲門和尚の居つた縣の名前を以て來て雲門和尚の事を言ふたのである。即ち、我愛韶陽といふのは、私は雲門を愛すると云ふ事であり、雲門和尚は誠に奇抜な作用をした人で、佛法の答なんといふものは誠に簡單にして意味を盡して居る。殊に雲門と云ふ人は禪宗が五家の一つ、雲門宗と云ふ宗旨が後に傳へられた位の人であるから、格別な人であつたことはいふまでもない、それであるから雪竇が「我愛韶陽新定機」といふたのだ。此新定と云ふのは新定郡といふ郡の名前であるけれども、此郡の名前を以て來て雲門の事を云ふたのが面白い、それで新定機といふたのは、雲門は人よりも優れた奇抜な働きをした人で、誠に嶄新にして活氣のある人の多く云はない言葉を以て來て、さうして其佛法を説いた人であるからである。釘楔の釘は御承知の通りクギといふ字で、楔は杭といふことである。杭を深く打込んで馬を繋いだりすると動くことが出来ない、釘で打ち付けられると自由自在に動くことが出来ない所が、釘楔と云ふのは、縛られたり打ち付けられ

たりして自由にならないところのものを抜いてやる、自由自在にさしてやるといふのである。人間の釘楔は何であるかと云ふと、私は煩惱だと思ふ。煩惱の爲めに皆縛られてしまつて居る。自由自在の身體を煩惱の爲めに縛られて、さうして自分で窮窟をして居るのである。佛教では五欲なんと云ふことをいふ。即ち財、色、食、名、睡、此五欲の爲めに、大抵の人は縛られて居る。財欲にはどうも縛られる人が多い、誠に立派な事を云ふて居つても、財を以て行けば随分見苦しいやうな事が到來して來る。財欲の爲めには多くの人が縛られて自由に動くことが出来ないやうになる。物を盗んだりなどする人は、皆な自分で以て自分の身體を身動きの出来ないやうにして、了ふのだ。又色欲も其通りである。新聞などを見ても、此の頃はどうか云ふ譯か、人を斬つたり殺したりする事が多い、殆んど毎日新聞に出て來ない事はないやうである。それをよく讀んで見ると、皆んな財色二つの欲より外はない、斬つたり殺したりするのは、財に迷ふか、色に迷ふかである。謂ゆる財の釘に打ち付けられるか、色の杭に縛られて了ふかである。其次には食欲である、人間は意地汚いもので、食物を以て來ると食物の爲めに動く、其次は名欲である、名譽といふことは必要であるけれど

も、名譽の爲めに迷つて居る人は幾らもある。妻子眷族にまでも心配をかけて、さうして名譽の爲めに迷つて居る人がある。其次は睡眠欲である。此五欲は丁度釘楔のやうなものである。人の精神が尋常一様であれば宜いけれども、是が度を過ぎると皆な釘楔となるのだ。財欲に縛られたり、色欲に縛られたり、名譽の爲めに迷つたりして居る。さう云ふ所の釘楔を抜いてやるのが雲門の接化である。學問の釘に打ち附けられて居る人もあり、或は悟りの楔に縛られて居る人もある。これはみんな病である。縛られるといふことは病である。其病は何だと云ふと、煩惱といふものが本だ。所が、雲門大師といふ人は、唯だ一言の下に於て向ふの煩惱を抜いて、安心の境界を得さしてやる。さういふ手段を持つて居られる。私は西有禪師に十三年も附いて居りました。が、釘楔を抜くといふやうな事は實に度々ある。自分が疑ひに疑つて居る事も、一口何か言はれた所で、ハハアと氣が付いて、實に愉快に安心することがある。さういふ事はどうも道理や、理窟で行くものではない、それは其人の接得の仕方に依つて唯だ一言半句の下に釘楔を抜いて、誠に安心の境界を得ることがある。雲門大師もさう云ふ手段を持つて居る人である。それであるから、一生爲人抜釘楔と褒

めて居る。其の褒め具合が、韶陽といふ縣の名前と、新定といふ郡の名前を以て來て雲門の事を云つた具合は餘程面白いと思ふ。

爲甚有時也。開門撥出膠盆。是は雪竇の語ではない、雲門の働きを言ふて居る。雲門といふ人は門を開いて膠の盆を突き出したと云ふのである。是は何の事でせうか。新らしく塗つた漆の盆でさへも、それにカブれるといふ。今は雲門が膠の一杯這入つて居る盆を突き出したといふ。是は豈夫手の著けやうはありますまい。雲門の語には實に手が著けられない、理窟も分別も届きつこはない。此の前にも出て居りましたが、如何是佛法大意。佛法の大意は何であるかと尋ねたら、盧陵、米作麼、價ナルカレなど云つた人もある。斯う云ふ語なんといふものは、實に手も足も著けられない、分別も何も届いたものではない。此の答の盧陵と云ふのは支那で以て米の質の大變良いのが出来る所と見える。さうして、如何是佛法大意と問うたところの僧は、盧陵あたりから來た人と見える。そこで青原和尚は、盧陵米作麼價、盧陵から來られたと云ふが、どうだ此の頃の盧陵邊の米の價は幾らするかと云つたのである。此方では佛法の大意は何だと尋ねて居るのに、青原和尚は米の値段は幾らだと云つたのである。

斯う云ふ事は、道理や理窟で解るものではない。又、此の「作麼價」と云ふのは實に面白い。價があつて價がない。と云ふのは、價は皆なある。水差は水差の價があり、洋盃は洋盃の價がある。皆な價はあるけれども、本統は皆な價が無いのである。世間の物は皆な價があつて、皆な價がない。價がなくして皆な價がある。善と云ふても悪と云ふても、極つた價と云ふものはない。善と云つても、善に善の極りがある譯ではない。悪と云つても、悪に悪の極りがある譯ではない。よくお話しします通り、水と云ふものは悪く使へば誠に悪だ、善く使へば誠に善だ、水よく船を浮べ、水よく船を覆すと云つて居る。水と云ふものは、悪ともすることが出来なければ、善ともすることが出来ない。實に作麼價ではないか。だから道元禪師は、善悪は時なり、時は善悪にあらずと示された。實に善い言葉である。善い事をすれば善い事をした時である。悪い事をすれば悪い事をした時である。けれども時は善悪にあらず、時の方では善悪を離れて了つて居る。離れて居るから、善い事をすれば善い時である。悪い事をすれば悪い時である。時と云ふものは、善と悪とを皆な離れて仕舞つて居るものである。だから私は此の言葉は面白いと思ふ。善と云ふても、悪と云ふても、本統は皆な作麼價である。そ

れであるから本則で雲門大師が只三字、須彌山と云つたのである。此の須彌山なんど云ふ言葉は、實に作麼價である。道理や分別で解るものではない。だから雲門の言ふ事は、何の事はない。門を開いて膠盆を掇出したやうなものだ。當路。鑿成。陷窞。肝要な道である。陷窞は陷し穴である。即ち肝腎な道の眞中に陷し穴が掘つてあること云ふのである。成る程古人の言葉は陷窞のやうなものだ。眼、東南に在つて心、西北に在りといふことがある。眼の方は東南を見て居るけれども、心は西北に向いて居る。斯ういふやうな事は、親が子供に向つて意見する時にはよくある。眼では東南の方を見て居るけれども、心は西北の方にチャンとある。言葉で云ふのと、心とは違つて居る。全體お釋迦様の四十九年の説法といふものは、皆なさうである。有と云ふても有に用事はない。無と云ふても無に用事は無い。俺の心を合點せよと云ふのがお釋迦様の説法である。言葉や文字に就て居たのではないかぬ。眼は東南の方を見て居るから、東南の方に用事があるのだナと思つて、東南ばかりを見て居ると、お釋迦様の方は、そんな所に用事はない。お釋迦様の心は西北にあるのである。だから古人の言葉には、當路に陷窞を鑿成する道理がある。人の歩かねばならぬ道に向つて、陷窞

を掘つて、人を陥れる所の非常に鋭い、恐ろしい所がある。それは何だと云ふと、言葉通りではないけない、佛祖の言葉や、古人の言葉といふものは、文字や言葉通りに行くものではない、文字でも言葉でも届かない所、其の意のある所を、此方で以て聴いて取らなければならぬ。だから、揀辨看とある、其處をよく辨別して見なければならぬのだ。こゝが禪宗の要所である。禪宗は文字言句に執せず直に其の本意を合點するが本領である。

【本則】舉僧問雲門、不起一念還有過也無門云、須彌山。

【讀方】舉す僧、雲門に問ふ、不起で一念還つて過有りや也、た無しや、門云く、須彌山。

【講話】この本則は短かいけれども誠に分り悪い、舉僧問雲門、不起一念還有過也無先づこれは種々に見られるであらうと思ふ、不起一念といふことは、一念を起さない所に還つて過がありませるか、ありませんかと云つたら、雲門が須彌山と云つた。須彌山といふ山は、非常に高大だ全體何の位の高大であるかといふに、古來その高さは八萬四千由旬だといふて居る、冠注で見ると、須彌の高さは三百三十六萬里とし

てある、富士山などはテンデ比較にも何にもならぬ、而して其東西南北も皆な三百三十六萬里あると云ふ、不起一念が何故須彌山か、此の問答は却々分らない、マア斯様な風にも見られる、一念を起さない所には還つて過がありますか、ありませんかと云つたら、そんな事を云ふて問ふのが既に須彌山ほどの高さであるとも聞える、そんな事を云ふて來るのが、過の高き事は須彌山のやうである、といふやうにも聞える、それから又、不起一念といふことは、ナカノ、容易な事ではない、此處のところは、須彌山の如く高く、容易に越されるものではない、と斯う云ふ風にも聞える、併し私はさうではないと思ふ、此の不起一念と云ふ事は、一念を起さぬといふことではない、觀音經の中に斯う云ふ事を言ふてある、念々勿生疑、是が不起一念である、何と皆さん、念々に疑を生じないやうに、正念に行きますかどうでせうか、念々に疑を生じなければ皆な正念である、所が凡夫は正念に行かない、念々が邪念である、悪い事の念は、朝から晩まで起して居る、邪念ばかりである、念々に疑ばかり生じて居る、一念一念が皆な正念に行くことは容易でない、念々正念に住する、その當體がソツクリ不起一念である、他人の事は偕て置いて、自分の胸に手を當て、考へて見ると

宜しい、自分の念々に疑を生ずることなくして、念々が正念に住して行くかどうか、白隠禪師は六十七歳の時に、吾初めて正念に住することを得たりと言はれて居る。さうすると、誰でも邪念に住することは出来るけれども、正念に住するといふことは難い事である。だから不起一念といふことは、一念を起さぬといふことではない。一念を起しても宜い、けれども、其念が不起の一念に行くに宜い、何の事はない。丁度海の中に雪が降るやうなものである。海の中に雪が降つて御覽なさい、降る度毎に雪は消えて了ふ。さう云ふ風に、邪念は水の上に雪が降るやうに、降る度に皆んな一つ一つ消えて了ふやうでなければいかぬ、邪念が相續して行つたのではないかぬ。だから臨濟大師は、第二念に流布せざれと言つて居る。皆んな凡夫は第二念に流れて仕舞つて居ると云ふのである。所が、道元禪師は、第一念にも流布せざれ、更に、無念にも流布せざれとまで云はれて居る。それが謂ゆる不起一念である。もう一つ譬へて言へば、鏡のやうなものである。鏡といふものは、何でも映る、お爺さんが行つても映る、お婆さんが行つても映る、娘が行つても映る、けれども鏡は念々に疑を生じない、汚ない人が映つたからと云つて、こんな人は汚いから彼方に持つて行け、此の娘は

綺麗だから何時までも映して置かうといふ。一念はない、鏡は何でも映すだけである。鏡に迷ひはない。所が人間は、あれを見たと言つては念に念を重ねる、あれを聞いたと言つては、念に念を重ねる。だから不起一念に行かない、不起一念と云ふのは、皆んなが心を起すのは宜い、起しても其の心が第二念に流れない、妄想の第二念に就かない、一念一念が正念に行く、正念に行けば宜いのである。古人の言葉に、安住不動如須彌山といふがある。是は面白い言葉だ。安住して動かない事は、丁度須彌山の如くである。須彌山の如くといふのはどう云ふ事であるかと云ふと、目に物を見る、見るけれども妄想を起さない、鼻に香を嗅ぐ、嗅ぐけれども迷はぬ、舌の上で味ひはするけれども、味の爲めに迷はぬと云ふことである。須彌山といふのは動かぬと云ふことである。私共の精神が、物を見ても迷はない、其の爲めに動かない、物を聞いても其の爲めに迷はない、物を食つても其の爲めに迷はないと云ふのが、安住不動如須彌山だ。それを不起一念とも云ふのだ。講釋はしますけれども、自分で以て試験して見ると、迷ひ通しに迷つて居る。眼、耳、鼻、舌、身、意、之を六根と云ひ、色、聲、香、味、觸、法、之を六塵と云ふ。此の六根と六塵と云ふものが、朝から晩まで對峙して居る、之に皆んな迷

つて居る。是が須彌山に行くかどうか、眼で色を見る、須彌山の如くに行くかどうか、耳で聲を聞く、須彌山の如く行くかどうか、鼻で香を嗅ぐ、須彌山の如く行くかどうか、舌で味を味ふ、須彌山の如く行くかどうか、肌が好いとか悪いとか、身に觸れる、須彌山に行くかどうか、意で色々なことを思ふ、須彌山の如く行くかどうか、迷ふ人は皆んなこれに迷つて居る。兎角に安住不動如須彌山と行きかねる。不起一念還有過也。無門云須彌山、須彌山の三字で答へて居る。不起一念の所は須彌山である。此の念が起つても、念に念相が無い、謂ゆる眼で色を見ても色に迷はない、耳で聲を聞いても聲に迷はないと云ふのが、安住不動如須彌山に行くのである。さうすると、須彌山と云ふものは、高い所ばかりではない、足許にもあれば、お茶を飲む所にも、御飯を食べる所にも、須彌山はあるが、其の心が動かないやうに平生行けるかどうか、妄想分別の須彌山は誰にでもある。妄想は須彌山から見るとズツと高いのである。

【頌】頌云。不起一念須彌山。韶陽法施意非慳。肯來兩手相分付。擬去千尋不可攀。滄海濶。白雲閑。莫將毫髮著其間。假

鷄聲韻難謾我。未肯模胡放過關。

【讀方】不起一念須彌山。韶陽の法施、意慳むに非ず。肯ひ來らば兩手に相分付せん。擬し去らば千尋攀ぶ可からず。滄海濶く、白雲閑なり。毫髮を將つて其の間に著くること莫れ。假鷄の聲韻我れを謾じ難し。未だ肯へて模胡して關を放過せず。

【講話】頌云。不起一念須彌山。是は本則に出したのを再び此處に出した。韶陽法施意非慳。韶陽は雲門大師の事、雲門大師は法を施すに心に慳む所がない、自分の思ふ所を曝け出して説いた。どう云ふ風に説いたか。即ち不起一念は須彌山だと曝け出して説いた、それを云たのである。布施には二通りある、財施と法施とである、此處では法施を云ふのである。けれども私は考へて見るのに、世界は皆な布施の表現であると思ふ。天は高きを施して居る、地は低きを施して居る、柳は緑を施し、花は紅を施して居る。施す上から云つたならば、水差は水を入れて施をして居る、コップはコップだけの働きを施して居る。其上から云へば、世界は皆んな施しの世界だと思ひます。韶陽法施意非慳。成る程、雲門大師は法を施す事は、其の心に於て少しも慳まない、不

起一念、須彌山である。斯う説いた所、十分に施しをして居る。此處の所は面白い。肯來。兩手相分付、肯來といふのは、成る程さうだ。肯定することだ。佛法は世に充滿して居る、夫れ持つて行け、夫れ持つて行けと云つて、世界中に施して居るのである。成る程さうである。確然と肯つて見ると、お茶を喫むのも佛法なれば、御飯を喫べるとも佛法である。道を歩くのも佛法である。だから佛法といふものは、兩手に分付する、肯つて見ると、天地に充滿して居る、こつちの手にも一杯持つて行け、あつちの手にも一杯持つて行けと云ふて居る。肯つて見ると、慳みはしない、兩手に相ひ分付して居る。が、擬去。千尋不可攀。サア分らぬと成ると分らない、擬するといふのは、疑ひ擬へるのである。疑つて見ると、千尋も攀ち登る事が出来ない、高いとも、佛法の頂はサツバリ分りはしない。此の間も時事新報のボンチ畫に出て居りました。所澤から大阪まで飛行機が飛んで行つた。すると田舎のお婆さんとお爺さんが、それを見て、お婆さんが、お爺さんに向つて云ふには、高い所にア、して居るが、絲は何處に持て居るであらうと云つたら、お爺さんが、馬鹿な事を云ふな、絲を持つて居るのではない、細い針金で以て天に吊つてあるのであらうと云つた。斯う云ふ事が書いてあ

つた。物は疑つて見ると分らない、學問が開けない時には、アレも不思議、コレも不思議であつたが、學問が開けるに従つて、段々不思議が無くなつた。けれども同時に高尚なる不思議が殖えて來たと思ふ。學問を知らない人は別に不思議にも思はない事が、知つた人には不思議になつて來る。妙なものです。學問をしない人は大根を見れば大根である、蕪を見れば蕪であると思つて居る。所が之を植物學者が段々研究して見ると、終には大根が分らなくなつて了ふ、蕪が分らなくなつて了ふ。此の間も世界の話が出て居りました。地球の如き世界といふものは、幾つもある、其の世界は皆な太陽の熱を受けて居る、地球も太陽の熱を受けて居るが、太陽の熱は全體何處から來たものだといふやうな事になつて來ると、學者も分らなくなる。段々研究に研究をして行くと、學者も分らないやうになつて了ふ。だから、擬去。千尋不可攀。誠に不思議がなくなる。同時に不思議が多く現れて來るのである。佛法も其の通りである。道元禪師の言はれた通り、佛法は人々の脚跟下にあるけれども、疑ひ出して見ると一向分らない、遠くなつて了ふ。滄海。白雲。閑。是は八萬由旬もある高い須彌山の頂上から見ると、下の方は皆んな海である。須彌山の下を歩いて上の方を見れば、

高い山であるから、白雲が悠々閑々として山を蔽ふて居る。是は面白い、海は海の居場所であり、雲は雲の居場所にある。謂ゆる法華の中にある「法住法位」の道理である。海は低い所に住する、洋盃は洋盃の法位に住する、水差は水差の法位に住する、斯う云ふ風に住して居るのが佛法である、チャンと居場所にある、有るべき所にあるのが謂ゆる佛法である、居場所を轉じて居つては佛法ではない。だから、滄海淵、白雲閑とある。是が佛法の不起一念、須彌山の現れたものである。莫將毫髮著其間、毫髮とは、鶉の毛一本程といふことだ、さう云ふ僅かの毫髮を將て其間に著けること莫しといふのであるから、高い物は高い所にあり、低い物は低い所にある、各法位に住してチャンと其の居場所を守つて居れば、毫髮を將て其間に著ける必要はない、佛法といふものは其通りである。佛法といふものはむつかしい事ではない、有り目通りのものが佛法である、有り目通りを放て了つたら佛法ではない。佛法とは何だ、障子の抽手、峯の松、火打袋に鶯の聲と云つて居る。成る程さうである、何だか分らない、峯の松を知つて居るか、知つて居ります、火打袋を知つて居るか、知つて居ります、鶯の聲を知つて居るか、知つて居ります、それで佛法は分つて居るではないか、と云つたと

いふことでもあります、實に毫髮を將て其間に著ける事は無い。次の二句が面白い。假鶉聲韻難謾我、假鶉聲韻といふのは假りの鶉の聲だ、是には故事がある、皆さんも御承知でせう、是は支那の函谷關の故事です、函谷關は、鶉の啼き聲を聞かない間は、關を通さないと云ふ。所が鶉の啼き聲の誠に上手な人があつて、さうして鶉の真似をした。すると關の鶉も啼いたので終に關が開いた、さうして無事に其關所を通つたと云ふ事がある。即ち昔、支那では鶉の真似をして、函谷關を通つたといふことがあるけれども、この所は真似ではいけない、佛法といふ關門は真似では通すものではない。誰かの歌に、夜をこめて鳥のそら音をはかることも、世に逢坂の關はゆるさじと云ふがある。アレは函谷關の事を言ふたのだ。逢坂の關は、鶉の啼き聲位では通さない、と云ふのである。今この所の所もさうである。函谷關は鶉の啼き聲の真似をして通つたかも知れぬが、この所は我を謾する事は出来ない、真似て宜い加減に通らうとしても通ることは出来ない。不起一念、須彌山といふ所は、宜い加減の説明や講釋で通らうと思つても、通ることは出来ない。未肯模胡放過關、模胡といふのは、曖昧の事である、鶉の真似をした位ではナカ／＼通すものではない、今此處の不起一念

須彌山といふ事は、自分で修行して、自分で其處に至らなければならぬ、真似で通らうと思つても、ナカノ、真似で行くものではない。先程申しました通り、六根と六塵とは自分で試験して見ると分る。私が此の間ヒドク發熱して苦しかつた、其の時に、此の時に修行しなければ、眞の修行ではない。自分は此の修行が全體苦しいと思ふかどうか。此の苦しい中で修行しなければいけない、自分の修行はどれ程進んで居るであらうかと思つて見ると、實に恥かしいです、平常は豪いことを云つて居るけれども、サアと云ふ苦しい中に立つて、晏然として行けるかどうか、實に私は試験して見て恥かしいと思つた、ナカノ、さうはいかない、平常健康な時には、豪いことを云つて居つても、いざとなると落第する。何でも假鶏の聲韻では駄目だ、曖昧模胡で世を通らうと思つてもいかない、或は曖昧模胡で通られる所もあるかも知れぬ。けれども、精神上の修行事の一段に至つて、安心を得るといふ事は、曖昧模胡ではいけないと、つく／＼此の間考へたのである。此の苦しい中にも晏然として居て、病と我がが離れて居るやうな修養がなければならぬと思つた。併し、此の苦しい時が自分の試験する時であると思ふと、其の苦しみを脱して實に安心の處がある、苦中に樂

がある。此處もさうである。不起一念、須彌山と行けるかどうか、是は實際の修養でなければならぬ所だ。まだ今日は身體が十分でないから大變話しが仕悪くかつた。

第二十則 地藏親切

【垂示】示衆云、入理深談、嘲三擺四、長安大道、七縱八橫、忽然開口說破、舉步踏著、便可高掛鉢囊、拗折拄杖、且道誰是其人。

【讀方】衆に示して云く、入理の深談は三を嘲り四を擺く、長安の大道は七縱八橫、忽然として口を開いて說破し、歩を擧げて踏著せば、便ち高く鉢囊を掛け拄杖を拗折すべし。且く道へ誰か是れ其の人。

【講話】何んでも、理と事と體と用とは離れるものではない、所謂天理といふか、其理といふものは講釋の出来るものではありますまい、御承知の通り理といふのも強て名けたので、元より理といふ名はありはしない、理といふのは形も無し名も無い、其形の無いもの名の無いものは説明の出来るものでない、或は又形を以て示すと

いふことも出来ない、マア山椒を嘗めてヒリ／＼するといふけれどもヒリ／＼するといふことはどういふことだ、それは辛い、辛いと云つても山椒の辛いのだ、辛いのだと同じかと云へばそれは違ふ、生薑の辛さとも違ふ、南蠻の辛いのも違つて居る、同じく辛いと云つても味といふものは書き分ける譯にも行かず、唯ヒリヒリすると云つて見ても、口でヒリ／＼するといふだけのことで、味は書くこともどうすることも出来ない、世間ですら其通りのものだ、況や道の本體といふものはどうしても説明の出来ないものがある、繪にも描かれない寫眞にも撮ることも出来ないものが爰に一つある、それを一つ自分のものにして、それから應用して働いて來るのが所謂事といふ方である、さうすると理といふものは無差別のもので、之を社會に出て自由に働くといふのが此の事の方である、或は體といふものご用といふものご是も離れたものではないけれども、體は説明の出来ないもので體を説明するには何れ用の上から説明しなくてはならぬ。

此處でも此の事が入用だ。入理。深談。嘲三擲四。と云つて居る、是は入理の所には深く談することが出来ない、説明も何も出来たものではない、それだから嘲三擲四と

云つて居る、嘲三擲四は四の五の八百のといふことは出来ないといふことを云つたので、三にも四にも落ちたものではない、一か二か、一や二に落ちたものではない、法華では唯一乘法と云つてあるけれども、全體それも已むを得ず一乘法と云つたので、もう入理の所に行つては深談が出来ない、言葉が無い、入理の深談は言葉が無いから嘲三擲四といふ。ところが入理の深談が出来るのである。四の五の八百を離れて、説明も講釋も出来ないけれども入理の深談が出来る、それは何故かといふと所謂本體の理といふものを、自分が悟つて見れば此の身がそつくり黙つて居つても入理の深談だ。現身說法である、聲の無い說法である、聲の有る口で説く說法ではない、聲の有る說法は耳で聴くが、入理の深談は耳では聴けない、是れは心で聴かんければならぬ、身體で聴かんければいかぬ、聴くといふ事は耳でばかり聴くやうに思つて居るが、耳で聴くのは聲の有る說法である、全體聲の有る說法でも心や身で聴かんければ解るものでない、心で聴くと身心に說法が染み渡る、身で聴けば體中に說法が染み渡る、唯耳で聴いたのみでは耳口三寸の學にして全身に潤はぬ、入理の深談は説明も何も出来ないから嘲三擲四といふので、一の二のといふ名稱が

無くなつて居るのである、之を宗門では「向上の提示」といふ、向上と云つたら本理のことである、天の理を受けたのを本分といふ、其本分の所はどうも説明も何も出来ないから向上の提示といふ、ズツ向上からいふと、佛といふのも却つて珠に瑕だ、「佛の一字も心田の穢れ」と云つてある、佛といふ名を付けたのは清淨潔白の名を汚すものだ、強て名けて佛といふ、向上提示に行くと言前も何もありません、けれどもも私は入理深談といふことは是は出来ると思ふ、釋尊の所へ或る大學者が行つて、「有言を問はず無言を問はず」と言つた、其時釋尊は何も仰しやらずに唯黙つて居つた、さうすると其大學者が釋尊は黙つて居つたけれども、其黙つて居つた説法を聞いて行つた、釋尊の黙つて居つたのは所謂入理深談で言葉を以ては説かないけれどもも理に入つて深く説いて居る、さういふ説法は耳では聞へない、此大學者は偉い者だ、其説法をチャンと聴き取り釋尊は全身にて説法をして居る、釋尊は本體の理といふものをチャンと悟つて自分のものにして居る、心が理と相應して居る、身も心も佛法の現はれたものとなる、私共が佛法と遠くなる、理と遠くなるのは煩惱妄想の雲が懸つて居るからである、ところが釋尊は煩惱妄想の雲が霽れて世界中を

照らす光明を持つて居る、それだから黙つて居ても説法をするのは是は入理深談だ、何を問ふても黙つて坐禪して居る、其の坐禪の容貌が入理深談である、どうしても説かれない、説けば第二第三です、長安大道七縱八横、是は宗門では「門庭の施設」といふ、門庭の施設といふことはズツと下へ下つて向ふの機を見て自由自在に説いて行く、説いて行くのは謂ゆる向上の提示が自分のものになつた人だから門庭施設で、それから下に下つて觀音が三十三身に身を現するが如く、自由自在に説いて行く、是は門庭の施設の方を云ふのであります、長安は都の事だ、都へ行く大きな道は縦横自在にして、東西南北何處からでも行ける、自分の家から遠くへ行くには門前からズツと道が付いて居るではないか、道の無い所はない、長安の大道は實に七縱八横です、何も都へ行く道ばかりではない、私共が平生歩く所の道といふものは一歩々々行く處に長安の道があるけれども道を外れて歩く人がある、丁度蟹みたやうな者で横道へ這入つてしまふ人がある、斯ういふ文明の世の中になつても横道へ這入つて行く者が澤山ある、實に長安大道七縱八横で自分の精神が暗くならなかつたならば、大手を振つて天下を自由自在に歩くことが出来る、何も遠慮會

釋のあつたものではない。そこで忽。然。開。口。說。破。けれども本件の理といふものを悟つて自分の物にした以上は自由自在で、何と云つて説いても宜い、丁度觀音は御承知の通り三十三身に身を現するけれども、本體の慈悲といふものは少しも變つたことはない、體を動かさずして種々様々に應現するので、月といふものは天に一つしかない、體は一つだけれども盪にも映れば水瓶にも映る、海にも映れば川にも映る、千差萬別であるが本體を動かさずして事の上に働をして居る、全體それでなければいかぬのだ、今日の人は理といふものを悟りもせず、唯枝葉の方にのみ走つて居る、枝葉ばかり榮えても根が確固して居らぬから大風が吹けば忽ち引繰り返つて了ふ、本體を自分の物にした以上はそれから枝葉がどんなに榮えても、榮えれば榮える程立派なものになつて来る、本體を自分が悟つた以上は自由自在なものです、そこで忽。然。開。口。說。破。といふことが出来るのだ、それから舉。步。踏。著。といふのは、是は一步步々足の踏み所が皆長安の大道に適ふ、皆道に適つて行く、是は足ばかりではない、御飯を食べる上にも道を外れない、お茶を飲む上にも道を外れない、總ての事が皆道に外れない、所謂七十而從心所欲不踰矩、あれは舉足踏著するので、歩々

踏著綠水青山といふ句があるが、是は名句です、一步步々綠水青山を踏外さない、所謂道を外さない、所謂法を外さないことである。さういふ人になつたならば、便。可。高。掛。鉢。囊。拗。折。拄。杖。鉢。囊。といふのは御飯を食べる道具と袈裟衣を容れる袋の事だ、禪宗では修行する時分に此鉢囊といふものを携へる、臨濟宗と曹洞宗とは違ひますけれども修行する時分には鉢囊を離さず修行をする、さうして諸方を拄杖を携えて歩く、拄杖といふのは杖のことです、最早修行が出来た以上は高く鉢囊を掛けて杖などを折つて了ふ、修行などはしなくても宜い、悟つた以上は修行は濟んでしまつたものである、尤も宗門で長老になると修行が濟んだと云つて、罷。參。と云ふことがある、罷參といふのは山川を跋涉して諸方を修行して歩くことを罷めたと云ふ譯であるが、實際は長老になつても修行は仲々罷免にならぬ、殊に今日は形式だけの長老が多いやうだ、全體佛子の修行は釋尊が出て來て試験をしやうが、達磨が出て來て試験をしやうが、ピクともしないといふやうに修行が出来なくてはいかない、自分がやつて見ると毎日落第ばかりして居る、さういふ修行を積むといふことはナカ／＼容易の事ではない、可。高。掛。鉢。囊。拗。折。拄。杖。といふのはさういふ修行の出

來上つた人です。且道誰是其人。誰かそんな立派な人があるだらうか、それは今日の本則に就て見ますと立派な人がある、全體昔の人の話と思つて居つてはいかぬので今日の人に是が必要なのである。

【本則】舉地藏問法眼、上座何往。眼云、迤邐行脚。藏云、行脚事作麼生。眼云、不知。藏云、不知最親切。眼、豁然大悟。

【讀方】舉す地藏法眼に問ふ、上座何くにか往く。眼云く、迤邐として行脚す。藏云く、行脚の事作麼生。眼云く、不知。藏云く、不知最も親切。眼豁然として大悟す。

【講話】舉地藏問法眼、上座何往。此地藏といふのは地藏院の桂琛といふ和尚でナカナカ有名な人です、此人に法眼といふ人が久しく隨身して修行して居つた、けれども夫程の効果も無かつた。と見える、そこで地藏に暇乞して何處かへ修行に出掛けやうと思つたと見える、其時に地藏が法眼に問うて上座と云ふのは私共の宗門に上座だの和尚だのといふ位階があります、上座と云ふのは三百人なり五百人なりの上座を占めた人でなければ全體上座とは云はれない、此處で上座と云ふのは法

眼を指して云ふので、お前が久しく隨身して居つたのに暇乞して一體何處へ行くのだ。眼云、迤邐行脚。何處へ行く。と仰しやつても未だ別に定つては居りませぬ、マア彼方此方を歩いて修行に參る考でございますと言つた有様だ。迤邐とは因循のことで、進むでもなければ退くでもない心の定まらぬことだ、私は何處といふ目標があつて出掛ける譯ではありませぬが彼方此方を歩き廻つて良い人があつたなら其の人に就て修行しやうと思ひます、宗門では修行に出掛けるのを行脚と云ふのだ。さうすると藏云、行脚事作麼生。地藏が左様か、修行に往くのは結構だが全體行脚をするには行脚の眼を具せんければいかぬ、古人の言葉に、行脚須具行脚眼、看經須具看經眼、といふがある、是れは雲門の言つた言葉で實に善い、看經と云ふのはお經を看ること、お經を看るにはお經を看る眼を具へんければいかぬ、唯文字に就て看ても釋尊の心が分るものでない、お經を看るにはお經を看る眼を具せんければいかぬ、それと同じく行脚をするには須く行脚の眼を具すべし、唯歩くばかりが修行ぢやない、黄檗の隠元和尚が行脚に出る時に斯ういふことを言つたが成程違ふ所がある、我年二十五、氣慨吞佛祖、不透得這關、豈踏來時路、又此從容錄の頌を書いた宏

智禪師が十八歳の年に行脚に出掛ける時に「若し大事を發明せずんば誓つて歸らず」と言つたことがある。どうも古人は發足の時の氣慨が違つて居る。今日の宗門の學校といふものは學問は出来るかも知れないが氣慨が無い、禪僧らしい氣慨が缺けて居る。佛祖を呑むといふやうな氣慨は藥にしたくも無い、何事を爲るにも氣慨がなければ成功するものでない、それだから今地藏が行脚事作麼生と斯う云つた。すると眼云。不知。法眼は分らなかつた故に知らずと云ふ。そこで藏云。不知。最親切。早く知らぬと云へば宜かつた。もう本分の所へ行つたならば知らぬと云ふより仕方がない、知り抜いてしまつたところの不知が最も親切だ。それはどうも佛祖方が悟つたけれども悟つた所を言うて見やうと思つても言はれるものでない、極々親切の所を云つたならば不知と言ふより仕方がない、世間の人が知らぬといふことを不知と云ふのではない、今日の學問でもさうでせう、段々研究して行つたならば不可思議だとか不可解だとか不可知だとか云ふ、つまり不知と云ふより仕方がないのだ、ズツと根元の所を云ふならば不知が一番當つて居る、鐵を轉じて金と成すといふ言葉がある、今法眼が不知と云つたのを鐵とすれば、地藏が不知最も親切と云

ふたのは所謂鐵を轉じて金と成すのである、又煩惱を轉じて菩提とするのである、煩惱と菩提とは本體が一つのものである、煩惱の外に菩提のあるべきでない、草が澤山生える處でなければ五穀は取れない、草は何んだ、煩惱だ、煩惱は澤山ある方が宜い、けれども煩惱が菩提ではない、煩惱を轉せんければ菩提と云はれない、溢柿もさうです、溢柿も結構だ、其溢いのが悉皆甘柿になるのだ、法眼が不知と云つたのは溢みたまやうなもので、其溢柿が「不知最も親切」と云はれた處でそつくり甘柿になつてしまつた、田の草を取りてそのまゝ肥しかなで、田の草がそつくり肥料になつてしまつた、煩惱は何も悪いではない、けれども唯煩惱を養つてはいかぬ、煩惱を其儘肥料にしなればいけない、溢柿を甘柿にしなればいけない、そこが修行の用り處である、そこで眼。豁然。大悟。是は餘計なことで後に記者がそんな事を附けたのである、法眼は地藏和尚の不知最も親切と云ふ言下に於て大悟せられたのである。

「頌」頌云。而今參飽似當時、脫盡簾纖到不知、任短任長休、剪綴隨高隨下自平治、家門豐儉臨時用、田地優游信步移、

三十年前行脚事、分明辜負一雙眉。

【讀方】而今參じ飽いて當時に似たり。籠織を脱盡して不知に到る。短に任せ長に任せて剪綴することをやめよ。高きに随ひ下きに随つて自から平治す。家門の豊儉時に臨んで用ゆ。田地優游歩に信せて移す。三十年前行脚の事分明に辜負す一雙眉の眉。

【講話】頌云。而今參飽似當時。而今參飽と云ふのは退屈して止めたのではない、修行の出来上つてしまつたことを飽と云ふ、御飯を食べて腹一ぱいになつたことを飽と云ふ、腹一ぱいになつた時分にはどんな御馳走を見ても食ひたくない、美食飽人の喫に値らず、それと同様で佛教の修行を知り抜いて悟てしまふと、似當時で、矢張り元の普通の人になるのだ、何も變つたことは無い、此間もお話をした通り眞壁の平四郎と云ふ人が修行して悟つて、法身を覺了すれば無一物、元是れ眞壁の平四郎と言つた、眞壁の平四郎は元と是れ眞壁の平四郎で、悟つたからとて食はずに居る譯にいかぬ、悟つても汁二杯御飯三杯、平四郎が悟つても矢張り平四郎だ、悟つて見

れば悟らぬ前の人と同じことになる、けれども悟つた人はドコとなく違ふ、喩へば湯でもさうだ、一遍沸騰した湯は何處となく味が違ふ、其處です、初めから凡夫であつては詰らぬ、修行せねばならぬ、それから悟つて見るといふと矢張り當時に似て同じことですが、境界が何んもなく違つて居るでせう、湯と水とは元が同じだが何處か味ひが違ふでせう、脱盡籠織到不知、籠織と云ふのは細い糸といふことで、所謂是非分別の細い糸です、其糸を脱盡してしまふ、今日の言葉で云へば是非善惡だ、全體人の是非を説く人は矢張り是非の人である、是非を離れた人は人の是非を説きはしない、只凡夫のなりでは詰らぬが、煩惱を脱盡して不知に到つた人は最も能く知つた人だ、お釋迦様も不知最も親切の處に到つて居るから何でも知つてござる、達磨も不知最も親切の處に到つて居るから何でも知つてござる、妙なものです、己を捨る人は己を捨ふのだと私は思ふ、小さな己を捨てしまへば世界中の物は皆我物だ、ところが凡夫は兎角分別にて締切を付けて小さくなつて居る、捨て、こそ浮ぶ瀬もある、本統に不知に到るご何でも知つて居る、唯知つて知り顔をしないだけです、今度は不知に到つた人の働き様子を云ふので、短任、長休、剪綴、短いものは短

いで宜し、長いものは長いで宜し、何も剪つたり綴つたりすることはいらぬ、鶴の脚は長い鴨の脛は短い、鶴の脚を剪つて鴨の脛に繼いでやつたら鶴も迷惑するし鴨も迷惑する、短いものは短いに任せ、長いものは長いに任せる、是が眞に不知の形相である。隨高隨下、自平治、山の高いは山の高いでそれで宜い、川の低いは川の低いでそれで宜い、和蘭の海邊は陸地より海水の方が高いさうだがそれでは困るさ、山が高く川が低い有様が洵に平等で善く治まつた姿である、洪水が出て水の方が高くなつて山の方が低くなつたりするのは平治でない、長きは長きに任せ、短きは短きに任せる、それが不知の形相で法の有様である。家門豊儉、臨時用豊は豊富といふ身上の良くなつた時が豊、儉は節儉だ、身上が悪くなつたらば儉約をしなければならぬ、身上が悪くなつても昔の事を思つて贅澤などをやつてはいかぬ、貧乏になつたら貧乏になつたやうに、其時其時に随つてやつて行かなければいかぬ、不知の人はさうです、不知の人は其時々々に随つて自由に用ゐて行く、田地優游、信步移、此田地は其處らにある田のことを云ふのではない、私共一片の心田地は皆持つて居る、其心の田地を耕す、さうすれば良田になつて立派な米が取れるのだ、悪い田地もある

るが丹精して耕せば悪い田地も眞に良くなつて立派な收穫を見ることが出来る、それと同じく私共も皆精神の田地は持つて居る、其田地を歩に信せて優游として移り行けば宜いが、やり方に依ては悪い田地にしてしまふ。三十年前行脚事、三十年の間東に行つて師家を訪ひ西に往つて宗匠に尋ね、千辛萬苦を辭せず、修行に力を盡したが、さて今日になつて回顧して見ると、分明辜負一雙眉だ、一雙の眉といふのは兩方の眉毛だ、此處に附いて居る自分の眉に辜いてよくもまあ彼方此方尋ねて歩いたものだ、今日から見れば眉に辜いて居つた、本統の佛法は自分の傍にあつた、眉が一番近い、其近いところの眉を三十年尋ねて歩いた、洵に分明に辜負したものと、學人に注意したのだ。

第二十一則 雲巖掃地

【垂示】示衆云。脫迷悟、絕聖凡、雖無多事、立主賓、分貴賤、別是一家、量材授職、卽不無同氣、連枝作麼生會。

【讀方】衆に示して云く、迷悟を脱し、聖凡を絶すれば、多事無しと雖も、主賓を立て、貴

賤を分つことは別に是れ一家材を量つて職を授くることは即ち無きにあらず。

同氣連枝作麼生か會せん。

【講話】示衆云。脱迷悟絶聖凡。此迷悟と云ふは迷と悟で、悟は善いと云ふけれども悟も持つて居てはいけない、悟は迷に對した言葉で本統の所に到つて見ると悟といふものもありはしない、迷は無論有りはしない、全體迷悟などいふは法を穢した言葉で、恰も白帛へ手垢を附けたやうなものだ、それから聖凡と云ふのは聖は四聖と云つて聲聞緣覺菩薩佛だ、是は悟の方、凡は六凡と云つて天上人間餓鬼畜生修羅地獄、是は迷の方、そこで法の本體といふ所に到ると全體迷だの悟だのといふことは無い、法の本體に我慢だの我慢だのといふものは無い、悟つて却て我慢の強くなる人があるが、あれは本統に悟つたのではない、脱迷悟絶聖凡と云ふのは即ち此處を云ふのだ、それから雖無多事、迷悟がなければ安心のことだ、お釋迦様も此迷悟の爲めに四十九年の説法をしなければならぬことが到來したのだ、迷も悟も無かつたならば裁判所も賞勳局も入用はない、洵に無事なものだ、法の本體の所へ行けば多事が無い本統に其處に到つたならば世界に戦争などは起りはせぬ、法の本體を知

つたならば眞の文化になる、今は文化の何のと言つて居るが眞の文化では無い、立主資分貴賤法の本體の上に主だの資だの貴い賤いといふ區別は無い、無いけれど、もそれは立たなければならぬ、無差別のものではない、別是一家で法の本體と云ふものは絶対のもので、絶対の上から云ふと主資貴賤といふものは無いけれども、其處は又無差別中に差別といふものがある、別是一家で是は立たせんければならぬ、さう無茶苦茶のものではない、何んだと云ふと法の本體たる無差別中の差別だから悪くない、それがどうかすると平等々々と云つて悪平等になつてしまふ、佛法は悪平等を嫌ふ、平等の上の差別、差別の上の平等だから是れはどうしても立てんければならぬ、立つた以上は量材授職、即不無所謂人材登用で、其材を量り職を授ける、其人の才能に應じて適所に適材を用ゐると云ふ風に、辯舌の良人は辯舌を要する職を授けなければならぬ、文章を善く書く人は文章を書く職を授けなければならぬ、是はどうしても必要なことで、さう無差別なものでない、主資を立て貴賤を分つた以上はどうしても左様でなければならぬ、ところが今日同氣連枝作麼生會同氣連枝と云ふは宗門に難兄難弟といふ言葉がある、兄ともし難い弟ともし難い、

之を同氣連枝と云ふ、秤に掛けて見ると何れも輕重が無い、所謂甲乙の無いといふ人に出會つたらばどうするかと本則を呼び起した。

【本則】舉。雲巖掃地次、道吾云、太區區生。巖云、須知有不區區者。吾云、恁麼則有第二月也。巖提起掃帚云、這箇是第幾月。吾便休去。玄沙云、正是第一月。雲門云、奴見婢殷勤。

【讀方】舉す。雲巖掃地の次で、道吾云く、太區區生。巖云く、須らく知るべし、區區たらざる者あることを。吾云く、恁麼ならば則ち第二月ありや。巖掃帚を提起して云く、這箇は是れ第幾月ぞ。吾便ち休し去る。玄沙云く、正に是れ第二月。雲門云く、奴は婢を見て殷勤。

【講話】舉。雲巖掃地次、暫時も在らざれば死人に如同すといふ語がある。古人は暫時も道の爲めに心を放して居らない、掃除をすれば掃除の事に就て直ぐ道の話が始まつて来る、瀧を見れば瀧の問答が始まり、草を見れば草の問答が始まる、修行事の可い少しも弛緩がない、今は掃除の時の問答だ、道吾と雲巖と掃除をして居つた道

吾が雲巖に向つて、太區區生といふた、太區區と云ふのは勤勞の形で勤め苦勞をすること、イヤ今日の掃除は御苦勞様、さぞお骨折でせうと云つた、すると雲巖が須知有不區區者、お前が御苦勞だと云ふけれども一向骨の折れないものが茲に一つある、是は面白い、身體は大變使ふけれども一向骨の折れないものが茲に一つある、是れは皆持つて居るので、一向死にもしないが生きもしない、骨も折れない疲勞もしないものがある、と斯う云つた、すると道吾が云ふのには恁麼則有第二月也、ハ、アそれでは區々、と不區々、と二つのものがありますナ、第二月と云ふことは目をひどく摩つてお月様を見るとお月様が二つに見える、それで第二月と云ふので區々と不區々と二つあるかと斯う云つた、全體佛教の上から云ふと二つは無い、衆生と佛と二つは無い、迷へば衆生となり悟れば佛となる、煩惱と菩提の二つは無い、生死と涅槃と二つは無い、唯翻筋斗すだけである、頭を翻して尾と爲すだけである、唯煩惱を翻して菩提、生死を翻して涅槃、迷を翻して悟、悟を翻して迷と爲すだけで一つのものである、氷が翻れば水、水が翻れば氷、一つの物だけれども寒暖の縁に遭て氷になつたり水になつたりするのである、それだから天地同根萬物一體、私に言はせ

ると一體と云ふことも要らない、元と一體なれば一と云ふことも要せぬ、一體と云ふと早や二つになる、本統は一體も要らない、そこを道吾が、恁麼則有第二月也と云つた、さうすると又雲巖が提起掃帚云、這箇是第幾月、持つて居つた帚をヒョツと差上げて、此の帚は幾月かと云つた全體二月も三月もありはしない、幾月あつても心月ぢや、心と云ふものは何かと云ふと佛教に於ては三界唯心と云つて、唯一つの心がいろ／＼に現はれて來たものです、山でも海でも心が千變萬化して出て來た、心の化物みたやうなものだ、心が化けていろ／＼な物になつて來たのである、さうして見ると心月の一つです、第幾月と在つて幾ら在つても心月の一つだ、そこで道吾が何か云ふかと思へば、吾便休去、黙つて引込んでしまつた、是は負けて引込んだ譯ではない、もう是で以て二人の消息が分つてしまつたので、何方も掃除の本體を知つて居る、月を知つて居る人、人との話だから話は是で濟んでしまつて居る、休し去つたから負けたといふ譯ではない、休し去るのにも種々ある、何も知らずに休し去ることもあるし、知り切つて休し去ることもある、さうすると玄沙といふ人がそれを聞いて云ふのに、正是第二月、雲巖と道吾との問答は私から見ると矢張り第二

月になつてしまつて居る、それから雲門和尚が又之れを評して雲門云、奴見婢殷勤、下女と下男との話はお座敷へ出されさうもないけれども、何んだか親切で殷勤な所がある、雲巖でも道吾でも玄沙でも雲門でも皆佛法を知つた同志、謂ゆる同氣連枝の連中がより合つて掃除の話に借りて本地の風光を語り合つて居るのです。

「頌」頌云、借來聊爾了門頭、得用隨宜即便休、象骨巖前弄蛇手、兒時做處老知羞。

【讀方】頌に云く、借り來つて聊爾として門頭を了す、用ゆることを得て宜きに隨つて即便休す、象骨巖前、蛇を弄するの手、兒の時の做處、老ひて羞を知るや。

【講話】頌云、借來聊爾了門頭、借來ると云ふのは掃除の事を借來つて今問答をやる、聊爾と云ふのは聊かと云ふこと、了門頭と云ふのは掃除の事を借來つて門の近傍を掃ふ、だから了門頭と云つたので、門と云ふのは六門ある目も齒も耳も口も皆門だ、六根の門頭を了して見るが宜い、聞く底何を聞いて居る、嗅ぐ底何を嗅いで居る、味ふ底何を味つて居る、見る底何を見て居る、或は寒暖が膚に觸れて好いの悪いの

と云ふのが何が一體好い悪いと云ふのだ。得。用。隨。宜。即。便。休。雲巖と道吾の二人が問答して道吾が休去つてしまつた。あれは何も分らずに休し去たのではない。何れも掃除の事を用ゐて佛法の話をして皆ちやんと本分をはづれては居らない。象。骨。巖。前。弄。蛇。手。象。骨。山と云ふのは雪峰山のことです。雪峰山が象の脊のやうになつて居ると見える。それで雪峰山のことを象骨山とも云ふ前に出て居ります。問答が二十四則の所に出て居ります。二十四則の所に出て居るから此所はザツと申して置く。象骨巖前弄蛇手と云ふのは是は雲門のことを云ふので、雲門が雪峰山で以て拄杖を投げ出した。其の拄杖が蛇となつたのみならず、雲門和尚が直に蛇になつて、其處へ蛇が出て來たので、嗚呼恐ろしいと云つたことがある。二十四則の所に、雲門以拄杖擲向峰、面前作怕勢と云ふことがありますが、恐ろしいと云つて自分が蛇になつて問答したことがある。是は其事を云ふたので、兒時做處。老知羞。子供の時分に爲した事は年を取つて考へて見ると洵に羞しい。是は誰もさうです。イヤ雲門殿お前が象骨巖前に蛇を弄したことがある。あれは子供の時の事で、今日考へたならば羞しく思ふだらう。あれは立派な座敷へ出す話ぢやない。雲巖と道吾との話が奴

見婢殷勤でお座敷へは出されぬと云ふけれども、お前が象骨巖前で蛇を弄した話も御同様に座敷へ出されぬぞと響かして居る。

第二十二則 巖頭拜喝

【垂示】示衆云、人將語探、水將杖探、撥草瞻風、尋常用底、忽然跳出箇焦尾大蟲、又作麼生。

【讀方】衆に示して云く。人は語を將つて探り、水は杖を將つて探る。撥草瞻風は尋常用ゆる底なり。忽然として箇の焦尾の大蟲を跳出せば又作麼生。

【講話】其の人の所へ行つて褒めると、直きに調子附いて、さうして自慢をする。直ぐ解つて來る。又其の前へ行つて譏ると、直きに怒り出す。譏れば怒るし、褒めれば喜ぶ。此方で思つた通りに、直きに言葉に隨いて精神が轉倒して了ふ。褒めても喜びもしないし、譏つても怒りもしない。苦に遇ふても心が動著しない。樂に遇ふても心が飛出すほど喜びもしない。斯ういふ人は却々語では探れない。外からは伺が著かぬ。謂ゆる佛眼も覩不見。魔外も窺ひ難し。だ實に八風吹不動といふ人だ。修養がなければ

この境界には到れない、人將語探禪門の知識は言葉を以つて修行人を試験する、お前今日は何處から来たなどと言うと、正直に「東京から参りました」と何の修行もなく何んの力もなしに誠に大丈夫にいふ人がある、東京から参りました、同じく云ふにしても、何となく其の言葉の上に油断のない言葉がある、唯々「東京から参りました」といつても何の力もないやうな言葉もある、だからして人の言葉に附いて、此方の精神を探られるやうなことではまだ本當に精神が行き届いたとは言はれない、だから師家は言葉を以て學人を探る、學人とは修行する人のことだ、師家たる人が其の學人を言葉で探ると、向ふの腹が能く分る、水將杖探、水を探るには杖を以てする、所謂「瀬踏み」をする、能く解る、川を渉る時に、先に杖を以て、その深淺を瀬踏みして見ると、大概は分る、だから水は杖を以て探るとある、金は火を以て試みる、といふ、是は眞鍮であるか、是は黄金であるか、火に掛けて見ると能く分る、眞鍮は溶けて了ふが、黄金は溶けて了はない、銀流しのやうな見た所だけは誠に立派でも、直きに剝げて了ふ、本當の無垢の純金だと、火に試みても毫頭變化はない、だから金は火を以て試みると云ふたのだ。

撥草瞻風、尋常用底、學人の方に掛けて見る、學人が處々方々修行をして歩く、草を撥きて師家の風を見る、と云ふことで、方々の山川を跋渉して、さうして草を撥きて師家の家風を能く見て行く、此語は學人の方に當るが、師家の方にも當る、師家の方ならば、學人の様子をチャンと試験をする、即ち草を撥き、學人の風を見る、といふことで、學人の修行が能く行き届いて居るか、何うか、試験をして見るといふのである、是は禪宗ではよく用ゐる言葉だ、是は師家たる者の尋常に用ひる底にして、何にも珍らしい事はない、即ち師家たる人が言葉を以て學人の脚下を探つて見る、是で學人が平生修行に力を入れて居るか、居ないか、修行が熟して居るか、居ないかが能く分る、所が此處に、忽然跳出箇焦尾大蟲、又作麼生、尋常一樣の人ならば、語を以て探る事も出来やうが、茲に尋常一樣より超えた人が出て來たら何うだ、焦尾は禹門の故事にある、魚が龍に化する時に尾を焦くと云ふ事から來て、魚が龍門を渡ると龍と化すと云ふ、大變私は面白いと思ふ、何うしても魚は一度龍門を渡らなければ龍になる事は出来ない、人間もさうであらうと思ふ、丁稚奉公の十年も務めんければ、矢張り其の職業の者になる事は出来ない、何うしても一度十年の奉公をして來

なければ、其の職業の人には何うしてもなるものではない、だから龍門を渡らんければ、龍になれないといふのが大變面白い。宗門では叢林と云ふ、此叢林と云ふ事は三人以上僧侶が集つて居る所を云ふので、大勢修行者の集つた所だ、所謂叢林に出で、坐禪せぬければ、僧になれないと云ふと同じである、是はさうでありませう、修行せず佛になつたり、祖師になつた人は一人もありはしない、佛祖にならうと思ふには、何うしても修行をせんければならぬ、修行するといふのは何だ、即ち叢林に出で、坐禪する事だ、龍門を過ぎなければ龍にはなれない、夫で佛祖になるには坐禪の龍門を渡らんければなれない。所で此の龍に魚が化する時に、一番尾が化けないうさうです、其の時に尾を焦くといふ事がある、夫を焦尾と云ふ、お芽出度い時に、焦尾の筈と云ふ事をいふ、宗門にて或は長老になる時の法式を焦尾の筈などと云ふて居る、何故かといふと、今の魚が一番化ける事の六ヶしい所は尾であつて、之が爲めに龍になれないが、其の尾を焦いて了ふと龍になる、だからして大變芽出度い話だ。此の處は魚のことではない、或は又虎が年限を経ると人間に化ける、其の時に虎の尾は人間にならない、此尾を焦いて人間になると云ふ事がある、だから茲で、焦尾

の大蟲といふのは虎の事をいふのだ、さうすると焦尾の大蟲だから、虎が尾を焦いて了つて、愈々年限を経て人間になつたのだ、恐ろしい虎と見ても宜い、さうして見ると尋常一樣の人でない、今は言語では探られないといふやうな人物を指したのだ、さういふ人物が此處へ飛び出したなら、何うして接得したものであらうか、この焦尾の大蟲は、語を以て探つたつて探られはしない、褒めて見た所が喜びもしない、譏つて見た所が怒りもしない、利を以て眩さうと思つても心が動かない、名譽を以て試みやうと思つても、一向心を動かさない、大概な人は名譽と利益を以てすれば動く、名譽と利益をば破れ草鞋の如く思つて居る者に會つたら何うするか、何と説くか、斯う云ふ人は好い加減の接得ちや承知するものぢやない。

【本則】舉巖頭。到德山。跨門便問。是凡是聖山。便喝頭。禮拜洞山。聞云。若不是豁公。大難承當。頭云。洞山老漢。不識好惡。我當時一手擡。一手捺。

【讀方】舉す巖頭。德山に到り。門に跨つて便ち問ふ。是れ凡か是れ聖か。山便ち喝す。頭

禮拜す。洞山聞いて云く、若し是れ豁公にあらすんば、大いに承當し難からん。頭云く、洞山老漢好惡を識らず、我れ當時一手擡一手捺。

【講話】先づ是は巖頭を云ふ、此の巖頭は全齋と云ふ人だ、此の齋と云ふ字は或は豁の字にも書く、徳山は宣鑑と云ふ人だ、此の徳山の棒と云ふことは天下に有名な評判である、徳山は人を叩く、何と云つても打ツのである、何にも説きはしない、何と云つても叩くから、徳山の棒といふ、此の徳山も龍潭の所へ行つてナカノの修行をして悟つた偉い人だ、其處で此の巖頭といふ人は、徳山の弟子だが、弟子が師匠を試みるといふ鹽梅だ、巖頭、徳山、全齋が、徳山の宣鑑と云ふ師匠の所へ行つて、師匠を試みる所の鹽梅が所謂焦尾の大蟲だ、師匠でも何でも許さないと云ふ意氣込がある。跨門便問、是凡是聖、門に跨つて居るといふのが面白いです、這入つて了つたのもなく、出たのでもない、是は此の前にお話しましたが、凡といふのは六凡と云ふ、是は迷の方だ、聖と云ふのは四聖で、是は悟の方になる、其處で「是凡是聖」といのは、是迷是悟と云ふのと同じ事だ、之によく似た話がある、佛の所へ外道が行つて、雀を手に握つて、此の手の内の雀は生きて居るか、死んで居るか、斯うやつた、生きて居ると

云ふたら、グツと握り潰して了ふ、死んで居ると云ふたら、生きて居るぢやないか、斯うやる積りであつた、すると釋尊が門に跨つて一足を出して、今俺は出やうとするのか、這入らうとするのかと云つた、出ると云ふたら這入つてしまふ、這入ると云つたら出て了ふといふ底意である、今は之に似た問答である、夫れから又或る學人が臨濟大師に、門に跨つて即ち「是凡是聖」と斯う問ふた、すると臨濟一喝を下したと云ふ事が臨濟録の中に出て居る、能く斯ういふ問答がある、つまり兩天秤にかけて師家を試みんとする様子だ、これを「跨門の機」といふのだ、かゝる種類の問を「跨門問」といふて居る、是凡是聖と云ふ、是は迷としたものか、悟つたとしたものか、私は凡にして凡にあらず、聖にして聖にあらずだと思ふ、何うも迷ひだともせられない、悟つたともせられない、何故なれば、ズーッと法の根源に到つて御覽なさい、本源自性天真佛としてある、ズーッと根源の自性の所へ行つて見ると皆天真佛である、迷といふものはない、皆天真にして佛だ、此時には凡だの聖だのと云ふ事は皆超越して了つて居る、全體凡といふと早や聖といふ影が彼方の方にさして居る、悟りと云ふと早や迷ひといふ奴が裏の方にある、モウ高いと云ふと低いといふ奴がちやんどあ

る、長い短い、圓い四角い、赤い白い、何でも皆相對の法がある、相對の法門は、本源自性天真佛ではない、相對の法門は未だ根源に到らない、ズーッと根源に到つて見ると、實に「本源自性天真佛」で、六凡だの四聖だのといふ、そんな相對の名相は皆無くなつて了つて居る、夫だから凡といふのも間違ひだ、聖といふのも全體間違ひです、夫で凡といふと早や聖といふ奴が裏にある、聖といふと早や凡といふ奴が裏の方に居る、夫では法の自在を得たものとは言はれない、夫だから何うも師匠の徳山を試みる鹽梅がある、流石は徳山、説明など少しもしない、いきなり「喝ッ」と一喝を喫はした、徳山の所には凡だの聖だのそんなものはない、影も形もない、一喝の下に凡聖兩ら喝破して了つた、所謂「本源自性天真佛」が一喝の下に現はれて居る、もしも徳山が此の場合説明等して居つたら、お弟子の全寮に「ブツ叩かれたかも知れない、是は凡と云ふものは六凡の事だ、聖といふものは四聖の事だ、全體凡も聖もあるものでない」なんてそんな理屈を云つて居たら、ナカノ、巖頭は「放す氣遣ひはない、假令師匠と雖も許さない、所が徳山には、凡だの聖だの云ふ待對の見は、夙に越えて居る、夫で以て一喝下した、すると大小の巖頭も夫で以て禮拜をした、此の一喝の響を聞いて

禮拜したやうに見へるが、此の禮拜がまだ半分肯はないでしたのかも分らぬ、随分夫がある、頭を下げて、「へーッ」といつて居るけれど、頭を下げるは下げては下げてはナカノ、腹の中で頭を下げない事がある、手をつけど眼は縦につく蛙かな、巖頭も心と實際と違ふかも知れない、だから其の禮拜が半分肯つての禮拜か全く肯つての禮拜か、其處を洞山和尚が、巖頭精神を見てやらうと思つた、所謂語を以て人を試みる、洞山は良价和尚、此の人は支那に於ける曹洞宗の開祖と云ふても宜い人で、水を渡つて悟つた人である、五位の位は一番先に致しました、此の和尚が来て、「偉いな」といつて巖頭を褒め立てた、若。不。是。豁。公。大。難。承。當。豁。公。といふのは今の巖頭全豁の事だ、承當といふのは承知するといふ事だ、徳山の一喝で、自分が夫を呑み込んでチャンと一度で汲み取つて居る、其の一喝を汲み取つて承當したのは豁公でなければナカノ、出來る話でない、斯う言つた、何是は洞山が釣竿を下した様なもので、巖頭を試みた鹽梅がある、巖頭が此の時に調子付かなければ宜いのに、洞山はちやんと釣竿を出して居る、其餌に取付くか何うか知らんといふので、釣竿を下だされた、するといふと巖頭が調子付いて來た、頭云、洞山老漢不識好惡、即ち、不巖頭大難承頭な

んと言ふが、全體私が禮拜したのは本當に禮拜したのぢやないのを己が本當に禮拜したと思つて褒めて居る。だから彼の老人は善いも悪いも解りやしない。遂々洞山は巖頭に言はせて了つた。到當巖頭は洞山の語で探られて了つた。こゝを見ると確かに洞山はズーツと腕が上は手だ。洞山は好悪を離れて了つて居る人である。巖頭は未だ好悪の所に居る人である。だからそんな事を知らずに居る所の餌に掛つて釣り上げられて了つた。我當時一手擡一手捺。己が禮拜したのは一手を擡げて一手を捺へて居る。彼の禮拜の中には半分は肯つて半分は肯はない所がある。と白狀した。詰り褒められて調子付いて了つた譯である。誰も兎や角う云ふ事がある。能く自分で修養をせんければならない。

〔頌〕頌云。挫來機、總權柄、事有必行之威、國有不犯之令、賓尚奉而主驕、君忌諫而臣佞、底意巖頭問德山、一擡一捺看心行。

〔讀方〕來機を挫し、總權柄を總ふ事に必行の威あり、國に不犯の令あり、賓奉を尚ん

で主驕り、君諫を忌んで臣佞す。底の意ぞ巖頭、德山に問ふ。一擡一捺、心行を看よ。

【講話】頌云。挫來機、總權柄。是はモウ天下の師家では皆さうです。此處には三人共に夫があると思ふ。來機といふのは彼方から來た學人で、其の學人が來るといふと師家で挫しいで了ふ頭を擡げさせない、夫は何だといふと師家たる者は權柄を總べて居るからである。權柄といふのは樞機などいふことだ。權力の中樞だ。政治の方でいふと所謂總理大臣が日本の權柄を總べて居るので、宗師家たるものは矢張り佛教の權柄を總べて居る。佛祖の權柄は掌中に握て居る。だから學人が何といふて來ても之を挫しいで了ふ。此處に巖頭の働きがある。德山も無論である。洞山大師もさうだ。三人共に皆其働きは持つて居る。管に三人許りぢやない。天下の宗師家たるものは皆此の權柄がある。だから是の初の一句は天下の宗師家を指す。唯德山一人に見て了ふ人もある。巖頭見たやうな來機があつたけれ共巖頭の頭を擡げさせない、「喝ッ」と云つて一喝を下した所に權柄を總べて居る。斯う見た人もある。德山一人と見て無論差支へはないが、乍併是は天下の宗師家に皆其働きがある。又夫でなければ眞の宗師家とは言はれずまい。夫から今度は德山と巖頭の分を是からお話し

する事。有。必。行。之。威。何。事。でもさうです。事には必ず行はねばならぬといふ威光がある。是は權柄を總べて居る人には必行の威がある。又夫でなければならぬ。何うしても必ず必然行はねばならぬ威光がある。徳山の事を言ふと徳山の威光とは何だ。是凡。是。聖。と言つた時に「喝ッ」といつた一喝だ。實に必行の威權だ。モウ一喝を下さねばならぬ時だ。國。有。不。犯。之。令。之。は巖頭の方である。何の國へ行つても犯す事の出来ない法令といふものがある。日本は日本で不犯の令といふものがある。外國では又皆其の國として不犯の令がある。何うしても犯す事の出来ない。動かす事の出事ない法令がある。夫は何だといふと巖頭が禮拜した事だ。何うしても巖頭は禮拜をせんければならぬ。是は犯す事が出来ない。其の不犯の法令を巖頭が禮拜で解つた。賓。尙。奉。而。主。驕。是は洞山と巖頭に見た方が宜い。洞山が「チョツ」と御客になつて此處へ來て、横合から言葉を出したから賓だ。さうして奉を尙ぶ大變な進物をした。不。是。裕。公。大。靜。承。頭。といふて褒めるといふ進物をした。さうするといふと巖頭が驕り出した。洞山老漢不識。好。惡。なんと言て威張り出した。つまり自分が頭を下げた事を褒められたから好い氣になつて調子付いた。洞山の腹の中では舌を出して居つたかも

知れない。君。忌。諫。而。臣。佞。是は徳山と巖頭に見る。諫を忌むと云ふのは何だ。何うも諫といふものはナカ／＼容れぬものだ。是。凡。是。聖。といふたが、所がナカ／＼承知しない。容れないといふのは何だ。一喝を下した事である。さうすると臣佞す。何でも腹の中では何うか知らないが、偉い忠實な様な風の佞人となつてさうして禮拜をした。半分肯つて半分肯はないといふ禮拜をした。だから寧ろ本當の忠實ではない。底。意。巖。頭。問。徳。山。是は本則でいふと。是。凡。是。聖。といふて巖頭が徳山に問うた時に徳山が一喝を下した。一。擡。一。捺。看。心。行。一。擡。一。捺。といふのは洞山の言葉に隨いて巖頭が調子付いた。一擡は許す方である。一捺は許さぬ方である。心行を看るといふのは洞山の言葉に依つて巖頭が白狀して了つた。巖頭の心行は誠に能く見へた。心行といふ事は心術。或は意。と云ふ事で、心で行ふと云ふ、即ち自分が洞山の言葉に依りて白狀して了つた。だから巖頭の精神は誠に能く見へて居る。

第二十三則 魯祖面壁

【垂示】示衆云、達磨九年呼爲壁觀、神光三拜漏泄天機、如何

得掃蹤滅跡去。

【讀方】衆に示して云く、達磨九年呼んで壁觀と爲す。神光三拜天機を漏泄す。如何が蹤を掃ひ跡を滅し去ることを得ん。

【講話】達磨九年といふ事は、第二則にも言つた少林寺に居つて九ヶ年面壁をした、其の達磨大師が九年の間坐禪をした、所で支那の人には様子が解らぬから、呼爲壁觀。印度に壁觀婆羅門と云ふがあるから、達磨の事を支那の人が壁觀婆羅門と云ふたのである。全體達磨といふ人は黙つて坐禪をして居るけれども、悟らうと思つて坐禪をしたのぢやない、もうトツクに印度で悟つて來た、壁觀婆羅門と云ふ方の修行は是から段々と悟らうとするのであるが、達磨はさうぢやない、印度で悟つて支那へ來て坐禪をして居るのであるから、悟る爲めの坐禪ではない、黙つて居るけれども、共佛法を説いて居る、所謂無言の佛法だ、坐禪中に説法をして居る、夫を知らずに壁觀婆羅門など呼んだのである。神光三拜漏泄天機、神光といふのは達磨の御弟子の二祖様だ、達磨の法を相續する時に神光と云ふ人が、達磨の前へ出て來て、何にも

言はない、黙つて三拜した、さうして自分の本位に返つて立つて居つた、すると達磨が神光に向つて言ふに、汝我が髓を得たりと云つて許した、お前は己の佛法の髓を得たと云ふて許したといふ事である、汝我が髓を得たり、なんと云ふのは遣り取りでもした様な風に見へる、所が何も遣り取りをする法も何にも無いのだ、夫を、汝我が髓を得たり、といふのは、是は天機を漏泄したものである、夫で天然の理といふものが既に其處に出現して居る。マアさうさチ、理といふものは本當を言て見れば名もない、形もない、何にもない所に、何とかいふ名を付けたら、モウ其處で天機を漏泄した。真如といふても、モウ天機を漏泄して居る。佛といふ名を付けても、天機を漏泄して居る。元と名のないものに名を命ければ、モウ天機を漏泄したのである。大事な物を疵だらけにしたやうなものだ、所謂蛇を畫いて足を著けたやうなものだ。如何得掃蹤滅跡去、何うも蹤を掃ひ跡を滅すると云ふ事は、六つかしい、人が真如と云ふと、真如の跡に隨き、悟りといふと、悟りの跡に隨く、其の蹤を掃ひ跡を滅するといふ事は、ナカノ、難い。一寸或る所へ行つて休んでも、早や跡に執著して居る、モウ一遍行かうといふ様に直ぐ跡が隨いて居る、直きに執著の跡が隨く。全體達磨が我が

髓を得たなぞと言ふのは早や蹤に隨いて居るだから悟りを無暗に持つて歩るいて己は悟つたなどいふて居るなら誠に早や跡だらけた味噌の味噌臭きは上味噌にあらす、悟りの悟り臭いのは上悟りではない、其處で今日の魯祖の境界は實に掃蹤滅跡去底の消息である。

【本則】舉魯祖凡見僧來便面壁。南泉聞云、我尋常向他道空劫以前承當、佛未出世時會取尚不得一箇半箇、他恁麼驢年去。

【讀方】舉魯祖凡僧の來るを見れば便ち面壁す。南泉聞いて云く、我れ尋常他に向つて空劫以前に承當せよ、佛未だ出世せざる時に會取せよと道ふすら尚ほ一箇半箇を得ず、他恁麼ならば驢年にし去らん。

【講話】魯祖は馬祖の法嗣で魯祖山の寶雲禪師と云ふ人だ、この人は凡見僧來便面壁で何にも説かないでたゞ面壁して居る、佛とも言はぬ、真如とも言はぬ、佛性とも言はぬ、唯々面壁する丈けだ、如何是佛と彼に向つて問うても黙して居る丈け、如何

是祖師と云つても壁に向つて坐禪をして居る、如何是佛祖と云うても唯々面壁だ、黙つて何にも説かない。全體是で以て何にも説かないとしたものであらうか。達磨は九年の間説かないものとしたであらうか、達磨は黙つて居るけれ共佛法を舉揚して居るではないか、今日の人の東西南北に饒舌くつて歩くよりも達磨の黙つて居た方が大變布教になる、夫れと同じで魯祖の面壁も達磨の面壁と同じで言葉はないが生きた佛教を説いて居る、本源自性天真佛が現はれて居るといふと南泉が夫を聞いて言ふには、魯祖は何にも言はないで坐つてばかり居るといふ事だが、何うも可怪しな話だ、我尋常向他道空劫以前承當、私は他の人に向つて説くのは空劫以前に承當せよ、夫から又佛未出世時會取と斯う説く、南泉の方は説く方だ、魯祖の方は何にも説かない方だ、尚不得一箇半箇、斯ういふやうに尋常に説いて居るけれども、尚不得一箇半箇、一箇半箇も人を得ない、實に説いても效がない、然るに魯祖は黙つて居るが夫れでは他恁麼驢年去と、驢年といふたのは驢の年だ、十二支の内には驢の年はない、例へば猫の年と云ふも同じ事だ、猫の年はない、何時迄經つても何うも人は得られぬと云ふ事を驢年にし去らんと云たのだ、人を得る事が出来

ない、折角説いてさい一箇半箇得られぬぢやないか、それに魯祖のやうに黙然だつて居つては猶更得られやうがない。此處は御互一つ參究して見なければならぬ、空劫以前承當セウといふ事は、所謂天地の未だ開けない以前といふ事である、天地開けない以前セウの所で佛法を承當せよと云ふのである。承當と云ふと天地開けない以前とは何處でせう、空劫以前とは何處でせう、そんな遠方ぢやない、今皆さんが茲に斯うして居るのが空劫以前だ、空劫以前にならないのは何うしてならない、唯々妄想と執著だ、此妄想執著の爲めに相對の争ひばかりして居る、だから空劫以前にならない、空劫以前といふ事は相對の争ひが無くなつたことだ、今日此處に居る所の人でも、高いの低いの、或は聖だの凡だのといふ、さういふ精神上相對の争ひがある以上は空劫以前とは言はれない、執著を離れたならば争ひは無くなる、夫で今日は魯祖が黙て坐つて居る、此の魯祖の境界は自然に空劫以前だ、だから魯祖は説いて居らぬと思つても不可い、魯祖が黙つて坐つて居る所を見て空劫以前を見て取らなくてはならぬ、其の説法を聞いて取らねば不可い、魯祖は現はれない所の空劫以前を完全に現はして居る、夫から佛の未だ出世せざる時は未だ世の中に釋尊が出て來ない

時だ、釋尊が出て來たから喧しくなつて來た、或は迷だの悟だのといふ事を説いて此の世が喧しくなつた、釋尊が出ない内は迷だの悟だのは有はしない、であるから佛が未だ出世せざる時に會取せよ、迷悟を離れて、本源自性天真佛を見て取れ、今魯祖が坐つて居る黙つて居るけれども夫が即ち天真佛を現はして居るのだ、所謂佛未だ出世せざる時が其處に現はれて居る、佛が出世しないと云ふと三千年も昔の話だと思つたら大間違ひだ、さう云ふ妄想分別を離れて見ると今日が即ち未だ佛出世以前時だ、即今に佛未出世事を會取せねばならぬ、即ち魯祖が面壁をして居るのは佛未出世時だ、其姿をちやんと會取せよ、他恁麼驢年去、是は言葉の上では大變貶した事で、今の魯祖が面壁して説いて居るのに、其外に佛法があると思つたら驢年にし去ても佛法は分らぬ、魯祖の説法を聞き外づして了つて其外に何か佛法があるなと思つたならば、何時迄經つても分るものではない、自分の精神に切り込んで行かんければならぬ、唯彼處の方にばかり佛法があるといふ考であれば、モウ何時迄經つても佛法は分らぬ、魯祖が裏うらの方から佛法を説いたとすれば、南泉は表の方から佛法を説いて居る、魯祖と南泉と二人にて公案が圓成して居ることを

看取せねばならぬ。

【頌】頌云。淡中有味、妙超情謂、綿綿若存、兮象先、兀兀如愚、兮道貴、玉雕文以喪淳、珠在淵而自媚、十分爽氣兮清磨暑、秋、一片閑雲兮遠分天水。

【讀方】淡中に味有り、妙に情謂を超ふ。綿綿、存するが若くにして兮、象の先なり。兀兀、愚の如くにして兮、道貴し。玉、文を彫つて以て淳を喪し。珠、淵に在つて自から媚ぶ。十分の爽氣兮、清く暑秋を磨し、一片の閑雲兮、遠く天水を分つ。

【講話】頌云。淡中有味、此の淡中有味といふが面白い、淡は極く淡泊だ、その淡泊の所にいひ現はされぬ味がある、誰か、一杯の飲んだる水の冷たさを、人あり問はば如何が答へん」と詠つた、實に面白い冷たい水を一口飲んで其の冷たさを人が問うたらば何と答へたものであらう、是は實に味ひがある、暑い時に咽喉が乾いて居る、其時に冷たい水を飲んだ時の味ひは言ふに言はれないであらう、此處は魯祖面目の風趣を述べて居る、黙つて坐つて居るけれ共、淡中に味がある、怎うも此處は講釋が

出來ない、だから妙。超情謂といつた情といふのは心の事謂といふのは言葉の事だ、此處へ情謂と使つたは實に面白い、情を超えたのは、心行處滅、謂を越えたのは、言語道斷だ、心で分別する事も言葉で説明する事も出來ない、だから妙に情謂を超ゆといふて居る、魯祖の黙つて居る當體は、言語道斷、心行處滅だ、所謂妙に情謂を超えて居る。そこを強いて形容すると綿綿若存兮、象先だ、是は老子の語だ、綿々とは相續して斷へざる事だ、マア是は象の先であつて、是は味の事を云ふ、味と云ふものは形がない、が其味といふものは實に言ふに言はれない味のあるものである、さうかといふて此味といふものは昔から今日迄、マア天地に充滿して居る、其充滿して居る所の味を魯祖は口で説かず、黙つて言語道斷、心行所滅の處に面壁で以て説いて居る、其味は綿綿として存續する、味には形も何もあはしな、けれ共、チャンと存するが如くであるから、何うしても見る譯に行かぬが、味は在る。兀兀如愚兮、道貴、兀兀は動かない貌、愚の如くにして、魯祖が黙つて坐つて居る事である、誠に愚のやうだが併し、如しといふのだから本當の愚ぢやない、魯祖の境界は何とも評して見やうがない、だから道貴しと云ふたのだ、黙つて坐つて居る、其の魯祖の道德といふ

ものは實に貴い。無事は貴人といふ事もある。佛祖が出て來ても魯祖の境界を動かす事は出來ますまい。玉雕文以爽淳。何か彫物でもすると、純粹の玉に傷けたやうなもので、餘計な事だと云ふ。是は南泉が魯祖の面壁を説明したりするは、何の事はない。玉に文を彫つたやうなもので、其の純粹の所を失つて了つて居る。空劫以前に承當せよ。佛未だ出世せざる時に會取せよなどいふて説明して居るのは惜しい事だ。全體魯祖が黙つて坐つて居るのは、珠在淵而自媚。珠が九淵に沈んで居るやうなもので、何となく趣が有つて水迄が媚びて居る。石が珠を纏んで居ると山が輝く、珠の出る山は何となく山が輝く、其の如くに水に珠が沈んで居ると、其の所が媚びて居ると云ふ事がある。是は魯祖が黙つて坐つて居る。共、矢張り九淵に珠があるやうなもので、何となく趣がある。さうすると此の珠が九淵にあると云ふ方は、是は裏面の方だ。玉へ文を雕ると云ふ方は表面の方から言ふたのである。十分爽氣兮清磨暑秋。是れは南泉と魯の境界を云ふと、丁度秋の暮に氣爽やかにして、モウ暑からず寒からず、好い位の氣候になつて、心持が大變に好いであるから魯祖と南泉の境界とは十分なる爽氣清くして、迷だの悟と云ふものは頓と離れて居る。一片閑雲兮

遠分天水前には十分の爽氣と云ふて置いて又茲に、一片の閑雲と云ふて形容した。此時天水を分つと云ふのは、秋になると海の水が澄む。天も亦澄む。さうすると云ふと天だの水だのと云ふ事は分らない。其處に一片の閑雲だ。靜かな雲が仕切りをして居る。天水と分つて居る。夫で魯祖と南泉は實に天水のやうなものだ。一人は表面の方から佛法を現はし、一人は裏面の方から佛法を現はす。二人共に佛法の上に於ては、些共優劣がない。けれ共言葉の上で現はす人と、黙つて居る人とは宛かも一片の閑雲が遠く天水を分つて居るやうなものだ。實に面白く形容したものだ。

第二十四則 雪峰看蛇

【垂示】示衆云、東海鯉魚、南山鼈鼻、普化驢鳴、子湖犬吠、不墮常塗、不行異類、且道是什麼人行履處。

【讀方】衆に示して云く、東海の鯉魚、南山の鼈鼻、普化の驢鳴、子湖の犬吠、常塗に墮せず、異類に行かず、且らく道へ是れ什麼人の行履の處ぞ。

【講話】この垂示は一寸解り難い。東海鯉魚、南山鼈鼻、これは六十一則の所へ行くこと、

此の東海鯉魚といふ本則が出て居る、矢張り雲門が大衆に言ふた言葉で、それは少し六ヶしいが六十一則を見れば分るから今此處では委しい話をせぬが、雲門が扇子躑躅して三十三天に上り帝釋の鼻孔を築著すといふた、随分解らない話で、扇子が飛上つて帝釋天の鼻を撫でたといふ事にしてある、其次に斯ういふことが言つてある、東海の鯉魚打つこと一棒すれば、雨盆を傾るに似たり、其時東海の鯉魚を一棒すると雨を降らすこと盆を傾くるが如くであつたといふ、鯉魚とは鯉だ、鯉が龍に化して、さうして雨を降らしたといふことがある、鯉が龍門三級の波を越えて、龍に化して滿天下に雲を起し雨を降らしたといふ美談がある、さういふことを引いて東海の鯉魚と言つた、斯ういふことは借事間と云ふので物を借りて示すのだから誠に解らない、禪宗の話はよく物を借りて来てする、それから諱を犯さずして話をするといふのが禪門のやり方だ、其物の名を言はずして遠くの方から話をして居る、こゝらも同じで、東海の鯉魚といふことも文字の通りに見たならば、只東海の鯉と言つた譯だけれども、鯉に何も用事はない、それだから禪宗の話は六ヶしい、文字の通りに解釋して見た所が解らない、こゝらは一口に言ふたら師家の活手段だ、

即ち佛祖向上の活手段、或は格外の手段とでも言うか、何でも參禪は師家に就かにやいかぬ、それから師家たる人は向ふの根機を見て説くのだから何も手段が極つて居らない、それだから活手段と言ひ格外の手段ともいふ、此處等は師家の格外の手段で、東海の鯉魚と言て物を借りて来て、諱を犯さずして、活きた佛法を人に悟らせるのだ、南山鼈鼻は本則で解る、普化、驢、鳴、普化和尙といふのは臨濟の門下で中々有名な人だ、明頭來也明頭打、暗頭來也暗頭打、八面來也旋風打、虚空來也連架打と言て、毎日鈴を振て町を歩いたといふ、まるで知らない人から見たら氣狂ひの様な人である、其普化和尙が臨濟大師の所へ行つた、さうすると此普化が生菜を食べたことがある、私共の宗門では、御施餓鬼をやる時に、施餓鬼棚に人參だの午芣だのを獻げる、それを生菜しやうさいといふ、其生菜を普化和尙が食つた、さうすると臨濟大師が、きさまは驢馬見た様な奴だと言はれた、すると此の普化和尙は、驢馬の鳴く眞似をした、何と言つて鳴いたか知らぬが、ヒーンと言て鳴いたか、うさぎ馬の鳴き聲をした、さうして二人の佛法の話がそれで盡きて居る、これが普化の驢鳴だ、子湖、犬吠、此の子湖といふ和尙は、子湖岩の利蹤禪師といふ人で、門前に札を立て置いてそれに、山僧の

所には一匹の狗が居る、上は人の頭を取り、中は人の心を取り、下は人の足を取る、分別に涉れば噛れて了うぞ」と斯う書いて建て居る、それはどういふことだといふと、僅かも分別に涉つたらもう佛法でないから、こんな者は狗に噛殺されて了ふ。佛法といふものは、分別を離れたものだ、分別で以て佛法を知らうと思つてもダメだ。佛法は妄想分別を離れた所に生きて現はれる、妄想分別では佛法ではない、維摩經の中に、見聞覺知は是れ見聞覺知にして佛法にはあらず」と言てる、分別は佛法でない。分別を離れたる處に佛法が現然する、分別を離れて了へば十萬億土の淨土も其處にある、淨土はそんな遠方にはない、こつちの分別で以て淨土が遠方になる、分別がある。佛が遠くになつて了ふ、佛法は足下にあるが、分別に依りて千萬里に遠ざかつて了ふ、此の子湖和尚が門前に札を立て、そうして擬議すれば喪身失命す、分別に涉つたならば狗に噛殺されて了うと、言たことがある、それを子湖の犬吠といふのだ、それから不墮常塗成程このやうなことは、尋常一樣の話でないから、皆常塗に墮ちては居らない、東海の鯉魚と云つたり、南山の鼈鼻と云つたり、普化の驢鳴と云つたり、子湖の犬吠といふ、斯ういふ話は實に常塗には墮ちない話だ、通常の話では

ない。全體常塗といふものは、迷悟凡聖、皆常塗で、迷だの悟だの凡夫だの聖人だのといふ話は常塗の話だ、常塗に墮せずといふから迷悟凡聖を離れて了つた話だ、それだから尋常一樣の話ではない、常の話といふものは、迷だの悟だの凡夫だの聖人だのと言ふことであるが、其迷とか悟とか凡夫とかいふ聖人の臭みを離れて了つた佛祖向上の活手段の話であるから常塗でない。不行異類異類といふのは、異なつた類といふから人間より以外の者をいふのだ。今東海の鯉魚と言つても何も魚の事を言ふた譯でもない、或は南山の鼈鼻と言つても何も蛇の事を言つた譯でもない、普化の驢鳴と言つても何も驢馬の事を言つた譯でもない、子湖の犬吠と言つても何も犬の事を言つた譯でもない。今は何の話だ、佛祖向上の活手段の話だ。何も動物園に行つた様な異類の話をするのでない。且道是什麼人行履處、行履といふのは、人の足の踐み附け所だ、足の履む所を言ふ。さういふ自由の活手段を得た人はどんな人であるか。垂示は他の事を借りて來て話をして居るのだから、中々六ヶしい。

【本則】舉。雪峰示衆云、南山有一條鼈鼻蛇、汝等諸人切須好

看。長慶云、今日堂中大有、人喪身失命。僧舉似玄沙。沙云、須是我稜兄始得、然雖如是、我即不恁麼。僧云、和尚作麼生。沙云、用南山作麼。雲門以拄杖擡向峰面前作怕勢。

【讀方】舉。雪峯衆に示して云く、南山に一條の鼈鼻蛇あり、汝等諸人切に須らく好看すべし。長慶云く、今日堂中大に人有つて喪身失命す。僧玄沙に舉似す。沙云く、須らく是れ我が稜兄にして始めて得べし。然も是くの如くなりと雖も我れは即ち不恁麼。僧云く、和尚作麼生。沙云く、南山を用ひて作麼かせん。雲門、拄杖を以て峯の面前に擡向して怕るゝ勢を作す。

【講話】舉。雪峯示衆云、雪峯といふ人は中々立派な人で、修行事には大層苦勞した人である。徳山の棒、臨濟の喝と言つて、此間も臨濟録を讀んだが、如何なるか。是佛喝、臨濟の一喝は有名である。徳山の棒も有名である。其の有名なる徳山のお弟子である雪峯は、若い時には機鋒の鋭い人だ、其雪峯が衆に示して言ふには、南山有一條鼈鼻蛇。南山といふのは雪峯山の別名と見ても宜い、此の雪峯山には一條の鼈鼻蛇があ

る。蛇といふものは鼻が上の方を向いて居る、丁度龜が首を上げた様に蛇の鼻が上の方を向いて居る、所謂毒蛇の様な形である、一條の毒蛇がある、古人は斯ういふ事を言つた人もある、死蛇大路に當る、死んだ蛇が大きな路に横たはつて居る、下手に歩いたら大變なことだ、死蛇といふことは、死んだ蛇の事ではない、死蛇といふのは、恐ろしい毒蛇のことで、その毒蛇の毒を受けたら忽ち死んで了う、其毒蛇が道に横たはつて居る、斯う言つて足下に氣を付けさせる。今もさうだ、南山に一條の毒蛇がある。汝等諸人切須好看、うっかり歩いたら大變、其一條の鼈鼻蛇は何處へ出るか分らぬ、或は御飯を食べる所へ出るかも知れぬ、お茶を飲む所へ出るかも知れぬ、顔を洗ふ所へ出るかも知れぬ、道を歩くとも其處へ出てくるかも知れぬ、これは物を借りて来て皆に油断させない手段だ、全體鼈鼻蛇は色々姿を變へてくる、一條の鼈鼻蛇とは、御經の上で言つたら、眞如といつても宜い、眞如といふものは、形を現はして椅子になつたり、松になつたり、竹になつたりして、種々の形を現はし、色々な物に化けて来て居る、して見れば何も眞如でないものはない、佛法で言へば、宇宙間皆眞如でないものはない、そんならば皆氣を附けて見れば、一條の鼈鼻蛇は南山斗りと限

つて居らぬか知らぬだから、汝等諸人切に須く好看すべし能く蹴づかぬやうに、其蛇に食ひ附かれぬやうに、能く其蛇を見届けるが宜い、其蛇を見届けた人が悟を得た人だ、安心決定を得た人だ、斯ういふ様な言葉を持って来て多くの坊さん方に示した、スルと長慶云、今日堂中、大有人喪身失命、長慶は慧稜和尚のこと、今日此堂中に於て大に人があつて喪身失命するところふいふた、南山の一條の鼈鼻蛇に觸れてさうして皆喪身失命して了つた今の毒蛇に觸れて皆死んで了つた、本當に喪身失命する人があれば結構だ、一遍毒蛇に觸れて死んで了うと宜い、妄想分別を一遍殺して了ふと宜い、大死一番して大活現成す、一遍死んで了はなければ大活の働きが出来ぬ、本當に蛇に觸れて死んで仕舞つた人であると自由自在に蛇を使うことが出来て誠に名人になる、長慶の慧稜が蛇に付て話をして居る、これは慧稜の蛇の使ひ方だ、慧稜は自分も亦此蛇に觸れて一遍喪身失命したに相違ない、喪身失命した人でなければ中々此の蛇を自由自在に使うことは出来ぬ、さうすると僧舉似、玄沙、或僧が玄沙の所に行つてこの話をした、沙云、須是我稜兄始得、と斯う言ふた、慧稜は玄沙の法兄に當る、我が稜兄にして始めて得たであらうが、然雖如是、我即不慙麼、私は蛇

をそんな風には使はないぞ、慧稜はさう言つたか知らぬが、私はさうではない、スルと此僧が云ふに和尚作麼生、それではあなたはこの蛇のことをどう使ひます、沙云、用南山作麼、どういふことかならば、雪峰和尚は、南山に一條の鼈鼻蛇ありと言つたが、何も南山斗り用ひるに及ばぬ、北山にも居るだらう、足下にも居るだらう、臥る所起きる所、宇宙間一杯になつて鼈鼻蛇が居るだらうと玄沙が言つた、が此の言葉は誠に力がある、慧稜の如きは、只雪峰の言葉に附いて言ふ丈けであるが、玄沙は南山を用ひて何かせんと言つた、さうすると、雲門和尚が一番終ひに、以拄杖擲向峯面前、作怕勢、拄杖といふのは六尺もある棒だ、其棒を雪峰和尚の前に投出して、ソラ蛇が出て来た、蛇が出て来た、雲門自身が蛇になつて働いた、雲門の働きは目覺ましい働きた、自分が一條の蛇になつて活動した、鹽梅がある、これは繪などに「龍虎の戦」といふ圖が書いてある、古人の語にも、拄杖化して龍となりて乾坤を吞盡す、とある、道元禪師の働きを見ると、道元禪師が支那に行かれた時に虎に遇つた、虎が向つて来たから、拄杖を投つた、スルと拄杖が龍になつて虎を追ふたといふことがある、それは事實かどうか分らぬが、さういふ奇怪の事が書いてある、今は雲門、拄杖を以て峯の

面前に擡向して怖る勢を作す、雲門和尚の働きが一番生きて居る、自分が蛇になつて雪峯に食ひ附く所の鹽梅だ、佛法が自分の物になつた人でなければ此働きが出るものでない、だから斯ういふ話は、諱を犯さずして物を借りて佛法の話をして居るのだ、他人こそでない御互も修養して一つ活きた鼈鼻蛇に遇はなければいかぬ、或人が顔を洗う時に初めて本來の面目を識得したといふ、これは何かと言へば、顔を洗う時に初めて迷はない自己になつたといふことだ、それは矢張り顔を洗う所に一條の鼈鼻蛇に逢つたと言て宜いと思ふ、それから香嚴和尚は竹の聲を聞いて悟つたと云ふが之れは竹の聲に一條の鼈鼻蛇に逢つたと言て宜いと思ふ、靈雲和尚は桃の花の開ける所を見て悟つたといふ、さうすれば桃の花の開ける所に、一條の鼈鼻蛇に逢つたと言ても宜い、だから一條の鼈鼻蛇は何處にでも居る、居るけれども逢ふ人が少い、逢て一條の鼈鼻蛇になる人が少い、一條の鼈鼻蛇に逢つて貰ひたいといふのが本則の趣意だ、此の事は頌の方で能く分る。

〔頌〕頌云。玄沙大剛、長慶少勇、南山鼈鼻死無用、風雲際會

頭角生、果見韶陽下手弄、下手弄、激電光中看變動、在我也能遣能呼、於彼也有擒有縱、底事如今付阿誰、冷口傷人不知痛。

知痛。

【讀方】玄沙は大剛、長慶は勇少し、南山の鼈鼻死して用なし、風雲際會、頭角生ず、果して見る韶陽手を下して弄することを、手を下して弄す、激電光中變動を看よ、我れに在るや能く遣り能く呼ぶ、彼れに於てや擒あり縱あり、底事ぞ如今阿誰にか付す、冷口人を傷れども痛みを知らず。

【講話】玄沙大剛、長慶少勇、剛は剛力だ、玄沙は中々大剛の強い人だ、南山を用ひて作麼せんと言た、玄沙は實に大剛の所がある、長慶は勇少し、長慶和尚は只今日堂中大に人あつて喪身失命す、只人の言葉に附いて廻つて居るから勇が少い、過不及からいふと、玄沙の大剛は過ぎた方の鹽梅、長慶の勇少しは、及ばない所の鹽梅、過ぎたのもいかない、さうかと言て及ばないのは尚ほいけない、どつちもまだ蛇使ひの名人とはいへぬ、大事の蛇を二人で殺して了つて居る、モウ一つ之を言ふて見ると、玄沙

の方は逆風に柁を把る働きがある、長慶の方は順風に帆を揚げる働きがある、逆風に帆を把る働き斗りでもいかぬ、順風に帆を揚げる働きもなくはいかぬ、又順風に帆を揚げる働き斗りでもいかぬ、逆風に柁を把る働きもなくはいかぬ、柔い所に丈夫な所がなければならぬ、丈夫な所に柔い所もなくはいかぬ、玄沙と長慶は只一方のみに皆長けて居る、一方斗り長けて居るのではいかぬ、双方の働きがなければいかぬ、だから南山鼈鼻死無用、此長慶と玄沙と二人で南山の大事な鼈鼻蛇を殺して了つた、これから玄沙と長慶の二人を先づ此處で貶して置いて雲門の働きを賞める、風雲際會頭角生、これは易の中に、虎嘯けば風生じ龍吟すれば雲起るとある、だから風雲際會でなければいかぬ、人間でもさうだ、風雲際會すると出世する、どうも時機が来ぬといかぬ、風雲際會して丁度好い時機が来たから、死んで了つた蛇が頭を上げて来た、果見詔陽下手弄、といふのは、雲門のことを云ふ、雲門は詔陽に居た手を下して弄する、拄杖を投り出して自分が一條の鼈鼻蛇になつて、ア、怖い蛇が出て来た、蛇が出て来たと言ふのは、蛇使としての名人ではないか、其の名人雲門が手を下して弄す、下手弄、手を下して弄すと、二度いつた激電光中看變動、激電光中

といふのは、怖ろしく電がして凄まじい勢、實に拄杖が龍に化して雲を起し雨を降す所の働き、激電光中の變動を看よ、在我也能遣能呼、これは蛇を使う人のことを言ふので、私の知て居る和尚に古知知常といふ人がある、この人は蛇を使うことは名人で、蛇の袋を拵へて置いて、夏になると蛇を一杯入れて置く、其人の手が行くと蛇が自由になる、大きな袋へ蛇を入れて置いて、一間へ入れてそれを出す、女杯が行くとキャット言つて驚く、私も一遍行て驚いた、手を一寸やると蛇が皆這入て了ふ、妙なものだ、丁度こんな風に能く遣り能く呼ぶ、蛇を呼ぶと蛇がこつちにくる、そつちへ行くと示せば蛇が行て了ふ、蛇を使う事は雲門が誠に上手だ、於彼也有擒有縱、此の彼れといふのは、蛇の方に見るも宜いが、矢張り雲門に見た方が宜からう、擒といふのは捕へる方、縦といふのは放す方、捕へることも放すことも自由自在だ、斯う言ふて雲門を賞めて来た、けれども雲門ばかりではあるまい、此處の所で、長慶も蛇を使うことは名人だ、玄沙も蛇を使うことは名人だ、雲門も蛇を使うことは名人だが、暫く玄沙と長慶を落して見た、雲門一人をえらい賞めてあるけれども、實際は本則にある人は皆蛇を使ふことが上手な人ばかりさ、今は雲門のソラ蛇が出て来た蛇

が出て来たと言つた活手段を賞める爲に言葉の上で暫く玄沙と長慶を抑へたのだ。底事如今付阿誰。これは宏智禪師が自分の隨身の者に言ふた言葉だ。底事といふのは事に當るといふことで、今此の蛇を使つた所の此手際の宜いことは誰にか付したものであらう。雲門の斯ういふ蛇を使ふ手段は誰に之を付與したら宜からう。冷口傷人不知痛。冷口といふのは蛇が噛むことをいふ。蛇が人に噛み附くけれども痛みを知らない人が多い。痛みを知た人は少い。痛みを知つた人ならば蛇を能く知つた人だ。死んだ人許りで、活きた人が居らぬから、蛇が喰附いても痛みを知らぬ。皮下に血の無い人が多いやうだ。どうか血のある人になつて貰ひたいものだ。宏智禪師が最後の二句で、飽くまで座下の學人を誡められた様子が見える。然しこれも座下の人とさきめなくともいい、人々御互果して如何充分に回光返照して見らるゝがいい。

第二十五則 鹽官犀扇

【垂示】示衆云。刹海無涯不離當處。塵劫前事盡在而今。試教。

伊觀面相呈便不解當風拈出、且道過在什麼處。

【讀方】衆に示して云く、刹海涯り無きも當處を離れず、塵劫前の事盡く而今に在り。試みに伊をして觀面に相呈せしむれば、便ち風に當つて拈出することを解せず。且く道へ過什麼れの處にか在る。

【講話】示衆云、刹海無涯不離當處。刹といふは國土のこと、海といふは限の無いこと。で、刹海といふのは世界の無限な事をいふのだ。世界には限といふものはあるまい。今日五大洲六大洋といふが、まだ發見しない世界が幾らあるか解るまい。佛教では一口に三千大千世界といふ、先づ第一に欲界、色界、無色界、之を三界といふ、それから此三界を千集めたのを之を小千世界といふ、小千世界を千集めたのを之を中千世界と言ふ、中千世界を千集めたのを之を大千世界又は三千大千世界といふのだ。其大千世界に一人の佛が布教をすると言て居る、佛といふものは三世諸佛と言て澤山にある、それだからどうも國といふものは中々廣い、實は限りがない、だから世界は限なし、國といふものは幾らもあるが限がない、どんな限の無い國があつても、當

處を離れず、私共の履んで居る一步の所を離れて大千世界がある譯ではない。それから又千萬里向ふへ行ても一步を離れて向ふへ行くことは出来はしません。一歩づつ、履んで千萬里に行く、即ち一步の所に千萬里がある。だから脚下を空しくして歩いてはいかぬ、足元に十分氣を注いで居らなければいかぬ。古人も、脚下黄金上といふた、多くは皆脚下を忘れて了う、脚下を忘れて了うと道ならぬことを行る、何でも當處を離れてはならぬ。次に塵劫前事盡在而今、法華經杯を見ると、五百塵點劫といふてある。五百塵點劫といふと限ないことを言ふ、三千大千世界を焼いて粉にして了つて絹篩に掛けて、それを一粒宛千萬里置いて行く、詰り限無いことを説いて居る。其塵劫前の事盡く而今に在り、モウ昔の事を言ふときは、五百塵點劫といふことを言ふ、これは過去の限無きことを言ふたと御承知になれば宜い。過去の過去の限無い過去を指して言ふた所が盡く今にある、ズツと今日より過去の過去を尋ねて行きましても今日を離れて在る譯でない。此今日を離れて過去の過去のある譯でもない。未來もさうだ、これから未來の未來と幾ら未來に行つても今日を離れて未來がある譯ではない。過去でも未來でも今日が誠に大切だ。試教伊觀面相呈伊とは

學人の事だ、師家が學人に向つて今此處で、一つ私の目の前で呈露して見よ、己れの前で一つ佛法を露はして見よ。便不解當風拈出風といふのは師家の風だ、此師家の風儀に當つて師家の前で拈出して見るが宜い、そこへ出して見よ、所が拈出するところが解せられない、御互が修行して居る時でもさうだ、そんな理窟は止めて今此處へ佛法を出して見せよ、といふと赤い顔をしてモウ何とも言ふことが出来ぬことは幾らもある、どうもサア言つて見ろといふと出来ぬものだ。且道過在什麼處、そこへ出すことの出来ぬ過は學人の方にあるか、師家の方にあるか、過は何の處にあるのかと本則を響かした。

【本則】舉鹽官一日喚侍者、與我過犀牛扇子來者云、扇子破也。官云、扇子既破還我犀牛兒來者、無對資福、畫一圓相於中書一牛字。

【讀方】舉す鹽官一日侍者を喚ぶ我が與めに犀牛の扇子を過し來れ者云く、扇子破れぬ。官云く、扇子既に破れなば我れに犀牛兒を還し來たれ者對ふる無し。資福、一

圓相を畫いて中に於いて一の牛の字を書す。

【講話】舉鹽官。一日喚待者與我過。犀牛。扇子來。これは鹽官の齊安禪師といふて南岳の法嗣で却々有名な人だ。其鹽官和尚が一日侍者和尚を喚んで、丁度暑い時分だつたと見える、私の爲に犀牛の扇子を持って来て貰ひたいと斯う言ふた、犀牛の扇子と言つても斯ういふ扇子ではない、支那では御承知の通り團扇であります、日本のはちはだ、其團扇の骨が犀牛で拵へてあるのか或は團扇の中に犀牛が書いてあるのかどつちか譯らぬ、どつちでも宜い、犀牛の團扇を私の所へ持つて来て御覽なさい、總て斯ういふことは借事問だ、所が犀の扇子といふものは、圓い團扇のこと斗りを言ふのでない、私共生れてからいつでも犀牛の扇子を持つて来て居る、其持つて居る扇子を此處へ出して見よといふ意味である、所が侍者和尚は、扇ぐ團扇だとはかり思つて、者云、扇子破也。あの扇子は破れて了ひましたと言つた、スルと鹽官が云ふに、扇子既破還我犀牛兒來。さうか扇子は破れて了つたか、扇子が破れて了つたらどうか犀牛兒だけ私の所へ持つて来て貰ひたい、犀牛の骨丈け寄越して貰ひたい、斯ういふ鹽梅だ、佛教では相と性といふことをいふ、全體相といふものは形相に現は

れたものをいふ、性といふものは形相に現はれないものだ、所が此性といふものは、形に現はれないもので、此の性が因縁の力に依て形に現はれて來たものを相といふ、けれども相を離れて性は、性を離れて相はない、だから佛教では性相不二といふのだ、早く言つて見ると花の咲くのは性だ、花の咲くのも相だ、花といふ姿になつて居るのは相だ、相と性とは離れたものではない、所が侍者和尚は相の方に斗り目を著けて居て、性相不二といふことを知らない、それだから扇子は破れて了ひましたと言つた、鹽官和尚は性相不二を悟らしめんが爲に、扇子は破れたならばどうか犀牛兒、即ち性の方を俺の所に持つて來い、と言ふたけれども、者無對、侍者和尚何とも對へることが出來ぬ、そこへ資福といふ和尚が出て來て、さうして先づ對をして、畫一圓相於中書一字、一圓相は團扇だから丸く書いた、其中へ牛といふ字を書いて、あなたに扇子を上げますと言つて出した、此の資福といふ和尚は性相不二の扇子を出した、相が現はれて居る、けれども其の現はれたる相は空中へ圓を書いたのであるから一切の相といふものは皆是れ畫圖の形相であるから、佛法の性相不二の有様を資福が書いて出したのである、鹽官和尚は定めて喜んだらうと思ふ。

〔頌〕頌云。扇子破索。犀牛捲。擧中字有來由。誰知桂穀千年魄。妙作通明一點秋。

【讀方】扇子破れば、犀牛を索む、捲擧中の字に來由あり、誰か知らん桂穀千年の魄、妙に通明一點の秋と作らんとは。

【講話】頌云。扇子破索。犀牛。これは本則を一口に言ふた、扇子が破れたならば、犀牛兒を俺の所へ持つて來い。捲擧中字有來由。擧擧中の字といふのは、圓くした中へ牛の字を書いたことを言ふ、來由あり、ちやんと性相不二の道理を其處へ現はしたから、來由ありと言つた。誰知桂穀千年魄。一圓相の道理があるから、月の圓を持つて來たのは、餘程面白い、桂穀といふのは、月の異名だ、千年の魄といふのは、昔から三十日のことを魄といふ、三十日の月は暗くなつて、光も無い、侍者和尙が對へることが出來ぬやうになつて了つたのは、丁度三十日の月みた様に、眞暗であつた。妙作通明一點秋。といふのは、今此の資福和尙が一圓相を書いて、中に牛といふ字を書いた、丁度三十日の月が忽ちに通明一點の秋、十五夜の月の如くに、光明を放つて明るくなつて

來た鹽梅があるといふ意味である。

第二十六則 仰山指雪

〔垂示〕示衆云。冰霜一色。雪月交光。凍煞法身。清損漁夫。還堪賞玩也無。

【讀方】衆に示して云く、冰霜一色、雪月光を交ふ、法身を凍煞し、漁父を清損す、還つて賞玩に堪へんや也た無や。

【講話】是は文字の通りで別に六つかしい事が無い、冰霜一色、雪月交光、氷も白い物だし、霜も白い物だ、白い物と白い物、雪と月とどちらも白い物の光と白い物の光とを交へて居る、して見ると此二句は、宗門でいふ一色明白といふことになる、或は古人の言葉に、銀盤盛雪、明月藏鷺、といふことがある、是は洞山大師の「寶鏡三昧」に在る、そこで天桂和尙の隱寮の名前に藏鷺庵といふがあるが、是から探つたのである、銀盤といふのは、銀で拵へた皿、その皿に雪を盛つたと言うたら、銀も白し、雪も白し、明月も白し、鷺も白し、さうして矢張り是も一色明白です、氷霜一色、雪月交光、誠に一

點の塵埃も無い明白な處だ、それで宜さうなものだけだと宗門ではこの一色の處を嫌ふのである。向上一色の處は病である。法身といふものが一番佛法の極點になつて居る、今は其凍煞法身して了ふては何んの働もない、法身といふのは誠に清淨潔白なものだ、處が宗門では其清淨潔白な一色明白な處は病と見て居る、結構は結構だけれども、其の一色明白の處を越へねばならぬ、悟の上から云うと、一色明白の處は一分の悟であるがそれに縛られてはならぬ、悟に止つて居つては自由といふものが出来ない、悟に縛せられることになる、公案の一つか二つ位透つたなど、云つて師家より許されて自分も悟つたやうな氣になつて居る、どうかすると「一色明白」の悟に縛られて唯々高い處に登つた丈で、低い處へ下らぬから低い處の様子にはサツパリ解らぬ人がある、それだから、一色明白の處を轉じねばならぬ、其轉ずるのを「一色點破」といふのである、「一色明白」といつて悟の處でありまた精神の清淨潔白の所であるけれども、其處に足を止めて居つてはいかぬ、それを點破しなくてはいかぬ、高い處へ登つて己は佛だと言つた丈で、下に下つて下の者を濟度する働が出来なければ可笑なものだ、明白一邊の處は法身を凍煞して了つて居る、凍は

凍へる、煞は殺す凍へ付いて了つてはサツパリ働きがない、だから能く「佛縛」法縛なるといふことを言ふ、佛に縛られ法に縛られる、何でも阿彌陀様でなければならぬと言ふ、何でも法華でなくちやならぬと言ふ、それも結構だけれ共、人に依つては法に縛られて了つて居る事がある、そうすると解脱の法門を得たとは言はれない、解脱の上でなければどうかすると佛に縛られ法に縛られて了ふ、そこで趙州が「老僧、不居明白裏」と言つたのは大變宜い、己は悟といふ處にも居らない、悟といふ處に縛られて居つては自由といふものは出来ない、法身は全體無相なものだ、又無相なもの程自由自在なものはない、形あるものは全體自由を缺いて了ふ、それから又無相なもの程私は大きなものは無いと思ふ、どんな大きなものでも形の有るものは測られる、太陽でも地球でも形の有るものならば測ることが出来るけれども、形の無いものは測ることが出来ない、法身は全體形が無い、所謂法身は無碍自在なものだ、其法身は縁に觸れて色々の形の在るものに現はれて來る、それだから其法身を凍煞して了つたでは自由に働くことが出来ない、所謂法身の處に止まつて居つては佛縛だ、法身佛といふものに縛られて了ふ、夫故に無繩自縛で繩も無いのに自分で

自分を縛つて居る人が幾らもある、自分の精神界を誰も縛つては呉れないのに自分で無繩自縛をして居る、三祖大士は「智者、無爲、愚者、自縛」といはれた、誠に好い言葉だ、智慧の有る者は無爲、無爲と言ふたら無相の方で自由自在だ、それから愚者は繩も無いのに自分で縛つて居る、さうすると法身を凍煞するといふ事になる。法身に尻た張り附いて了ふ、それではサツパリ自由といふことは出来ない。清損漁夫。漁夫は世は皆濁れり我獨り清めり」と悟つた支那のあの漁夫だ、世の中の人は皆濁つて居る、我獨り清んで居るといふのも偉い結構だけれども、それも一つの病でせう、世の中の人は實に濁つて居る困つた世の中だと言うて居るのも矢張り是は清損だ、己ばかり清み切つて居つて世の中を濁つたと見て了つた丈けでは困る、世の中と一緒になつて而も世の中に染まないやうにしなければならぬ、程伊川と程明道の話がある、二人共大學者である、或時に兄弟揃つて餘處へ招ばれて行つた、今日いふと藝妓みたやうな者を席に出した、弟の程伊川は大に怒つた、失敬千萬な、人を招待して置いて藝妓風情を我が席上に出すといふので怒つて當到歸つて了つた、處が兄の程明道の方は構はず其處で酒を飲んで居つた、明日弟が兄の處へ來て怒つ

た、ア、云ふ處で酒を飲んで居るのは怪しからぬ、人を招待して置いて藝妓みたやうな者を出して失敬千萬だと言つて兄の處へ怒つて行つた、さうすると程明道が「さうかな昨日はあの席上に藝妓が居つたかな、私の眼中には藝妓は居らなかつた、今此處に藝者は居らないけれどもお前の精神には藝妓が居ると見える」と言つたといふが、實に世の中は濁つて居つても濁つた世の中と一緒になつて行つて其身を清まして行くのが宜い、自分ばかり清んで居つても人は皆濁つて居ると思ふのは漁夫を清損して居るものである、大清淨の處に自分で清まして居る、それも矢張り一つの病かも知れぬ、聖人は物に凝滯せず世と推移つて行かねばならぬ、けれども悪い者に化して行くことはいかぬ、だから修養だ、所謂凍煞法身、清損漁夫といふやうに唯々向上の處に止つて居ると向上一色の病となる、或は又坐著白雲、不宗妙、白雲といふは向上一色の高い處だ、白雲の處に坐著して据り込んで了ふてはどうも宗旨の妙とは言はれない、唯々上の方ばかりに居つて下の方の働きがチョツとも無い、此處らもさうで、凍煞法身、清損漁夫といふのは白雲に坐著して了ふ、向上を知つて向下を知らない、所謂向上とは無差別なもので無差別を知つて差別の社會

に出て働くといふことを知らぬ、自分ばかり上の方に澄し込んで居つた處が仕方が無い、一つの病と言はなければならぬ。還堪賞玩也。無賞玩云々とは何と斯う云ふ處を賞めたものであらうかどうであらうか、そんな處を賞める者も有るかも知れない、けれ共全體それは賞むべき處のもので無い。

【本則】舉仰山指雪師子云、還有過得此色者麼。雲門云、當時便與推倒。雪竇云、只解推倒不解扶起。

【讀方】舉仰山雪師子を指して云く、還つて此の色を過ぎ得る者有りや。雲門云く、當時便ち與めに推到せん。雲竇云く、只推倒を解して扶起を解せず。

【講話】舉仰山指雪師子云、還有過得此色者麼。是は宗門でも永平寺などへ行つて見ると七堂伽藍の處には法堂といふがある、其法堂は主人が高い處に登つて上堂したり説法をする處だ、本尊様の祭つてある處を佛殿と云ひ、その佛殿の裏の方に大きな伽藍があります。アレが所謂法堂だ、その説法をしたり問答をしたりする處の法堂の真中に臺が有る、その高い臺に登る處の兩側に雪師子といふ獅子があ

る。この獅子は永平寺にもある、御宮などに行つて見ると能く石で拵えた獅子が御宮の兩際にある、此間も出雲の大社へ參拜しましたが何れへ行きましても獅子は御宮の門の兩際にある、矢張り宗門でも法堂といふ處の兩際に獅子がある、その獅子は白い獅子で無くちやいかぬといふ事になつて居る、近頃はどうかすると毛丈け青く塗つたりしますが其れは不可い、毛でも何處でも白獅子と言つて、獅子は白毛といふのが作法になつて居る、白い獅子といふのは、邸内にある獅子でも宜しければ雪で拵へた獅子でも今の法堂に在る獅子でも、庭の飾になる獅子でも何でも構はない、先づ雪獅子といふ白い獅子があつたと見える、之を指して言ふのに誠に白い獅子だけれども此白い獅子の色に過ぎた白い物が有るだらうかどうか、何でも總ての上に油断をせぬといふのが禪宗だ、白い獅子を見ると獅子の上に付いて直ぐに佛法の話がある、茶を飲む上に付ても直ぐに佛法の話がある、掃除の上に付ても佛法の話がある、總ての上が皆佛法になつて行かんければならぬといふのが禪宗の持前で、唯々支那の公案の場合丈けが公案だと思つちや不可ぬ、それを聞く時に聞いた方は仰山の拈提だと思はねばならぬ、又饒舌る者は己が仰山になつて

饒舌らんければならぬ、此公案は支那の話だけ共昔の話では無い、今日の人は今
日で何時でも禪宗の生きた學問をせんければいかぬ、文字の上の争では無い、こ
ろで仰山は「此色に過ぎ得る者ありや」と問うた、即ち先程申した「一色點破」の事、此
處は唯々白いといふ清淨潔白な處に止まりてはならぬ、そこを一つ點破して自由
に働く者が有るかどうか、所謂魚を釣る餌を下げたやうなものだ、本當に活きた魚
が此中に居るかどうか、一色點破の自由な働きをする者が有るかどうか、どうも死
人ばかり多いやうだがどうだ、斯う言つた時に誰も働いて出る者が無かつた、見
える、それから後で雲門はそれを聞いて何と言ふたか、雲門云、當時便與推倒、惜しい
事をした、俺が仰山が言つた當時に居つたならば直ぐにそれを推倒したらうに、獅
子なんか己の眼には見えぬと蹴倒して了ふものを、そこに一色點破の處が有る、趙
州の所謂老僧不居、明白裏、で、私の眼にはそんな白い獅子なんていふ物は見えない、
そんな事を言うたら蹴倒してやつたらうに、斯う雲門が言つた、全體さう云ふ人を
仰山は欲しい、仰山の處にはそんな者が無かつた、見える、雲門がそんな事を言つ
たものだから、雪竇は又雪竇云、只觸推倒不、解扶起、雲門和尚お前は唯々蹴倒すだけ

は能く分つて居るやうだが蹴倒したばかりでは不可ない、それを扶けるといふ扶
起の働きの無ければなるまい、それはさうさね、白い物を蹴倒して了つたら色が全
く無くなつて了ふ、無色界が宜いと思つて居つたら是も一つの病だ、雲門は白い處
を推倒して了つたけれども、さうすれば無色界になつて了ふ、又働きの出來ない、此
處が大變面白い、今日の人でもさうだ、推倒の強い人もあり扶起の強い人もある、無
暗と推倒して了つて何でも破壊主義みたやうにやる、人のやる事は何でも破壊し
て了ふ、推倒見識の強い人が有る、それは矢張り病です、推倒の強い人は又扶起すこ
いふ事も知らんければいかぬ、叱るばかりで行くもので無い、褒める時なければな
らぬ、褒めるばかりではいかぬ、叱る時なければならぬ、雪竇が「お前さん推倒ばか
り合點したやうだが扶起といふ事が分らぬやうだ」と言つた、此三人は優劣が無い。
仰山が白い獅子を出して「此色に過ぎる者が有りや」と言ふのは仰山の慈悲だ、此色
を點破する働きの者を一人欲しいと言ふ、それから雲門は「私はそんな白い處に居
りはしない」と推倒して了つた、さう云ふ病に憑付かれないといふ事を示さんが爲
に雲門は言つて居る、それから雪竇は「唯推倒ばかりやつても扶起を知らねばいか

ぬ、扶起といふ事が無ければ推倒ばかりでは佛法にならない、推倒の中に扶起があり、扶起の中に推倒が這入つて初て宗門の坐禪といふ處になる。此三人は丁度鼎の三足のやうだ、此三人揃つて居つてナカ／＼の働きが茲に有るから面白い、此處を仰山の言ふのに喩へて見ると獅子は白いけれども此獅子に過ぎる物ありや、さうすると雲門は扇子なんか何處に在る、是は紙だ、是は竹だ、是は要だ、何處に獅子といふ物が在る、皆斯の様に一々名を附けたら獅子といふ物は無い、雲門は獅子は無いと言つた、雪竇は「イヤさうだけれども是は紙と竹とを合せたのであるからそれが即ち獅子では無いか」と言つた、是は扶起の方である、此處にコツブがあるが果してこれがコツブか、コツブにあらず、分析して見るとコツブは無い、けれどもコツブで無い物即ち之をコツブと名ける、人間、人間にあらず、分子の集合に依つて人間になつたのだ、全體有りはしないけれ共それを人間とするのだ、何でもさうだ、丁度此三つが無ければ法の活動は出来るもので無い、詰る處は三人共に慈悲だ、其慈悲は何だ、黒とする事も出来ぬ、白とする事も出来ぬ、長いとも言へぬ、短いとも言へぬ、扶起にも墮ちず、推倒にも墮ちず、中間に一つ、茲に白いと云ふ名を命けることの出来

ないものが有る、けれども講釋も出来ない、説明も出来ない、それを合點させるのが三人の慈悲だ。

〔頌〕頌云。一倒一起雪庭師子、慎於犯而懷仁、勇於爲而見義、清光照眼似迷家、明白轉身還墮位、衲僧家了無寄、同死同生何此何彼、暖信破梅兮春到寒枝、涼颺脫葉兮秋澄潦水。

【讀方】一倒一起雪庭の師子、犯すことを慎んで仁を懷き、爲すに勇んで義を見る。清光眼を照すも家に迷ふに似たり、明白身を轉ずるも還つて位に墮す。衲僧家了に寄ること無し、同死同生何れをか此れとし、何れかを彼れとせん。暖信梅を破つて、春寒枝に到る。涼颺葉を脱して、秋潦水を澄ましむ。

【講話】頌云。一倒一起雪庭師子、倒れて見たり、又起きて見たり、あの白い庭先の獅子が踊つて居る。雲門は獅子を推倒して、倒れたのだ、雪竇は扶起してやつたから起きて來た、誠に獅子が臥て見たり起きて見たり、起きて見たり臥て見たりして踊つて

居るやうだ。是は木や石で拵えた御宮の前の獅子だと思つちやいかぬ。茲に名も無い姓も無い活獅子が居る、それが起きたり轉んだり、轉だり起きたりして踊つて居る、三人は是は獅子使だ、獅子を巧く使つて居る。愼於犯而懷仁、之を古人が雲門と雪竇とに當てゝ見てあるが、どうもそれぢや宜く無い、三人とも犯すことを愼んで仁を懷いて居る、何でも宗門では犯すといふ事は不可い。或は此處が法身だといふとそれに屁た張り付く、是が向上だとか、是が扶起だとか、是が推倒だとか、是が無差別だとか、是が差別だとか言つて偏頗に墮ちて了ふ、それを犯すことになる。自由といふことが出来ない、今此處は犯すことを愼んで仁を懷くので、仁は情だ、犯さないやうに所謂言葉で説いて居ることは説いて居るけれども、言葉に關係しない、茲に活きた物があるからそれを合點せよといふ。本則に當てゝ見ると、還有過得此色者、で此白い色より未だ過ぎた物が有るかと言つて居つた、其白いといふことに拘泥しては不可のだ、一色明白といふ處に足を停めては不可ぬ、是が仁を懷いたのであります、白い處が宜いと言つて居つては不可ぬ、悟の處に喰付いて居つては不可ぬ、佛の境界に執著して居つては駄目だ、それに執著させぬ爲に、裏の方の活きた方面

を合點させる爲に、此色に過ぎたる者ありやと言つた、犯を愼んで仁を懷いて居る、情が此處に在る、白いと言つたら犯した、黒いと言つたら犯した、私共の本心は白いか、白いと言つても犯して居る、黒いと言つても犯して居る、白いでも無い黒いでも無い物が茲に一つある、それを知らせんが爲に、此色に過ぎ得る者ありやと言つたのは犯を愼んで仁を懷いて居るのだ、勇於爲而見義、是は古人の言葉に、見義不爲無勇也といふがある、是は何だといふと、有過得此色者麼といふのはさう云ふ白い物に喰付いて了つちや不可ぬぞよ、それだから爲すに勇んで義を見る様子がある、是は仰山の方に繫かつて居る、其次は又雲門にも繫かる、雲門が當時、便爲推倒といつたのは、愼於犯而懷仁、勇於爲而見義に當る、それから又雪竇が只解推倒、不解扶起と言つた方にも是が繫かる、三人共に皆此働きが有る、三人に皆繫かる、それか多くの人は、愼於犯而懷仁、と云ふのは雲門の方へ繫けて見る、勇於爲而見義、といふのは雪竇の方に繫けて見ると言つてありますが、一通りはそれで宜からうけれども、三人共に此二句に繫つて居る、三人共に決して優劣は無い、それから白いといふ縁から清光照眼似迷家と言つた、雪といふ物は清光な物で、其處らの地面は山でも川でも

家でも皆眞白い雪だ、自分の家が分らぬ、見ても何うも分らぬ、唯々白といふ一色、白銀の世界だ、それだから其白いといふ事も一つの迷です。明。白。轉。身。還。墮。位。是は趙州が言ふた通り、老僧不居。明白裏で、白いといふ明白も身を轉じなければ不可ぬ、其處に停つて居つては不可ぬ、明白といふのは悟りの處で、その明白の身を轉じても却つて位に墮する、此處は又却つて無色界の位に墮することになる、轉じは轉じたけれども却て位に墮して所謂功勳の位に墮す、此二句は病の方を言つた、白いといふ處に足を停めて居つては不可ぬ、身を轉じたといふ其轉じた處に於て再たび位に墮ちて了ふ。禪。僧。家。了。無。寄。我々は即ち禪僧家です、全體禪門の僧侶は、了無寄といふ處に居らんければ不可ぬ、何でも物に寄つて居つては不可ぬ、十二時中不依倚、一物と言ふやうに全體寄つたことが有りはしない、朝から晩まで考へて御覽、八時だ八時だと思ふけれ共八時が已に九時となる、それで九時だと思ふと十時になつて了ふ、時といふ物に固塊はない、昔で言ふと亥の刻、或は丑の刻と言つても犬が出て來た譯では無い、牛が出て來た譯でも無い、妙なものだ、時といふものは其名前が有る丈けだ、名前が有つて一つも物に寄つて居らない、春だと言つて花が咲いて居る、と

思つて居る内に夏となる、直きに秋になつて來て一つも寄つて定つたものがない、だから其通り世界は全體寄るといふ固塊はない、不依倚の現成と見ていゝ、だから、禪僧斗りが無寄じやない、ところが、全體人間は色々な物に寄つて心を束られて居る、禪僧はこれがない、だから、了無寄といふのだ。名譽に寄つて居る人は、名譽を持つて行く、と直ぐ動く、金に寄る者は金の話をすれば屹度動く、何か精神の寄つて居る處のもので動かせば人を動かすのは譯は無い、それだから、八風吹けども動せずといふのは精神に寄つた處が無いからだ、何か一物に寄つて居つてそれに固まつて了つたならば其人を動かすことは譯は無い、金剛經を見ると、色聲香味觸法に住せずとあるが佛は一切に住して居らない、だから佛を動かすことは出來ない、一つの物に捉はれ一つの物に喰付いてはそれ切りである、精神の上に於て解脱の有る人は誠に自由自在なもので、富貴にも寄らず名譽にも寄らず、差別にも寄らず無差別にも寄らず向上にも寄らず向下にも寄らぬ、だから精神の上に束縛を離れて了つて自由無礙な處がある。同。死。同。生。全體死ぬ時には死と一緒になつて了ふが宜い、生きる事など考へないが宜い、生きる時には生きると一緒になつて了ふが宜い、死ぬ

ことなど考へる必用はない。死ぬ時に死度く無いと言ふから苦しむ、生きる時には生になりきらないから徹底した活動も出来ぬのだ。死といひ、生といひ、一方へつきぬけて了ふと死生を透脱されたのだ。かうなると、生にして、生にならぬ、死にして死にならぬ、生を離れ死を離れて居るのだ。かゝる境界に達した人は幾らもあるまい、第一、御釋迦様の滅度の時に、吾れ滅を得ること悪病を除くが如く、豈懽喜せざらんや」と言はれた誠に生死を離れて了つて居る、死ぬのは丹瘤でもとれたやうな心地で愉快なのである。又十返舎一九が

此世をばどりや御暇にせんかうの煙と共に灰左様なら
 と言つて死んだと云ふ、丸で生死の中に居て生死を離れて了つて居る、生きる丈け生きて了へば死ぬるより外に分別無御座候」と言て死んだ人もある、誠に生死の中で生死を皆離れて了つて居る。全體生死といふものは有りはしない、妙なもので死といふことは佛教の上から言ふと、因縁所生となつて居る、因縁に依つて生れ、因縁に依つて死す、因縁が全體の間配りをして居るので、本當の如來本眞の佛は生でも死でも無い、因縁が死んだり生きたりして居る、本眞の如來は生死に與つて居ら

ないだから、淨法界、眞本無、出沒」となる、全體死ぬ時には死に一緒になつて了ふが宜い、生の時も同じ事、熱い時には熱いになりきるがよい、其時熱を脱して了ふ、寒い時も寒いなりになつてしまふと寒さを脱して了ふ、これをば凡夫といふ者が熱い寒い寒い熱いの戦ばかりして居る、だから何此何彼で、法の上に熱いも寒いも有りはせぬ、然るに彼此といふものを立てたまでの話だ、又自と他といふても宜しい、私の眼から皆さんを見ると皆他だ、皆さんに於ては皆自になつて了ふ、自他といふもの唯々方角に依つて違ふ、法には全體自他は無い、其人の上に自他が有つて法の上には自他は有りはしない、彼と此といふのも暫く彼と此とを立てたまでの事、此處で雲門が推倒と言ひ雪竇が扶起と言うた、即ち暖信破梅兮春到寒枝、是は扶起の方だ、春になると暖かになつて来る、その暖かな音信で梅を破るといふのだ、春風が吹いて梅の花がバツと開く、今までは寒枝で冬は枯木のやうな梅であつたが、春風に逢ふと花が咲いて来る、涼颯、脱葉兮秋澄、涼水、是は推倒の方を言ふのだ、涼颯とは秋から冬に掛けて吹く涼しい風で、一葉落ちて天下の秋を知る、秋になると一番先きに桐の葉が落ちる、その頃にはあの涼水、どの河でも水が澄んで世界が何となく明徹清

爽になつて来る、是は推倒の方を言ふ、春の花は秋に凋む、その花が冬の中にチャンと春の用意をして居つて、梅の蕾が其處に寒苦を経て清香を發する、誠に雪の中に既に春の花を咲かせる用意がある、さうして見ると丁度土用半ばに秋風が吹く、土用と秋とは離れたもので無い、土用が過ぎんければ秋になる氣遣は無い、土用と秋の風と離れたもので無い、冬と春と離れたもので無い、だから扶起の中に推倒があり、推倒の中に扶起がある、今から考へて見ると今朝といふものは有りはしない、今朝は過ぎて了つて、今は日が暮るといふ午後である、推倒になつて了ふ、朝から晩まで推倒では出る日が無くなつて了ふ、推倒の中に扶起があり扶起の中に推倒がある、扶起と推倒は離れたもので無い、けれども喰付いたものかといふと喰付いたものでも無い、春と冬とは喰付いたものか、喰付いたもので無い、それなら離れたものか、離れたものでも無い、誠に此處に法の面白い道理であるのである。

第二十七則 法眼指簾

【垂示】示衆云。師多脈亂、法出姦生、無病醫病、雖以傷慈、有條

攀條、何妨舉話。

【讀方】衆に示して云く、師多ければ脈亂れ、法出で、姦生す。無病に病を醫するは以て傷慈なりと雖も、條有れば條を攀づ、何ぞ舉話を妨げん。

【講話】此間も他方へ行つたら、ある病人を甲の醫者が診て、之は疫痢だと言つた、所の人も大變迷つて餘計な入費を消つたり餘計な心配をしたといふ話を聞いた、御醫者は大勢無ければならぬが、然も、師多脈亂、醫師多いと脈亂れて病人が迷ふ事があるかも知れませぬ、是は何かといふと全體法の本然の處へ行く、病氣は無い、病氣は無いけれども色々の名前を命けて病氣を拵えて居る、色々の妄想分別で以て此方から病氣を拵えて居る、我々の本心に入つて見ると病氣などは無い、自分で妄想分別の爲に病氣を起して自分で苦んで居るのだ。法出姦生、ズーツと太古には全體法も何も有りはしない、繩を結んで策て之れを法律に代へたといふ時分には、人間に恐る可き、悪いことをする者も無かつた、處が法律が殖えるに随つて姦生じて